

の かど
野 門 遺 跡

一般国道10号線延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2006

宮崎県埋蔵文化財センター



野門遺跡 1. 南東上空からの遺跡全景（右後方は高平山、左後方は行藤山）



野門遺跡 2. 北西上空より遺跡全景（左は松山の集落、奥は五ヶ瀬川）



野門遺跡 3. 古代竪穴住居跡検出状況 東より (Ⅲ層上面の地震起源と思われる亀裂群)



野門遺跡 4. 弥生時代 竪穴住居跡 東より

序

埋蔵文化財の保護・活用に対しまして、日頃より深い御理解をいただき厚く御礼申し上げます。

宮崎県教育委員会では、一般国道10号延岡道路建設事業に伴い、野門遺跡の発掘調査を行いました。本書はその報告書です。野門遺跡では旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代の遺構・遺物が検出されました。こうした先人の歩みを振り返り、郷土の歴史を解明する貴重な資料が得られたことは、大きな成果と言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導・御助言をいただいた先生方、並びに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成18年9月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 清 野 勉

例 言

1. 本書は、一般国道10号延岡道路の建設に伴い、宮崎県教育委員会が主体となり宮崎県埋蔵文化財センターが行った野門遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所の依頼を受けた宮崎県教育委員会が主となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査の期間は、平成16年9月27日から平成16年12月3日までの間である。
4. 現地での実測、写真撮影等の記録は、おもに赤崎広志、佐竹智光が行い、本書に使用した遺物写真は赤崎が撮影した。遺跡全景の空中写真は、ふじた航空写真に、基準点測量、グリッド杭設定は東九州コンサルタント株式会社に委託した。
5. 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。遺構図面の作成、トレースはおもに赤崎、佐竹が行い、遺物実測、トレースは整理作業員の協力を得て赤崎が行った。
6. 本書で使用した位置図は、国土地理院発行の2万5千分の1図を基に作成した。
7. 土層断面および土器の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帖』に拠った。
8. 本書で使用した方位は、磁北であり、座標北を用いたものはG.N.と表記する。レベルは海拔絶対高である。国土座標は世界測地系を使用している。
9. 本書では、遺構に次の略号を使用している。
 竪穴住居跡－S A 土坑－S C
10. 本書の執筆は第1章第1節を松林豊樹が行い、そのほかの執筆と編集は赤崎が行った。
11. 出土遺物・その他諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 位置と環境	2

第II章 遺跡の概要

第1節 調査の経過	5
第2節 遺跡の層序	7

第III章 遺跡の記録

第1節 旧石器時代の遺物	13
第2節 縄文時代の遺物	18
1 縄文土器	18
2 石器	22
第3節 弥生時代の遺構と遺物	27
1 竪穴住居跡	27
2 炭化物集中土坑	29
3 弥生土器	29
4 石器	30
第4節 古墳時代の遺構と遺物	35
1 遺物・焼土集中区	35
2 土師器	37
第5節 古代の遺構と遺物	41
1 竪穴住居跡	42
2 土師器	42
3 須恵器	44
第6節 その他の遺構など	45

第IV章 まとめ	47
----------	----

挿 図 表 目 次

第1図 遺跡位置図(1/25,000)……………	4	第26図 弥生時代石器実測図(2)……………	34
第2図 野門遺跡周辺地形図(1/3,000)およ びグリッド配置図(1/600)……………	6	第27図 古墳時代遺物・焼土集中区 実測図……………	36
第3図 堆積概念図……………	9	第28図 古墳時代遺物・焼土集中区 分布図……………	37
第4図 調査区土層断面図……………	10	第29図 古墳時代土師器実測図(1)……………	38
第5図 野門遺跡遺構分布図……………	11	第30図 古墳時代土師器他 実測図(2)……………	40
第6図 野門遺跡遺物分布図……………	12	第31図 古代遺物分布図……………	41
第7図 旧石器時代石器分布図……………	13	第32図 古代竪穴住居跡実測図……………	43
第8図 旧石器時代石器実測図(1)……………	14	第33図 古代竪穴住居跡出土遺物 実測図……………	43
第9図 旧石器時代石器実測図(2)……………	15	第34図 古代土師器・須恵器実測図……………	44
第10図 旧石器時代石器実測図(3)……………	16	第35図 土坑実測図……………	46
第11図 縄文時代遺物分布図……………	17		
第12図 縄文土器実測図(1)……………	19	第1表 延岡周辺の丘陵における 基本土層……………	7
第13図 縄文土器実測図(2)……………	20	第2表 野門遺跡の基本土層……………	8
第14図 縄文土器実測図(3)……………	21	第3表 野門遺跡の土層成因と 遺物の層位分布……………	8
第15図 縄文時代石器実測図(1)……………	23	第4表 野門遺跡石器観察表(1)……………	49
第16図 縄文時代石器実測図(2)……………	24	第5表 野門遺跡石器観察表(2)……………	50
第17図 縄文時代石器実測図(3)……………	25	第6表 野門遺跡土器観察表(1)……………	51
第18図 弥生時代・古墳時代遺物分布図……………	26	第7表 野門遺跡土器観察表(2)……………	52
第19図 弥生時代竪穴住居跡実測図……………	28	第8表 野門遺跡土器観察表(3)……………	53
第20図 弥生時代竪穴住居跡 出土土器実測図……………	28	第9表 野門遺跡土器観察表(4)……………	54
第21図 弥生土器出土状況実測図……………	28	第10表 野門遺跡土器観察表(5)……………	55
第22図 弥生時代炭化物集中土坑実測図……………	29		
第23図 弥生土器実測図(1)……………	31		
第24図 弥生土器実測図(2)……………	32		
第25図 弥生時代石器実測図(1)……………	33		

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

平成 8 年、建設省九州地方建設局延岡工事事務所は、延岡市周辺における高規格道路（延岡道路、北方延岡道路）整備事業に着手した。

宮崎県教育委員会は、平成 6 年度に国の補助を受けて延岡市～西都市周辺を対象とした詳細分布調査を実施しており、この成果を踏まえ、同事業による埋蔵文化財への影響や保護の方法について協議を開始した。以来、現在も同事業に伴う協議、調査を継続している。

延岡道路は、I 工区（延岡 J C T～北川 I C）、II 工区（延岡南 I C～延岡 J C T）の 2 つの工事区に分けて事業が進められているが、ここに報告する野門遺跡は、I 工区内に所在する。

平成 14 年度の協議の結果、野門遺跡は未買収地を除いて、平成 15 年度から調査を実施することとなっていたが、調査対象地内には、地形改変が著しい部分もあったため、15 年度末に確認調査を実施した。この結果、遺構・遺物は確認されなかったが、対象地内で縄文時代～古墳時代にかけての遺物が多く表採できたことから、改めて平成 16 年度に部分的な調査を実施し、遺跡の残存が確認されたため、平成 16 年 9 月 27 日から平成 16 年 12 月 3 日まで発掘調査を実施した。

第 2 節 調査の組織

野門遺跡 発掘調査（平成 16 年度）

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	宮園 淳一
副所長兼総務課長	大園 和博
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
主幹兼総務係長	石川 恵史
主幹兼調査第四係長	近藤 協
同 主 査	赤崎 広志
同 調査員（囑託）	佐竹 智光

野門遺跡 整理および報告書作成（平成 17 年度）

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	宮園 淳一
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総 務 課 長	宮越 尊
主幹兼総務係長	石川 恵史
主幹兼調査第四係長	近藤 協
同 主 査	赤崎 広志

野門遺跡 報告書印刷（平成 18 年度）

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	清野 勉
副 所 長	加藤 悟郎
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総 務 課 長	宮越 尊
主幹兼総務担当リーダー	高山 正信
主幹兼調査第四担当リーダー	近藤 協
普及資料課主査	赤崎 広志

第3節 位置と環境

延岡市は、県の北部太平洋岸に位置し、九州山地や大崩・祖母・傾山系に源を発する五ヶ瀬川、北川、祝子川の下流域である。これら河川の沖積平野を中心に周辺山地や、丘陵地より構成されている。縄文海進時には五ヶ瀬川分岐近くの天下町付近まで海進したと思われ、その後、各河川の侵食運搬作用により流下した堆積物が、日向灘の沿岸流による海岸砂州でとめられ沖積平野を形成した。沖積平野には、市街地や住宅地、工業地域が集まり県北部の中心都市となっている。平野の北方には行藤山（むかばきやま）(829.9m)、可愛岳（えのたけ）(727.7m)といった火成岩からなる急峻な山体が高平山（こうびらやま）(406.6m)や岡富山（おかとみやま）(198m)などの堆積岩からなる低山を貫いて分布し、南方には愛宕山（あたごやま）(251.2m)から南西方向に連続する堆積岩からなる山地が分布している。五ヶ瀬川流域には、阿蘇火砕流堆積物の堆積とその侵食によって形成された河岸段丘と平坦な台地や、丘陵地が分布する。野地・大貫地区には五ヶ瀬川と大瀬川の分流により、山地から分離された野地丘陵と埋積谷低地が分布している。各河川は、山間部では谷底低地、下流部では氾濫原低地を形成している。

野門遺跡の所在する松山地区は、五ヶ瀬川左岸の氾濫原低地に水田をつくり、小規模な海成段丘と思われる平坦地形上に集落が営まれ、北側の高平山から続く裾部稜線上に果樹等の耕作地が続いている。

野門遺跡周辺には、本遺跡と同様に南に五ヶ瀬川を臨み、北に高平山へと続く丘陵上に松尾城跡（第1図-2）があり、1986,87年に調査が行われた地蔵ヶ森遺跡（第1図-3）など多数の遺跡が分布している。以下時代別に概観する。

旧石器時代では、東九州を代表する旧石器遺跡のひとつである赤木遺跡（舞野町）がある。1985年の第1次調査で瀬戸内技法が見られるナイフ形石器文化の赤木第1文化層、細石器を中心とする赤木第2文化層が確認されたことを皮切りに、これまで13回の調査を実施しており、始良Tn火山灰下位からナイフ形石器、剥片等の出土を確認している。このほかにも、地蔵ヶ森遺跡（第1図-3）からは搔器、使用痕剥片が出土、黒土田遺跡・中尾原遺跡（細見町）からナイフ形石器、剥片尖頭器、細石刃核などが出土、畑山遺跡・山田遺跡（小川町）からAT下位からナイフ形石器、礫器、剥片、チップ類、AT上位からナイフ形石器、剥片尖頭器などが出土するなど、延岡の旧石器遺跡の多くが五ヶ瀬川もしくは、五ヶ瀬川の旧流路流域の台地、丘陵地上に分布している。片田遺跡（片田町）、林遺跡（伊形町）は愛宕山南方の沖田川流域であるが、沖田川がかつて愛宕山南方を流下していた旧五ヶ瀬川であり阿蘇火砕流でせき止められ、現在の流路に変化した（宍戸1996）との考えによれば、いずれもを五ヶ瀬川が運搬堆積した祖母傾山系の硬質な石材を近隣で採取できた遺跡としての類似性がある。

縄文時代では、県指定史跡の愛宕山洞穴（愛宕町）から縄文時代後期の貝類、獣骨、土器、石器及び人骨、延岡市指定史跡の沖田貝塚（沖田町）から貝類、魚骨、獣骨が出土し、大貫貝塚（大貫町）から、縄文早期～前期の貝類獣鳥魚骨と土器、石器が、高野貝塚（第1図-4）から貝類、獣魚骨が出土している。縄文海進時、沖積平野は海底であり平野周辺の台地、丘陵地上の複数の遺跡から集石遺構、炉穴などの遺構とともに縄文土器や石鏃などの石器が多数出土している。主なものとして、地蔵ヶ森遺跡（第1図-3）、今井野遺跡（第1図-5）、吉野遺跡（吉野町）、山田遺跡（小川町）などがあげられる。

弥生時代では、1990,91年に調査された中尾原遺跡（細見町）が県北最大の集落遺跡であり、竪穴住居跡62軒、掘立柱建物跡2軒、土坑百数十基を検出した。野田町八田遺跡（第1図-6）では不整形

の方形住居跡1軒、土器集積坑、柱穴群、溝状遺構が検出された。恒富本村遺跡（恒富町）では打製石斧、石包丁などの石器と瀬戸内系のものを含む多数の弥生土器が出土している。差木野遺跡（差木野町）では、瀬戸内の影響を受けた弥生土器が含まれ、1991年の調査で水田跡を検出している。延岡城内堀跡（本小路）では、水田の一部を検出し土止め用の矢板、木製農耕具、多数の弥生土器が出土している。

古墳時代では、延岡市内には、国指定南方古墳群や県指定延岡古墳群、県指定史跡南浦石棺群（熊野江町）、上多々良箱式石棺群（岡富町）、檜山古墳群（檜山町）、古川古墳（古川町）、石田西の迫古墳（石田町）、上ノ坊古墳（山下町）など約120基の古墳が確認されている。野門遺跡周辺には、南方古墳群の吉野支群（第1図-7）、天下支群（第1図-8）、野地支群（第1図-9）、野田支群（第1図-10）などが点在する。延岡市の古墳の埋葬施設は、凝灰岩製家形石棺や、凝灰岩製組み合わせ式石棺、緑泥片岩製箱式石棺などバリエーションに富んでいる。集落としては、北方延岡道路建設に伴い平成14年に発掘調査を実施した山口遺跡があり細見川の谷底低地に形成された小規模な氾濫原堆積物中に20数軒の竪穴住居跡を検出している。

古代から中世では、苺田窯跡（行藤町）、古川窯跡（古川町）は須恵器窯跡、山城としては土持氏最後の城で、文安元年（1444）から3年かけて築かれたといわれる松尾城跡（第1図-2）、西階城跡（西階町）、井上城跡（古城町）が知られており、北方延岡道路建設に伴い平成15年に発掘調査を実施した天下城山遺跡（第1図-11）では、曲輪や虎口を検出している。

近世では、慶長6年（1601）から同8年（1603）にかけて初代延岡藩主高橋元種により築かれた延岡城跡があり、これまでの調査によって、内堀から五ヶ瀬川に通じる水路遺構、本小路北通線を跨ぐ暗渠遺構などの多くの新知見がもたらされている。また、市指定史跡の小峰窯跡（第1図-12）や古城窯跡（古城町）、上平原窯跡（平原町）、丸山窯跡（山下町）などの窯跡がある。

[参考・引用文献]

「貝の畑遺跡」『第二次日向遺跡総合調査 第二・第三』宮崎県教育委員会 1967

「野田町八田遺跡」延岡市教育委員会 1978

「林遺跡」宮崎県教育委員会 1990

「延岡市苺田窯跡」『宮崎県文化財報告書』第9集 宮崎県教育委員会 1992

「上南方地区遺跡」『延岡市文化財調査報告書』第8集 延岡市教育委員会 1992

「差木野遺跡」『延岡市文化財調査報告書』第9集 延岡市教育委員会 1992

「地蔵ヶ森遺跡」『宮崎県史 資料編 考古2』宮崎県 1993

穴戸章「五ヶ瀬川の転位（演旨）」『日本地質学会第103回学術大会講演演旨』日本地質学会 1996

「延岡市の文化財」延岡市教育委員会 2001

「赤木遺跡（第7次）」『延岡市文化財調査報告書』第25集 2002

「山口遺跡第2地点」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第99集 2005

「延岡城内遺跡Ⅰ」『延岡市文化財調査報告書』第26集 2002



- | | | | |
|--------------|--------------|---------------|---------|
| 1. 野門遺跡 | 2. 松尾城跡 | 3. 地藏ヶ森遺跡 | 4. 高野貝塚 |
| 5. 今井野遺跡 | 6. 野田町八田遺跡 | 7. 南方古墳群吉野支群 | |
| 8. 南方古墳群天下支群 | 9. 南方古墳群野地支群 | 10. 南方古墳群野田支群 | |
| 11. 天下城山遺跡 | 12. 小峰窯跡 | | |

第1図 遺跡位置図 (S=1/25,000)

第Ⅱ章 遺跡の概要

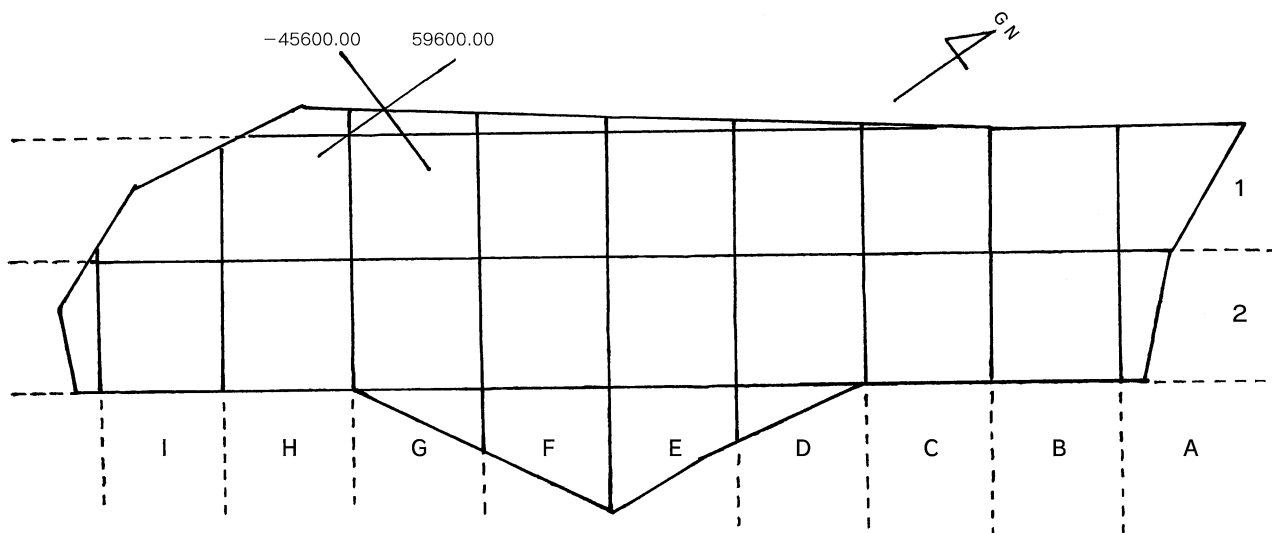
第1節 調査の経過

野門遺跡は延岡道路の建設部分である約2,700㎡を調査対象区として実施した。調査期間は、平成16年9月27日から平成16年12月3日まで、調査日数40日である。現地は、高平山（406.6m）の稜線末端部分の標高約40mの丘陵斜面上に位置している。稜線の基盤岩は四万十累層群のうち日向層群という地質帯に属しており、乱雑層と呼ばれる地層の連続性がなく細粒に破断した基質の中に大小の礫、岩塊を含む岩盤で構成される。これは、破断が多く風化によって脆弱になり侵食を受けやすい。野門遺跡の南東側と北西側は徒歩での登坂が困難な程の急崖を形成し、谷筋から上り詰めて遺跡のある平坦部に至る以外、進入が困難である。侵食により谷底地形となった松山集落の水田地帯から軽自動車はやっと通過できる程度の作業道を5分ほど登ると到達できる。調査開始前の9月上旬には、台風18号により谷に植林されている直径約20cmの杉が作業道に倒れ込み通行不能となった。この後も、調査期間中、9月29日の21号、10月11日の22号、10月20日の23号と3つの台風とそれらに刺激された秋雨前線による集中豪雨など気象条件に大きく影響を受けた調査であった。9月27日より重機による表土剥ぎを実施、厚く生い茂った雑草と低木を除去し、排土置き場を東部の谷斜面に設定した。排土流出の危険があったため、木杭、コンパネ、土嚢で土止め壁をつくり、その全面に深さ50cm程度のトレンチを掘り流出対策とした。台風襲来の度にトレンチは埋まり、集中豪雨時にはあふれた濁流が排土とともに作業道を覆い尽くし、人力、重機による排土処理は4度に及んだ。調査事務所や作業員休憩所、駐車場等は、稜線上に設置することができず、松山集落から入り込んだ小規模な沢の中洲を整地して設置した。調査区のうち、未買収の墓地周辺や南東斜面部分の表土直下がすぐ礫になる地帯を除外した部分を実掘することとした。グリッド設定は、長辺をA～I、短辺を1～3として国土座標方向ではなく、細長い調査区の方に沿わせた。当初予想では、遺物の密度は低く、攪乱土が多いため遺構検出の可能性は低いと考えていた。ところが、攪乱土の移動距離が小さく元位置から大きく移動していない部分や移動量が多いながら遺物を多量に包含する層、さらに、攪乱土の上に構築された遺構、削平された地表面に存在する生活面などを検出し、予想を上回る出土量となった。そのため、発掘作業員を2度にわたって増員し、期間内終了を目指した。

表土はぎ終了後の精査で遺物の検出に粗密が見られたため、北部A1グリッド、中央部D1グリッド、南部H1グリッドから掘り下げを開始した。3つのグリッドの堆積状況が大きく変化しているため連続性につかめず、層位の決定に苦慮した。調査区の北側長辺方向すべてに土層確認トレンチを設定し、堆積構造を確認した。これにより、遺物の混在と粗密の理由が明らかになり、北部は広い面積に堆積が浅いⅢ層を中心として出土し、南部は比較的深いⅣ層まで狭い範囲で出土することが予想された。そこで、作業員を2班に編制し調査を北部と南部に分離して進めることとした。北部は10月末にはA1、2～D1、2グリッドまでの範囲で深さ40cm程度までの調査を終了し、弥生時代の竪穴住居跡1軒などの遺構と多数の遺物が出土した。南部はⅢ層から古代の竪穴住居跡を検出した後、下位のⅣ層上面から古墳時代の遺物と焼土の集中が見られ終了直前まで実測取り上げを行った。南部の古墳時代生活面を調査中、想定していなかった旧石器時代の遺物が出土し層位の考察に苦慮した。旧石器時代の遺物は散漫な出土状況であった。11月30日、発掘作業を終了し、重機による埋め戻し作業に入る。作業道に制約があり大型重機が導入できなかつたため、日程がかさんだ。撤収後、侵食崩落のおそれがある排土置

き場は、土止めトレンチを拡充、全面をブルーシートで覆って養生し12月3日終了した。終了直後の12月5日に台風27号が通過、排土流出は免れたが、養生は大きく被害を受けた。ブルーシートの復旧と土嚢の増設を実施した後、国土交通省に排土対策の経過を説明し保全係の対応を依頼した。

なお、平成17年2月5日（土）には、延岡市天下町の延岡植物園みどりの相談室において、延岡道路・北方延岡道路建設事業関連で発掘調査を実施した野門遺跡と赤木遺跡第8地点合同の発掘調査報告会を実施し、70数名の参加を得た。



第2図 野門遺跡 周辺地形図 (1/3,000) およびグリッド配置図 (1/600)

第2節 遺跡の層序

野門遺跡は、前述のとおり、高平山の稜線末端部に位置しているが、周辺の稜線と比較して等高線間隔が粗であり傾斜が緩くなっている。高平山の南斜面、すなわち野門遺跡の北方斜面には、大藪衝上断層と呼ばれる低角な断層が存在する。これは、遺跡北方の林道工事現場に明瞭に露出している。衝上断層とは、岩層の全く違う2つの岩体が低角な断層で接するもので、断層下位つまり野門遺跡の位置する岩体は上位の岩体と異なる岩層をもつ。遺跡の位置する岩体は乱雑層とよばれ、全体に風化に弱く脆弱であり、周囲より早く侵食や破壊を受け、傾斜が緩やかになったのではないかと推察できる。地形的には、基盤が崩壊して堆積している地滑り地形である可能性が高い。このような場所は、地震や大雨によって侵食、崩壊、堆積といった影響を受けやすい場所である。

遺跡では、試掘等で場所による土層の攪乱、層厚の変移など不安定な地層の堆積を確認していた。調査進行とともに、異なる年代の遺物が同一層準に出現する、攪乱層準の下位に異なる時代の遺構を伴うなどの様相が判明し、面的な広がりをつかむとともに、堆積構造をつかむ必要に迫られた。そこで、調査区北西側のA～Hグリッドまで約80mの土層確認トレンチを設定し、以下①～⑤の事象が観察できた。

- ①地層は北部A～Dグリッドに向けて緩傾斜の斜面を覆うように堆積し次第に層厚が薄くなる。
- ②F～Gグリッドにかけて層状の堆積は崩壊し、II層（黒色土主体層）とIII層（アカホヤ主体層）がセットになり50～60cmのブロックを十数個、形成している。これらのブロックは、斜面下側が上昇し、斜面上側が下降しており、その斜面上位にはII・III層の混在土とIV層の境界が斜面上位に向かって上昇する構造を複数のサイクル繰り返している。
- ③南部G～Hグリッドにかけては表層の角礫を多く含む堆積層が下位を覆う。
- ④V層は始良Tn火山灰直下の暗色帯土層がブロック状に破断したものと考えられる。
- ⑤VI層には白色の砂層を伴う数cm以上の角礫がみられる。（①～⑤は第4図土層断面図参照）

	名 称 (通称)	特徴・年代など	野門遺跡での出現状況
A	表土層	現代の植生土、耕作土	I・II層
B	黒色土層	縄文時代中期～近代までの包含層	III層・遺構埋土に混在
C	鬼界アカホヤ火山灰層	約7300年前堆積	III層中に混在
D	黒色土層	縄文縄文時代の早期の包含層	なし
E	褐色土層 (漸移層)	旧石器時代～縄文時代の包含層	なし
F	明褐色土層	旧石器時代の包含層 約2万年前	IV層相当
G	暗褐色層 (AT上位層)	旧石器時代の包含層	なし
H	始良Tn火山灰層	約2万8千年前堆積	なし
I	黒色硬質土層 (暗色帯)	旧石器時代の包含層	V層ブロックを構成
J	明褐色土層	上位まで遺物を包含 約3万年前	IV層相当
K	阿蘇4火砕流堆積物	比較的高位まで堆積する 約9万年前	なし
L	四万十累層群 砂泥互層主体	第四紀以前の地層帯 (地山と呼ばれる)	基盤として周辺に露出

第1表 延岡周辺の丘陵における基本土層

層順	名 称	特 徴	分 布	備 考
I 層	黒褐色角礫層	砂岩角礫を多く含む堆積物	南部のみ	
II 層	黒褐色土層	III層をわずかに含む黒色土（表層土）	全域	細片を含む
III 層	褐色土層	二次堆積アカホヤ火山灰主体の混在層 南部と北部は色調、層厚に若干の相違がある	北部厚い 南部薄い	遺物包含層 上面に遺構検出
III' 層	暗赤色攪乱土層	II・III層がセットになったブロックと完全に攪乱された層が共存する層	中央部のみ	細片をわずかに含む
IV 層	黄褐色土層	明褐色土の単層で攪乱が少ない層	全域	遺物包含層
IV' 層	暗黄褐色土層	IV層にわずかな攪乱土を含み暗色な層	南部の一部	遺物包含層
V 層	暗褐色ブロック土層	暗褐色硬質土のブロック主体層	全域	
VI 層	明褐色礫層	基底岩盤の砂岩角礫を多く含む層	全域	

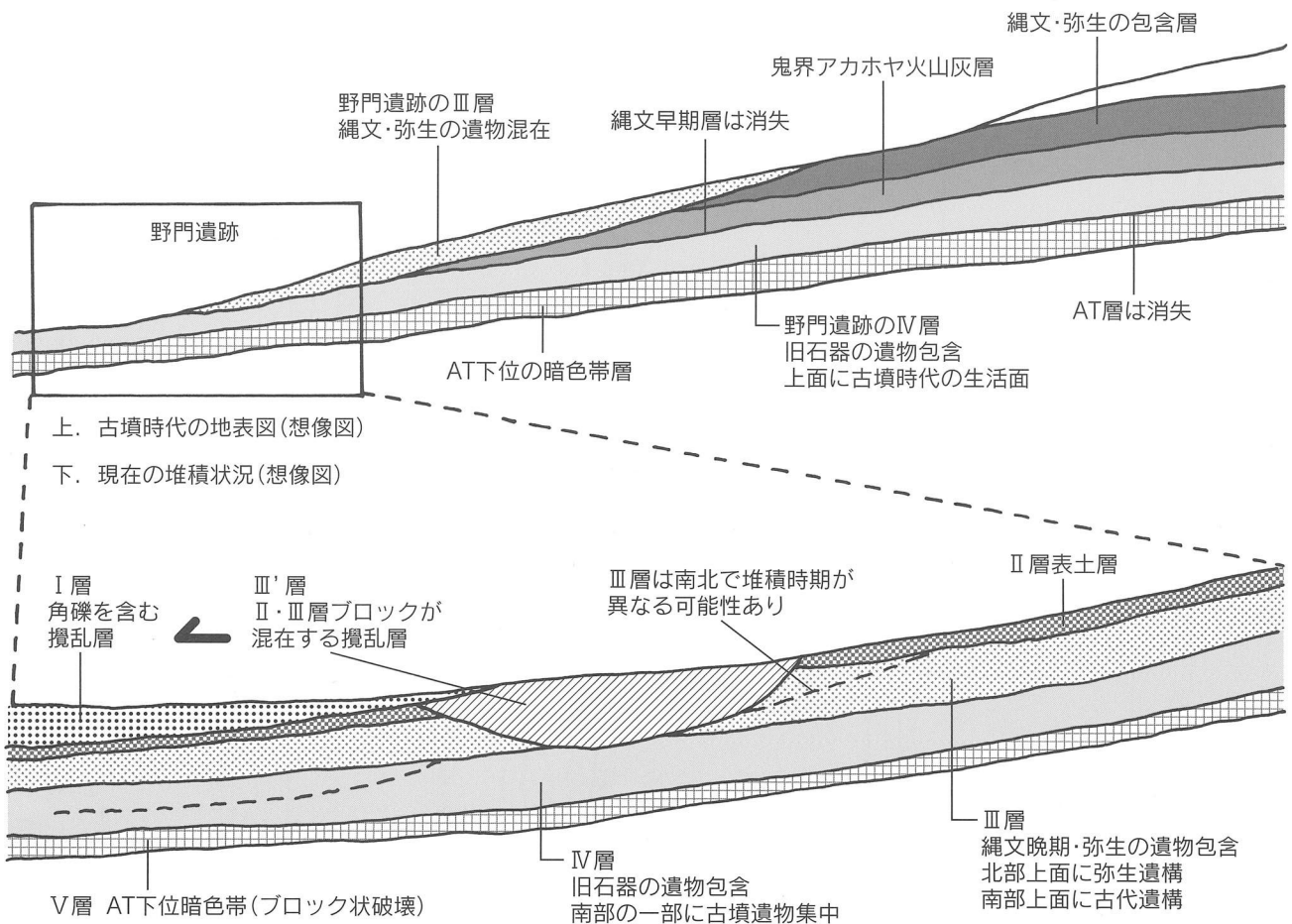
第2表 野門遺跡の基本土層

この堆積構造を延岡市丘陵地の基本土層（第1表）のA～Lと比較検討し、それぞれ野門遺跡の基本土層（第2表）のI～VI層のいずれに対応し、どのような混在で生成されるか、また包含する遺物や検出された遺構の示す時代を矛盾なく堆積に反映させるために、第3表のような成因を考察した。

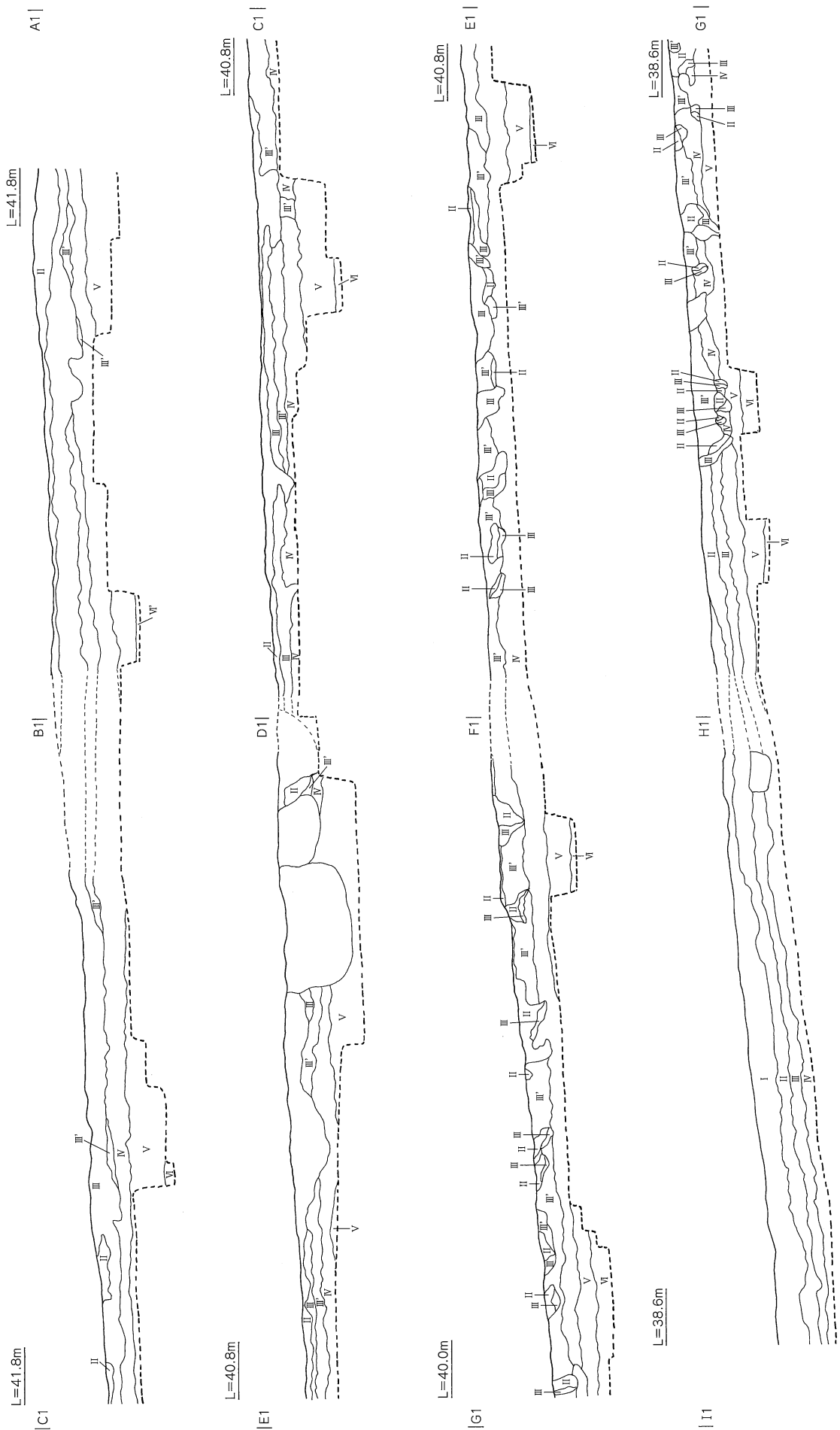
層位	土質、包含遺物から考えられる成因	遺 物 等
I 層	II～IV層を耕作、工事等で掘削した砂岩角礫を含む排土。 南部傾斜地に展開し傾斜を緩やかにしようとしたもの。	まれに旧石器的な遺物を包含する。 細片をわずかに含む
II 層	暗褐色粘土質でありGグリッド以南ではI層に覆われるが、以北では表土層になる。 南部では硬質だが北部では耕作により軟質化している。	現在の植物育成層 III層の遺物が混在している。 破碎され細片が多い。
III 層	C（鬼界アカホヤ火山灰）とB（黒色土層）が遺跡より標高の高い位置に堆積した後、降雨等により削剥侵食され、現地に流れ込み再堆積したもの。遺物の摩耗は少なく、長距離の流下は考えにくい。中央部では掘削破碎されIII'層となる。南部地表に地震によると思われる亀裂が見られる。	縄文晩期から弥生時代の遺物を主として包含する。南部では古代の遺構が北部では弥生時代の遺構が検出される。
III' 層	耕作もしくは工事等によりII・III層がセットになったブロックが、完全に混在した土壤中に規則的に見られる層	細片をわずかに含む
IV 層	土質はF（明褐色土層）と思われるが古墳時代から古代にかけて生活面になっていた可能性が考えられる。	上面に古墳時代の遺物が集中し、焼土や炭化物が多い。 旧石器時代の遺物を含む。
IV' 層	南部Hグリッドを中心に分布、遺構埋土の可能性。IV層土に似るが上位の攪乱土を少量ふくむ。明瞭に分層できないが、古墳時代の遺物の有無と固さの相違により堆積時期の相違を推定できる。降雨等による再堆積層と考えられる。	古墳時代から古代にかけての遺物が比較的保存良く出土する。
V 層	I（暗色帯層）のブロックを主体とした堆積物で場所によっては移動距離は少ないようである。	遺物なし
VI 層	Lの礫を多く含みL主体の土石流堆積物と考えられる。	遺物なし

第3表 野門遺跡の土層成因と遺物の層位分布

第3表の考察を元に、古墳時代の生活面及び現在の地層の堆積概念図を第3図に示した。すなわち、野門遺跡は旧石器時代末から縄文早期にかけての地層がほとんど削平されており土層、遺物ともに現地には存在しない。弥生時代には、遺跡より高い標高にある北西稜線上の一次堆積層が降水によって侵食、流下し遺跡内に再堆積し、縄文晩期から弥生時代の遺物を混在して包含するⅢ層が形成された。北部ではⅢ層上面が生活面となり弥生時代の住居が形成された。南部は、さらに斜面の削平が進み旧石器時代の剥片尖頭器を包含するⅣ層が地表に露出した。古墳時代には、その地表面で祭祀と思われる遺構が形成された。その後、自然堆積によりⅣ'層に被覆された後、前述のⅢ層が南部を覆う、南部のⅢ層上面には古代の遺構が構築された。鬼界アカホヤ火山灰主体で縄文晩期と弥生時代の遺物を伴うという観点では北部と南部のⅢ層は、同一層準であるが、堆積時期は北部が弥生時代に1回と古墳時代に1回、南部は古墳時代1回であると考えられる。北部のⅢ層を肉眼分層によって2つの時期に分離することはできないが、南部よりも堆積が厚く、層上部の遺物量が少なく、下部が多くなりサイズも大型化することから、堆積に時期差を考えることに不都合はない。その後、緩傾斜となったため削平速度は緩やかになり、全体がⅡ層の森林土に覆われていった。近代になって遺跡中央部のF、Gグリッド部分では、農業用の貯水施設や作業道の工事に伴い、部分的に角礫を持つⅥ層まで掘削し、その排土によって南部は古代の住居跡などを角礫を含んだⅠ層が被覆した。このように考えると、Ⅲ、Ⅳ層に異なる時代の遺物が共存すること、Ⅲ層上面に異なる時代の遺構の存在すること、中央部分のブロック破碎と遺物が希薄であること、Ⅰ層の角礫層の形成などを総合的に説明することができる。



第3図 堆積概念図 (上下とも右が北)

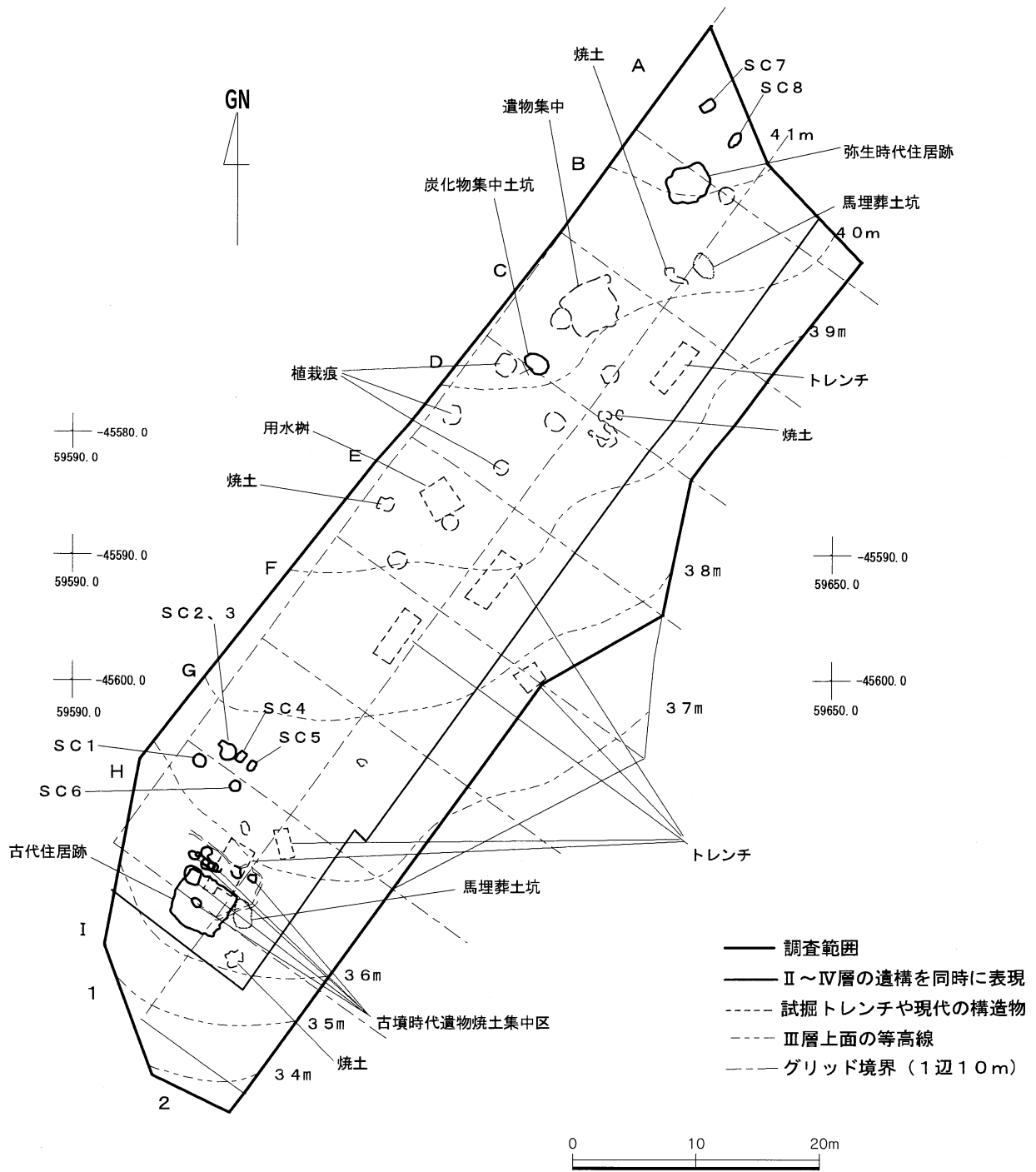


野門遺跡 土層断面図

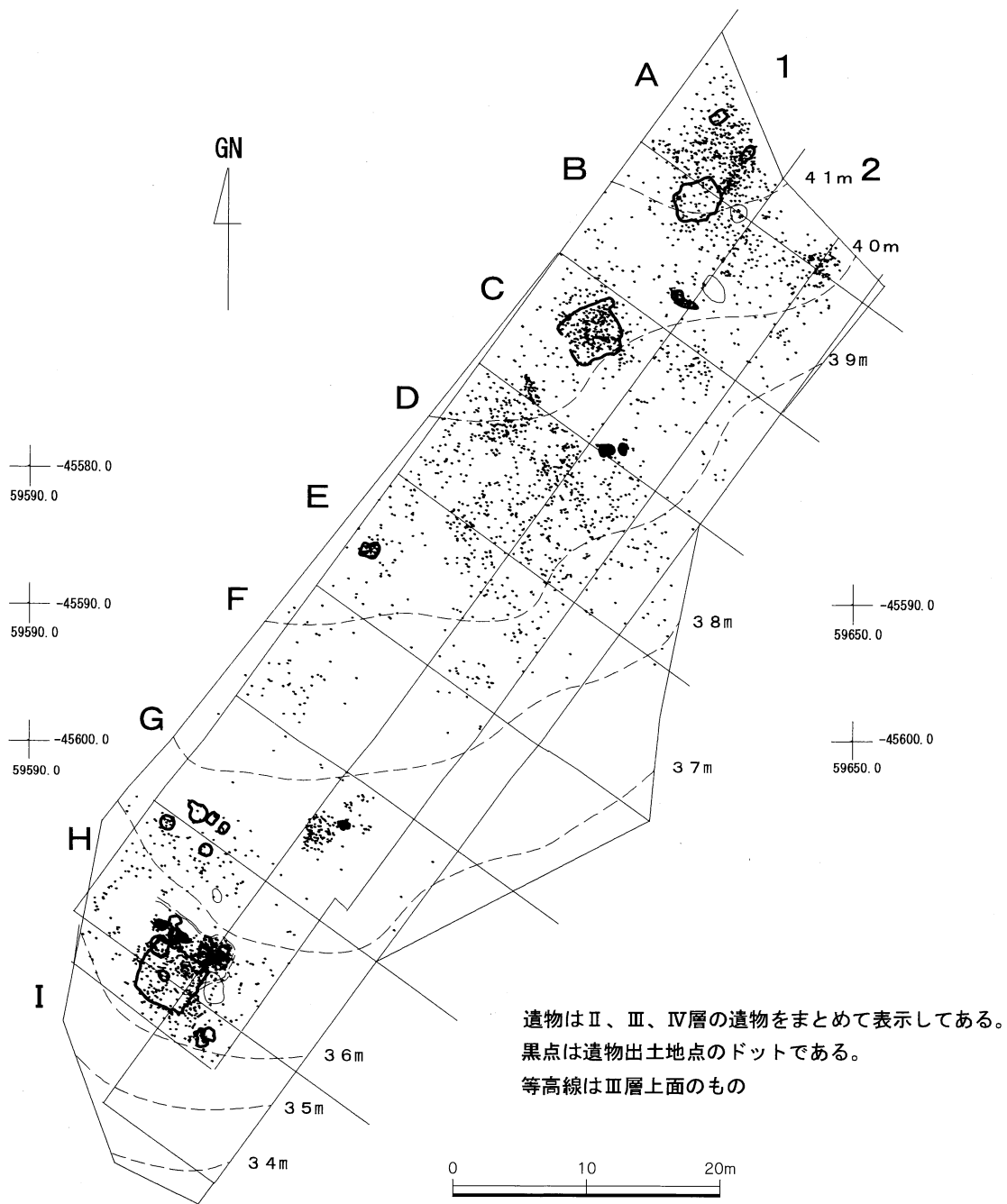
- I. 7.5YR2/2 黒褐色 やや軟質 ややしり無し 砂岩の角礫を多く含む
- II. 7.5YR3/2 黒褐色 軟質 しり無し 二次アカホヤのブロックをわずかに含む
- III. 7.5YR4/4 緑色 軟質 ややしり無し アカホヤの二次堆積層 礫石によって混ざり方が違う
- IV. 5YR3/3 暗赤色 軟質 ややしり無し やや粘性あり IIとIIIが、完全に混ざった部分と、セツトに欠けたブロックが共存する層
- V. 10YR4/3 灰色 軟質 ややしり無し やや粘性あり
- VI. 7.5YR2/1 黒色 硬質 しり有り 暗色帯層がブロック状に露出し、黒褐色 7.5YR3/1 軟質 ややしり有り の上に含まれる
- VI. 7.5YR2/2 黒褐色 やや軟質 しり有り 白色砂礫とともに数cm~数十cmの厚層を含む



第4図 調査区土層断面図 (1/80)



第5図 野門遺跡遺構分布図 (1/500)



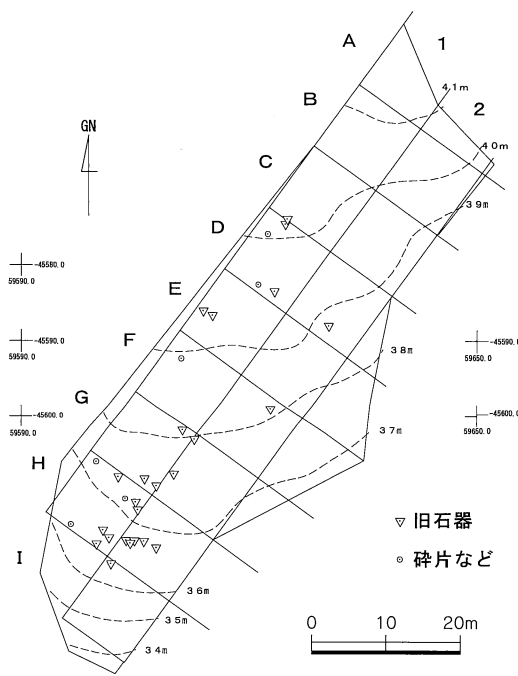
第6図 野門遺跡遺物分布図 (1/500)

第三章 調査の記録

野門遺跡の遺構・遺物は第II章で述べた堆積構造の理由から大きく2つの区域に分布する。すなわち、耕作、工事等と思われる土層の破壊により調査区中央のF、Gグリッドからは細片以外の遺物がほとんど検出されず、遺構・遺物とも北部のA～Eグリッドと南部のH、Iグリッドに集中した(第5・6図)。また、南部と北部では遺構・遺物の組み合わせも若干の相違がある。北部ではII、III層に縄文時代晩期、弥生時代の遺物を包含し、III層上面に弥生時代の遺構を検出した。南部ではIV層上部に古墳時代の遺物を多量に包含する地域があり、その上位を縄文時代晩期と弥生時代の遺物を包含するIII層が覆い、その上面に古代の遺構を検出する。さらに、それを覆うII層から縄文時代晩期と弥生時代の遺物が出土する。以上の検出・出土の状況から、層位を追って報告すると混乱が避けられないと判断し、各層位から検出・出土した遺構、遺物を総合的に検討し、各時代ごとに分類して記載することとした。以下、時代ごとに概説する。

第1節 旧石器時代の遺物

野門遺跡の旧石器時代の遺物包含層は主としてIV層である。延岡市丘陵部で一般に旧石器時代の細石刃文化遺物包含層である暗褐色土層や始良Tn火山灰層直上文化層である通称上位白斑ロームと呼ばれる硬質暗褐色土層、及び始良Tn火山灰層本体は侵食削平され存在しない。その直下の通称暗色帯と呼ばれる硬質黒褐色土層はブロック状に破碎し原形をとどめない。以上の堆積状況と試掘段階で存在が確認できなかったことから調査開始当初、旧石器時代の遺物出土は想定していなかった。製品や二次加工剥片などの遺物は、南部H1・2グリッドのIV層を中心に出土し、石器ブロックを形成したり焼礫等を伴うことはなく、希薄に散在(第7図)している。旧石器時代と考えられる遺物はII～IV層と複数層にまたがって出土(第4表)しており、上位の攪乱層からも出土する。これらを旧石器時代の遺物として一括する根拠は、①～④である。

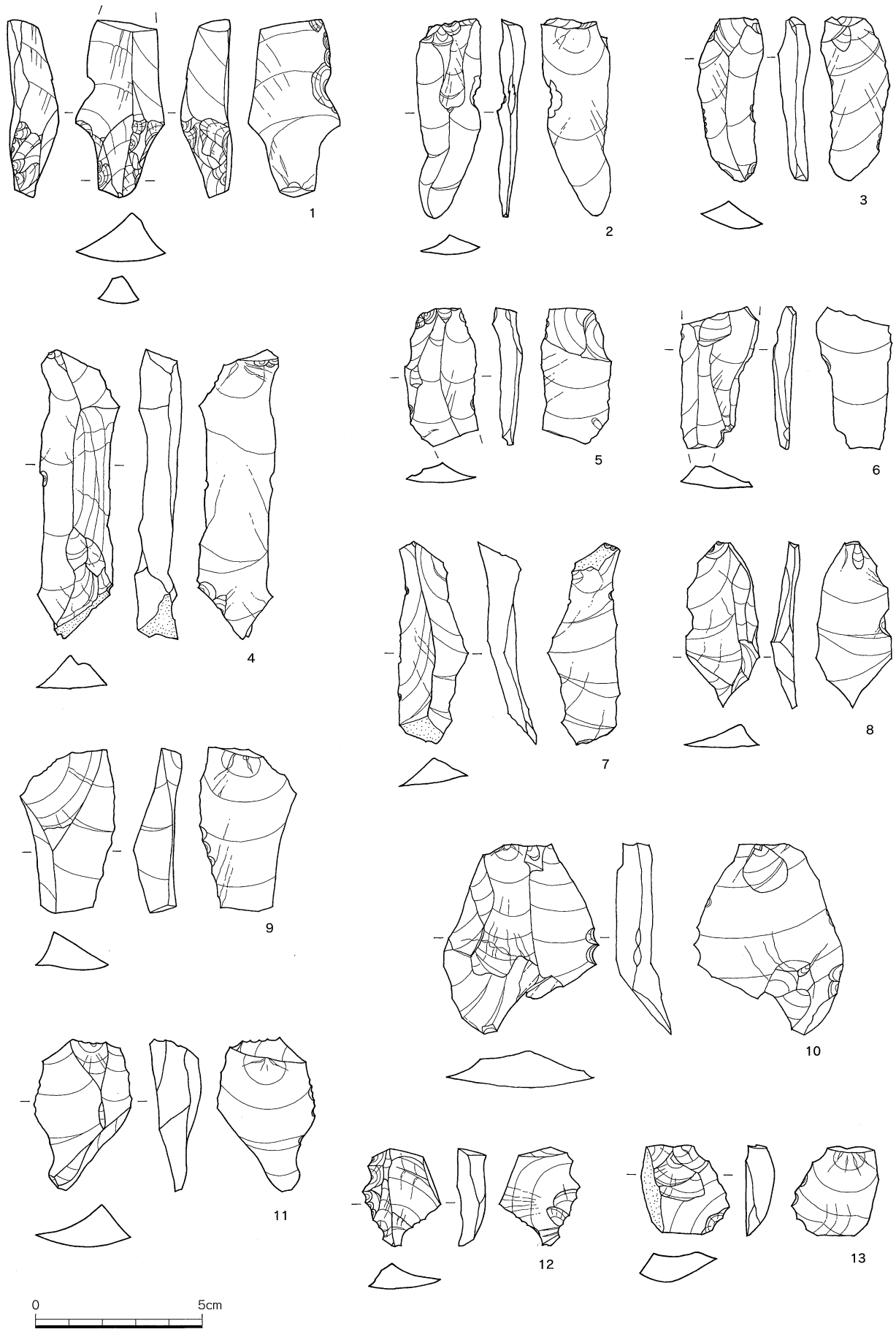


第7図 旧石器時代石器分布図 (1/1,000)

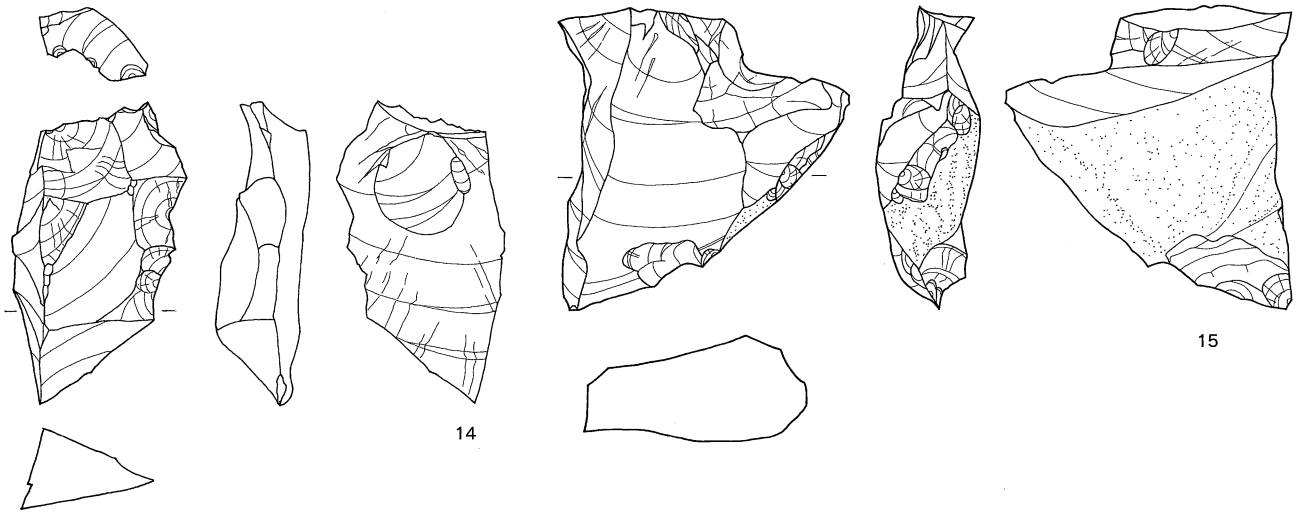
- ①IV層出土の剥片尖頭器が近隣遺跡の約2万年前相当の遺物に対比できる。
- ②使用する石材は表面が白色に風化し、わずかにもしくは明瞭な流理構造が見られる流紋岩である。
- ③規則性のある縦長の剥片や幅広の剥片が多く、形態的に類似している。
- ④IV層中からは縄文時代や弥生時代の特徴を示す遺物は出土せず②、③の特徴をもつもののみ出土する。

出土遺物 (第8図：1～13、第9図：14～19+20+21、第10図：19～23) (図版6・7)

1は、剥片尖頭器である。基部加工が施されており原型が推定できるが、先端部が欠損しており、左側縁部に剥離が見られる。2～18は剥片である。2～9は明瞭で薄い縦長剥片であり、ほぼ同一方向

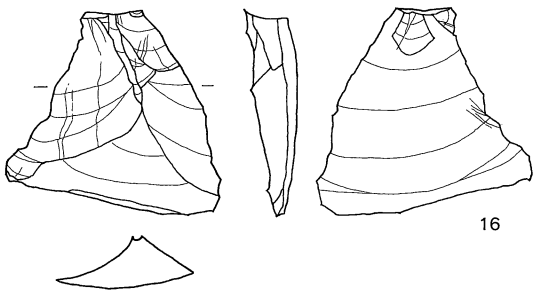


第8図 旧石器時代石器実測図(1) (3/5)



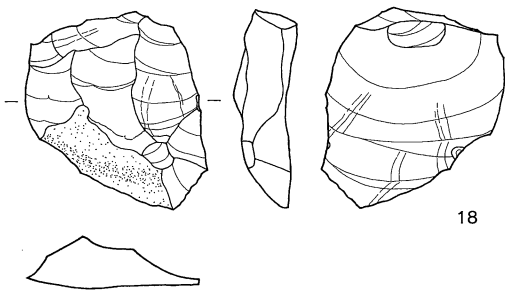
14

15



16

17

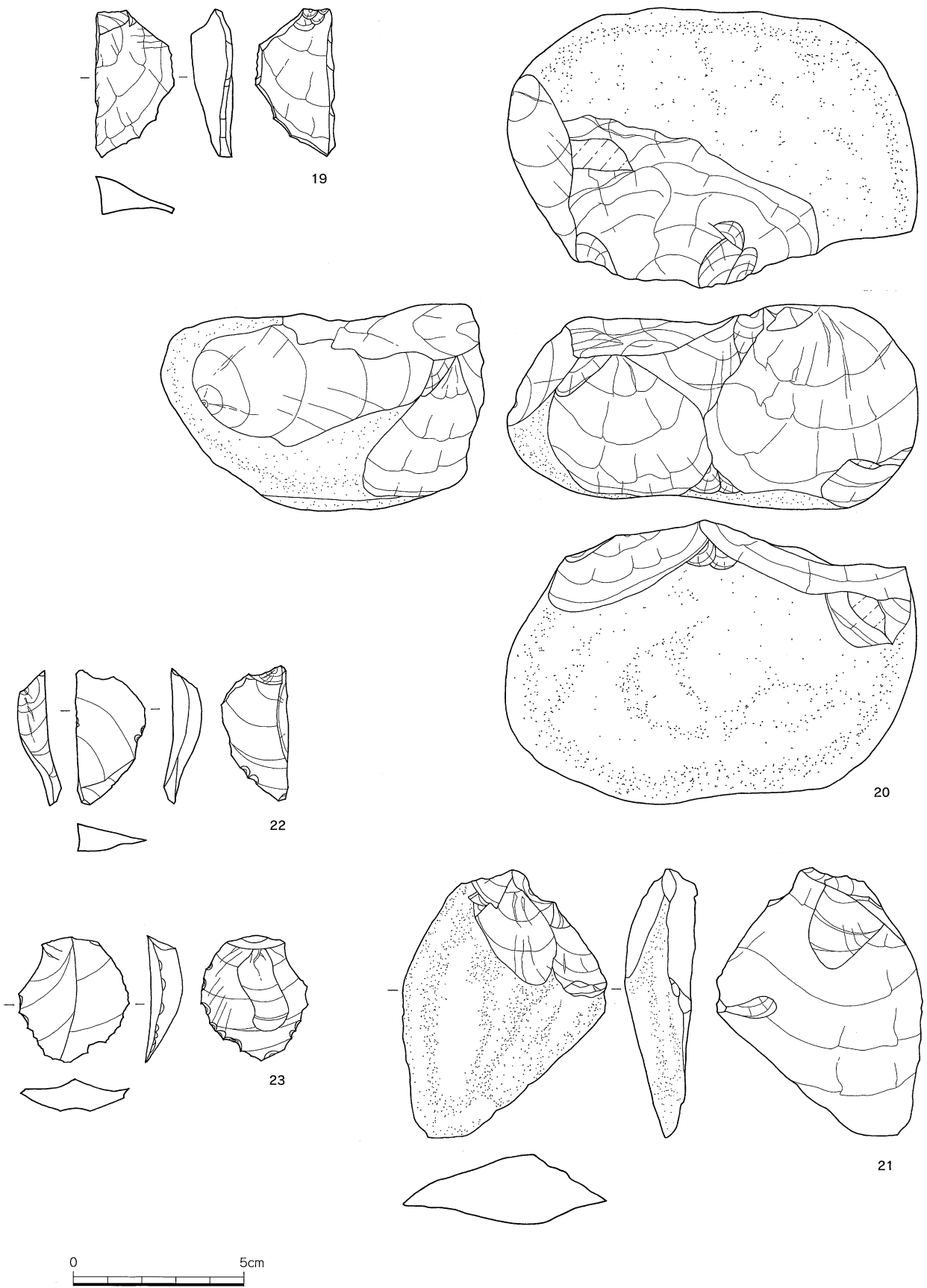


18

19+20+21

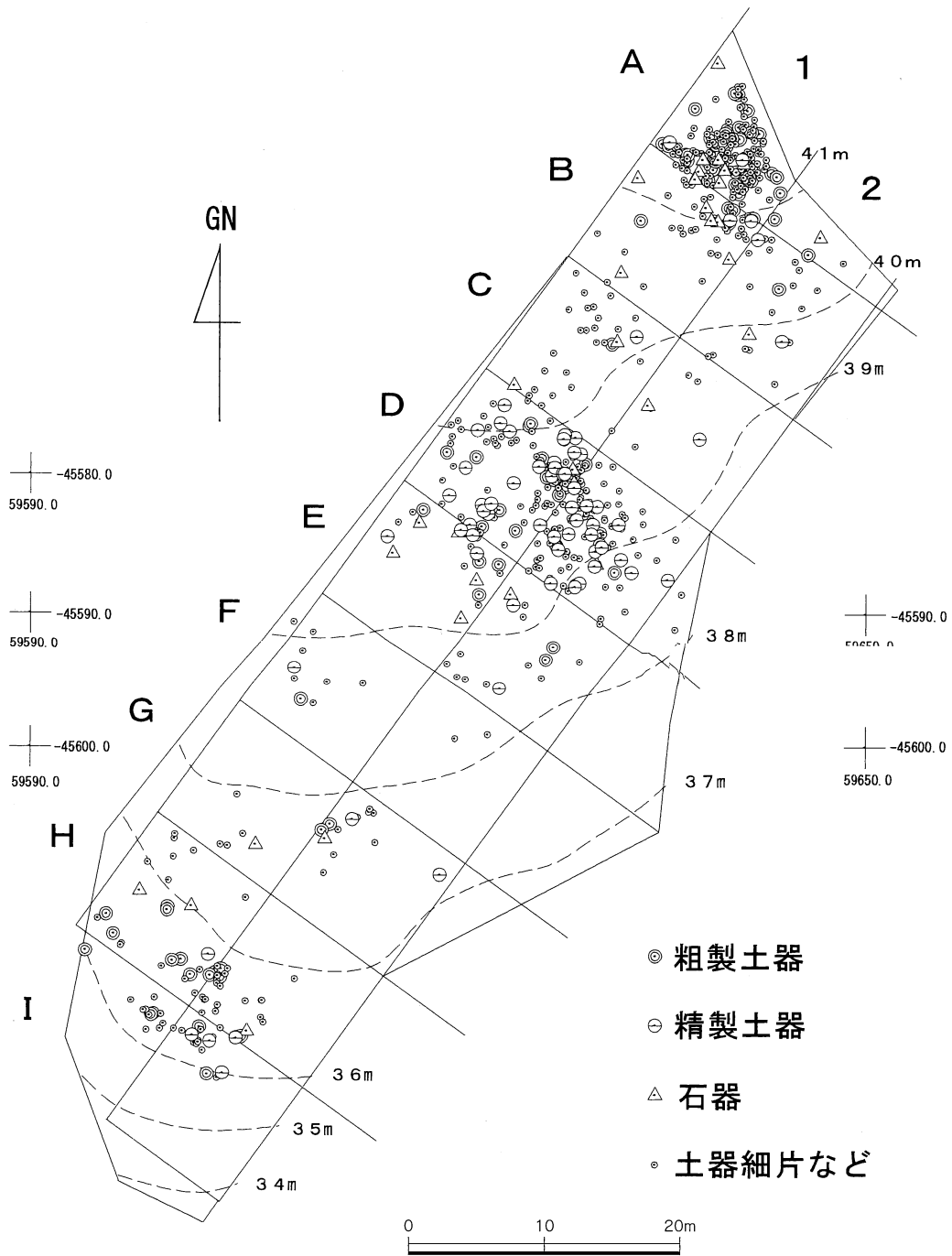


第9圖 旧石器時代石器実測図(2) (3/5)



第10図 旧石器時代石器実測図(3) (3/5)

からの連続剥離によって得られたものと考えられる。2・3・5には作業面調整があり、薄型であるため目的剥片であると考えられ、側縁に微細剥離があることから、使用痕の可能性も考えられる。10～18は、幅広もしくは不定形の剥片である。これらには12～14などのように側縁に二次加工を施したものが見られる。19～21は接合資料である。20の石核に19・21の剥片が接合する。19は薄く小型幅広の剥片の外周に、風化して不明瞭ながら、微細な剥離が連続し、垂直方向に断裂した形態をしている。この特徴は22の剥片に類似しており、23の剥片は外周に剥離が散見される点で類似点がある。



第11図 縄文時代遺物分布図 (1/500)

第2節 縄文時代の遺物

縄文時代の遺物は主として表層土のⅡ層と鬼界アカホヤ火山灰を多量に含む攪乱土層であるⅢ層から出土している。遺物の出土状況はA1グリッド、D1、D2グリッドで密であり、E～Gグリッドからはほとんど出土がなく、H1、H2グリッドで疎な傾向がある（第11図）。一部の遺物をのぞいて、接合状況は良好とはいえない。遺構が検出されないことや、弥生時代の遺物と混在して出土していることを総合して考えると、現地性のものではなく、遺跡のある稜線のより標高の高い位置から供給された可能性が高い。縄文時代の遺物供給源として考えられる場所は遺跡の北西に連続する稜線上の緩斜面（第2図）である。ここは高平山南面の断層よりも遺跡に近く、遺跡と同様の脆弱な基盤上に立地しており、縄文時代晩期に稜線東側の谷がまだ深く侵食していなければ隣の稜線と連続し、高平山南面に広い丘陵を形成できたはずである。土器の断面や表面は摩滅が進んでおらず、Ⅱ・Ⅲ層には土壤に恒常的な水流の痕跡が見られないことから、沢による流れ込みや激しい土石流や地滑りというよりも、降雨等の侵食によって土壤とともに緩やかに流下してきたものと考えられる。縄文土器のほとんどは晩期の粗製・精製のものであり、わずかに後期と思われるものもある。草創期・早期については土器・石器とも全く出土しないため、遺跡周辺での生活がなかったか、同時期に相当する土層が、早い時代に侵食消失していたと考えられる。石器については、石材や形態で旧石器時代や弥生時代と躊躇無く認められるグループを除外し、残った石器群を周辺遺跡の類例等も考慮しつつ再分類して比定した。形態のはっきりしている石鏃等については、多数出土する縄文時代晩期の土器と共伴するグループと考えたいが、一部の石器は他の時代のもを混在して記載している可能性もある。

出土遺物

1 縄文土器

（第12図：24～37、第13図：38～53、第14図：54～62）（図版8・9・10）

縄文土器は粗製土器（24～53）と精製土器（54～62）に分類できる。これらはⅡ・Ⅲ層の広い範囲に分散しており約640点出土している。接合状況は芳しくなく、口縁部から底部まで復元できた個体は無い。器形が明瞭に判別できるものは少ないが、粗製土器は深鉢、精製土器は浅鉢を主体としている。

粗製土器・深鉢口縁部：（24～45・49・50）深鉢の口縁部を形態によりⅠ～Ⅳ類に類別した。

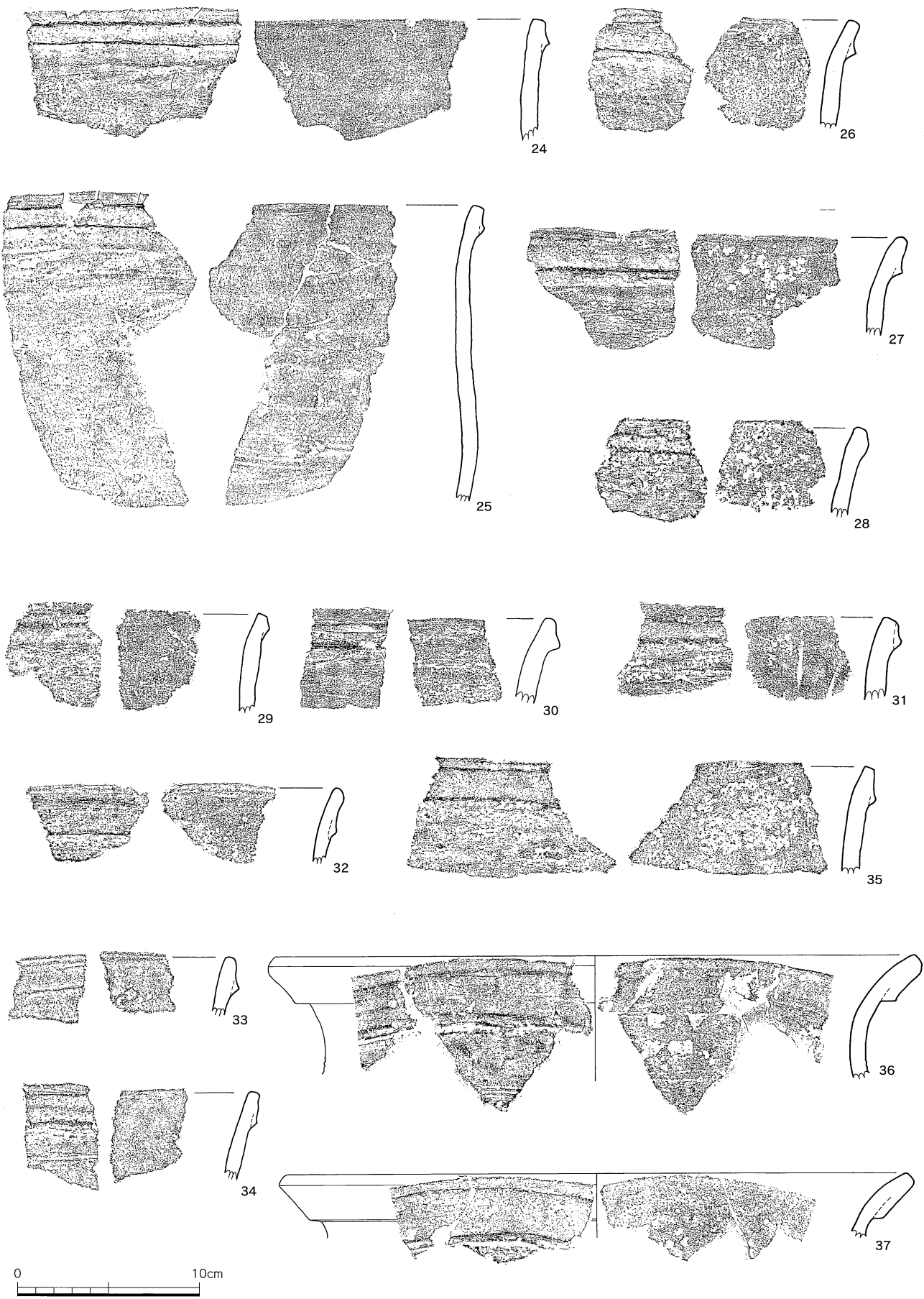
Ⅰ類（24～33）

口縁部に刻み目のない断面三角形の突帯を1条貼り付ける粗製の深鉢である。突帯は厚さ5mm程度ではっきりとした稜をもち、口唇部より下、1～2cm程度の位置に付く。ほとんどの口縁部はゆるやかに外反して、ゆるやかに胴部が張る器形である。24～26・29では口唇部を工具もしくは指によるナデで平坦に調整している。

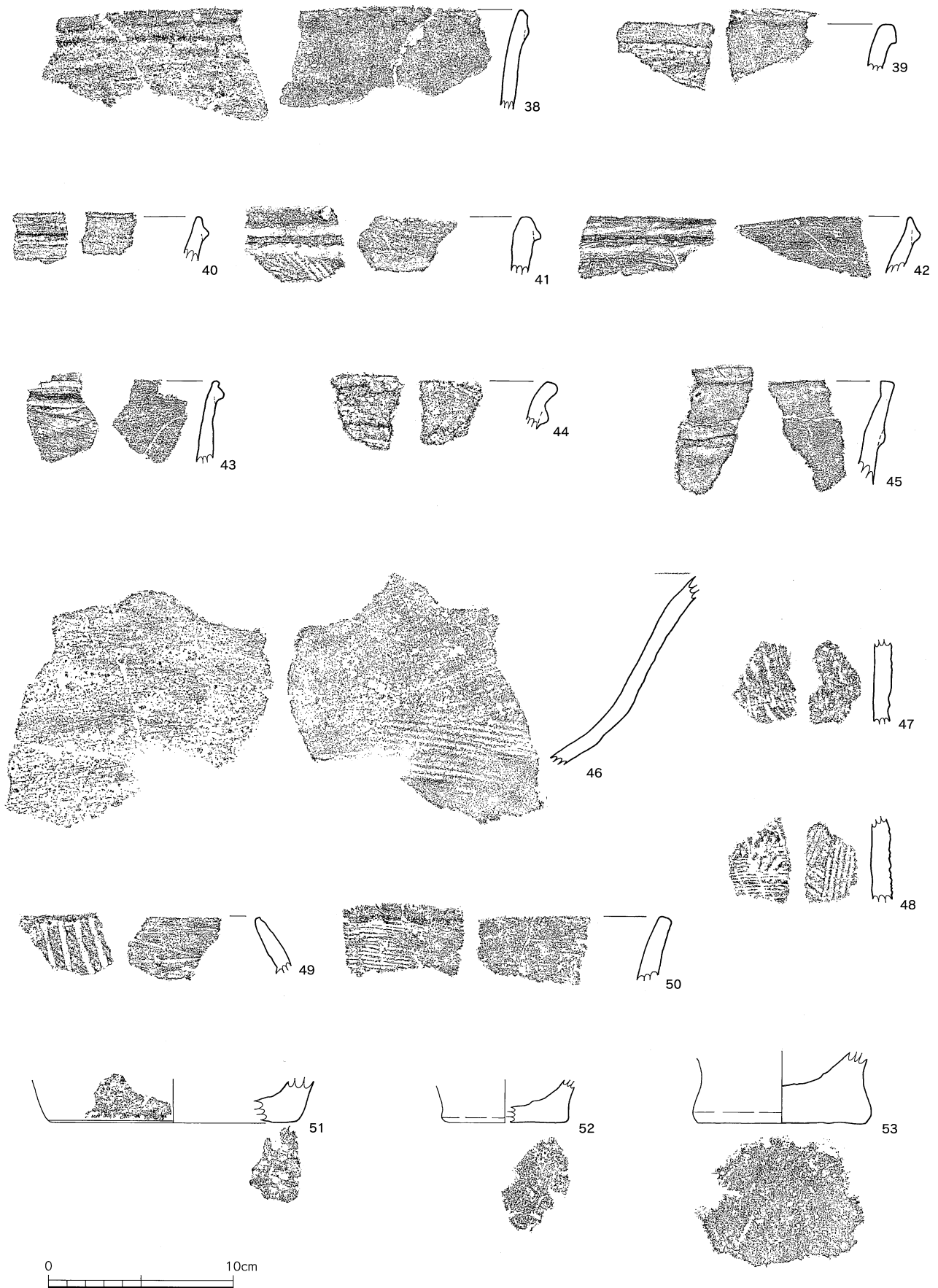
Ⅱ類：肥厚させた無文の口縁帯を有する粗製の深鉢を一括した。口縁帯の幅で細分する。

Ⅱa類（34～37）

口縁帯が2cmに達する幅の広いものである。34・35は、ほぼ直行してわずかに外反し36・37は口縁部が大きく外反し、口縁帯断面に折り曲げたような痕跡が残り、口唇部の平坦な調整が顕著である。この2点はいずれも調査区北端のA1グリッド出土であり、胎土、調整等も似ているため、同一個体である可能性がある。



第12図 縄文土器実測図(1) (1/3)



第13図 縄文土器実測図(2) (1/3)

II b類 (38~39)

口縁帯が1 cm程度で幅の狭いものである。口縁部は直行もしくはわずかに外反する。

III類：刻み目や稜を持たず丸い突帯を1条貼り付ける粗製の深鉢を一括した。突帯の位置で細分する。

III a類 (40~43)

突帯の貼り付け位置が口唇部直下であるもの。小片が多く器形や調整は明瞭でないが、器壁が薄く口縁部の外傾する深鉢と考えられる。41は突帯直下に条痕文が見られる。

III b類 (44・45)

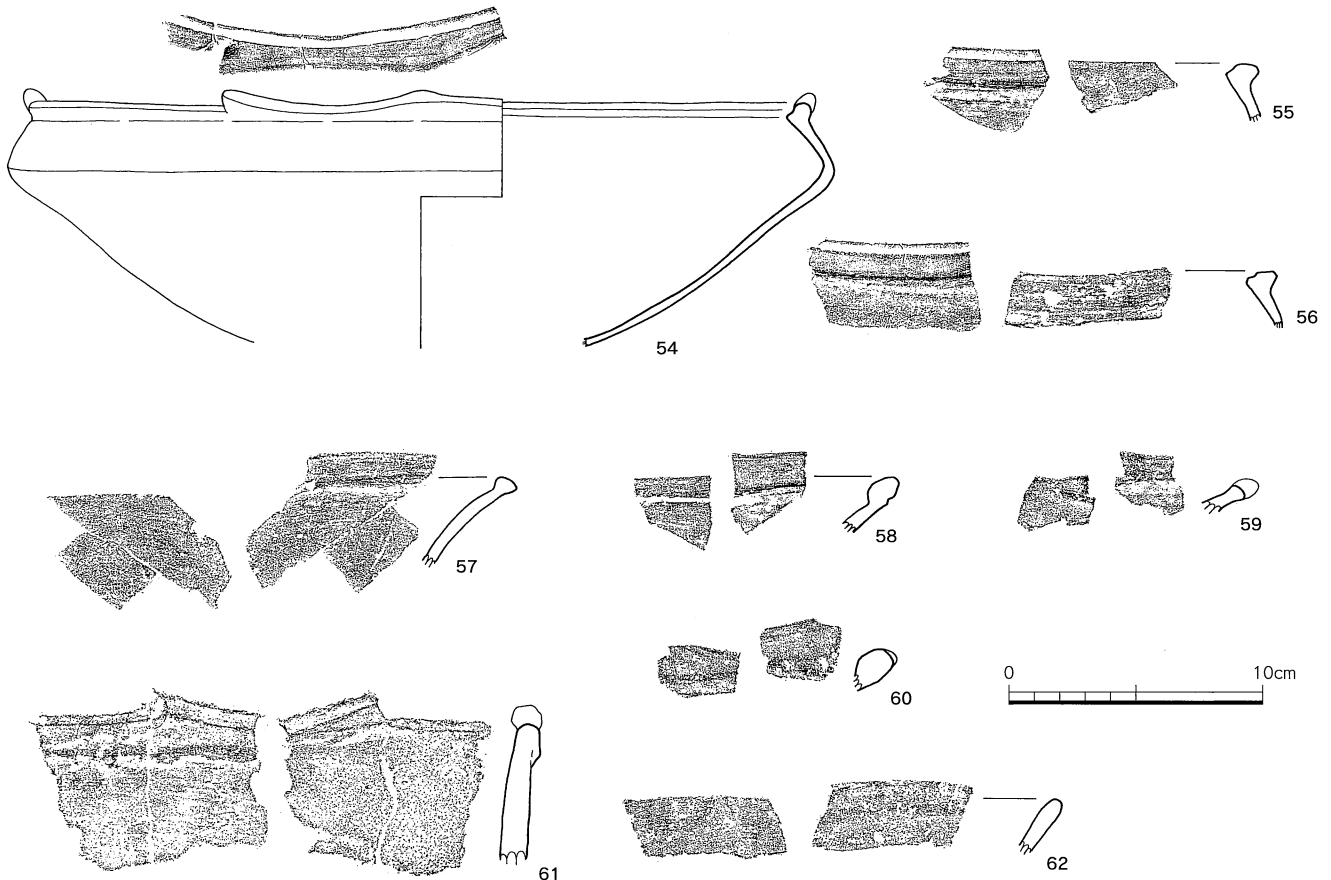
突帯の貼り付け位置が口唇部から2 cmに達するもので一括した。44は口唇部がわずかに肥厚し外反する。45は直行し外傾する。

IV類 (49・50)

49は口縁部が内湾し外面に縦方向の沈線を施す。この土器は門川南町遺跡に類例が多く、縄文時代後期前葉とされている。50は口縁部がわずかに外反し、外面に横方向の条痕を施す深鉢である。

粗製土器・胴部 (46~48) ・底部 (51~53)

46は粗製の浅鉢の胴部でわずかにくの字に屈曲する。47・48は組織痕のある土器の胴部である。51~53は深鉢の底部である。いずれも平底であり51は底部から外傾する胴部が直接立ち上がり52・53は端部が張り出し開きながら立ち上がるものと考えられる。



第14図 縄文土器実測図(3) (1/3)

精製土器 (54~62) (図版10)

口縁部の形状で分類できる黒色磨研の浅鉢が主体である。ヒレ状突起をもつものは54・59・60である。61は粗製の深鉢であるが、ヒレ状突起を持つという観点から第14図で記載する。55・56は口縁部が内傾し口唇部が肥厚し内面肩部にわずかな段を有するものである。この特徴は54のヒレ状突起をもつ土器と共通でありと器壁の厚さ、胎土、出土位置も類似しており同一個体の可能性がある。57は口縁部が外反し端部を肥厚させており口唇部外面に沈線が無い。58は外傾する口縁部の端部が肥厚し外面に沈線1条を有する。肥厚する部分の幅がわずかに変化するため、ヒレ状突起をもつ土器である可能性がある。62は外傾する口縁部である。

2 石器 (第15図：63~76、第16図：77、第17図：78~83) (図版11・12)

チャート製石器群 (63~66)

石鏃：チャート製の石鏃は4点である。いずれも側縁に段を有する五角形を基調にしているが、若干の差がある。63は細長く、長さが幅の約2.5倍ある。側縁部と基部がわずかに抉れており、くびれた先端部を細く突出させている。風化の程度が他のチャートより強く、熱を受けた可能性がある。64~66は側縁部、基部とも直線的な五角形で将棋の駒形を呈し、側縁部のみわずかに抉れている。長さは64が約3cm、65・66が約2cmとやや小型である。

ガラス質安山岩製石器群 (67~70)

石鏃：ガラス質安山岩製の石鏃は4点である。形態はチャート製の石鏃に類似点が多い。67・68は側縁に段を有する五角形が基調で側縁部のみがわずかに抉れている。69は側縁部の抉れがなく将棋の駒形を呈する。70は側縁部の段が不明瞭で三角形に見えるが、五角形にしようとする意図は見受けられる。この石材は、剥片等の出土がなく、製品のみ出土である。黒色鉱物の斑晶が大きいことや姫島産黒曜石が相伴することなどから、姫島産の石材の可能性が高い。

姫島産黒曜石製石器群 (71~76)

姫島産特有の明~暗灰色黒曜石は、製品と複数の剥片による一群を形成する。

石鏃：71は大きさ、形態ともにチャート製石鏃の65によく類似する。弥生時代の竪穴住居跡の埋土の最上部から出土しており、堆積状況を考察する資料となった。

尖頭状石器：73は1点が表土層(II層)から出土した。厚さ約2cmの剥片の両側縁に両面から調整を施しており、尖頭部を有する石器である。肉厚で刃部の傾斜角度は約45°である。尖頭部があまり鋭角ではなく、搔器のような印象も受ける。

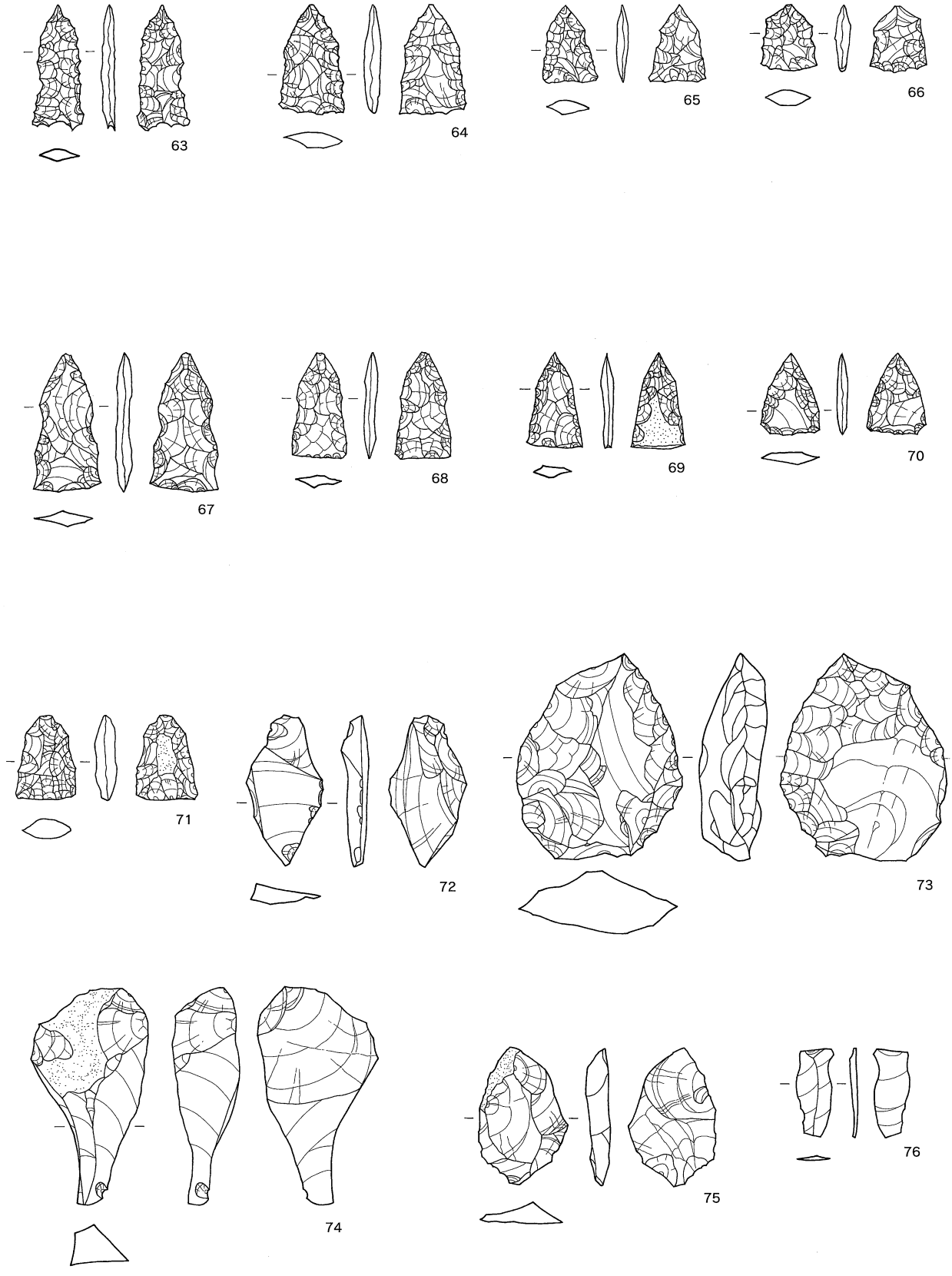
石核：74は一部に礫面を残し、同一方向から繰り返し剥離を行ったのち、打面を転移して剥離を行った残核である。

剥片：72・75は二次加工ある剥片である。76は隣り合う剥離面の稜から剥離された剥片である。

砂岩製石器群 (77・78・80・81)

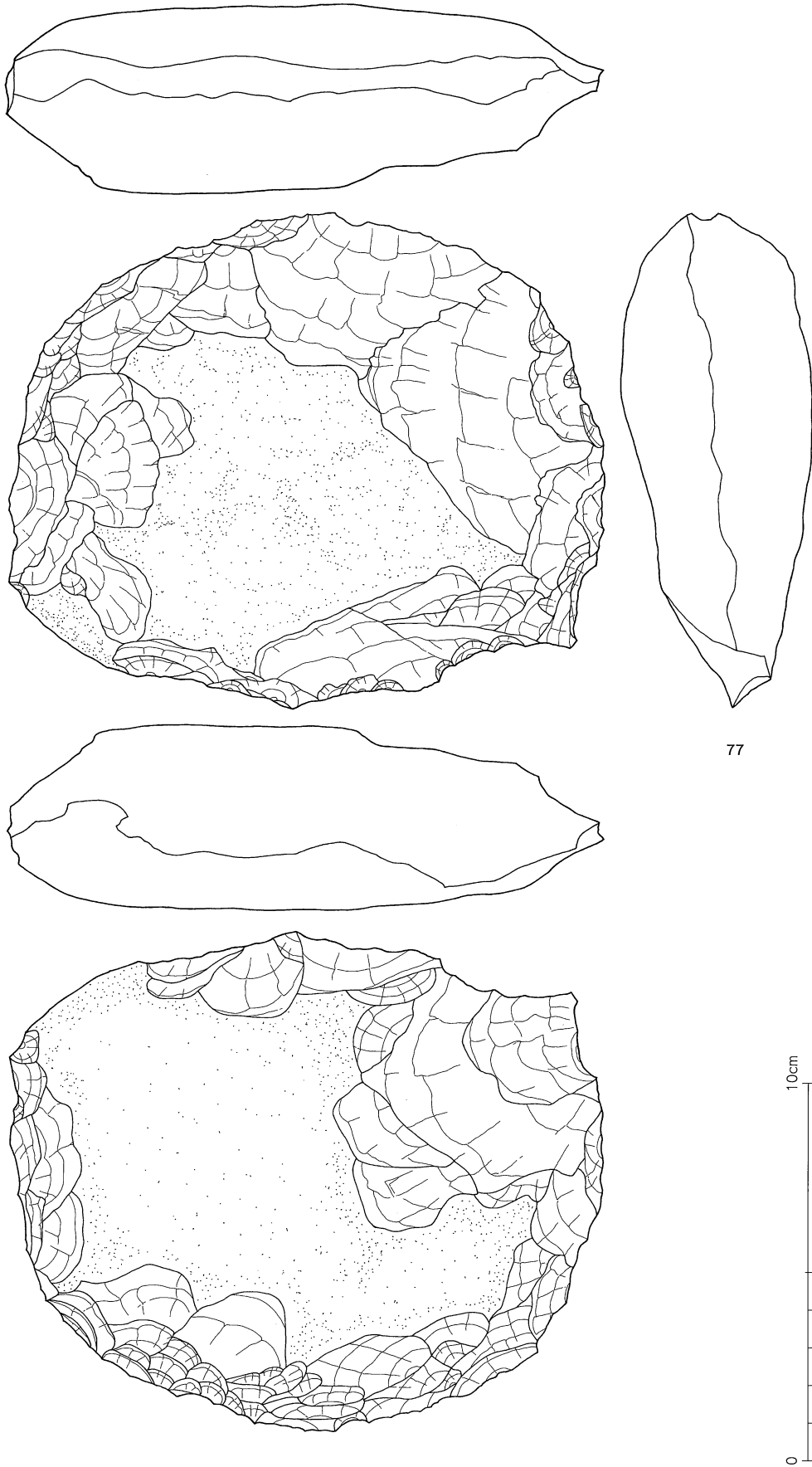
礫器：77は15cm×13cm×5cm程度の大型の扁平円礫を打ち欠いて作成したものである。礫の全周に両面から大まかな剥離を行って刃部を形成し、一側縁の刃部を潰すように小刻みな調整を多数施している。鋭角な稜の多い石器ながら大変持ちやすく、手になじむ形状である。

石錘：78・80・81は扁平な砂岩の円礫を長軸方向に両面から打ち欠いたものである。80は最初の打ち欠きを行った際に節理面で2分割しており、そのまま節理面に打ち欠きを施し完成させている。

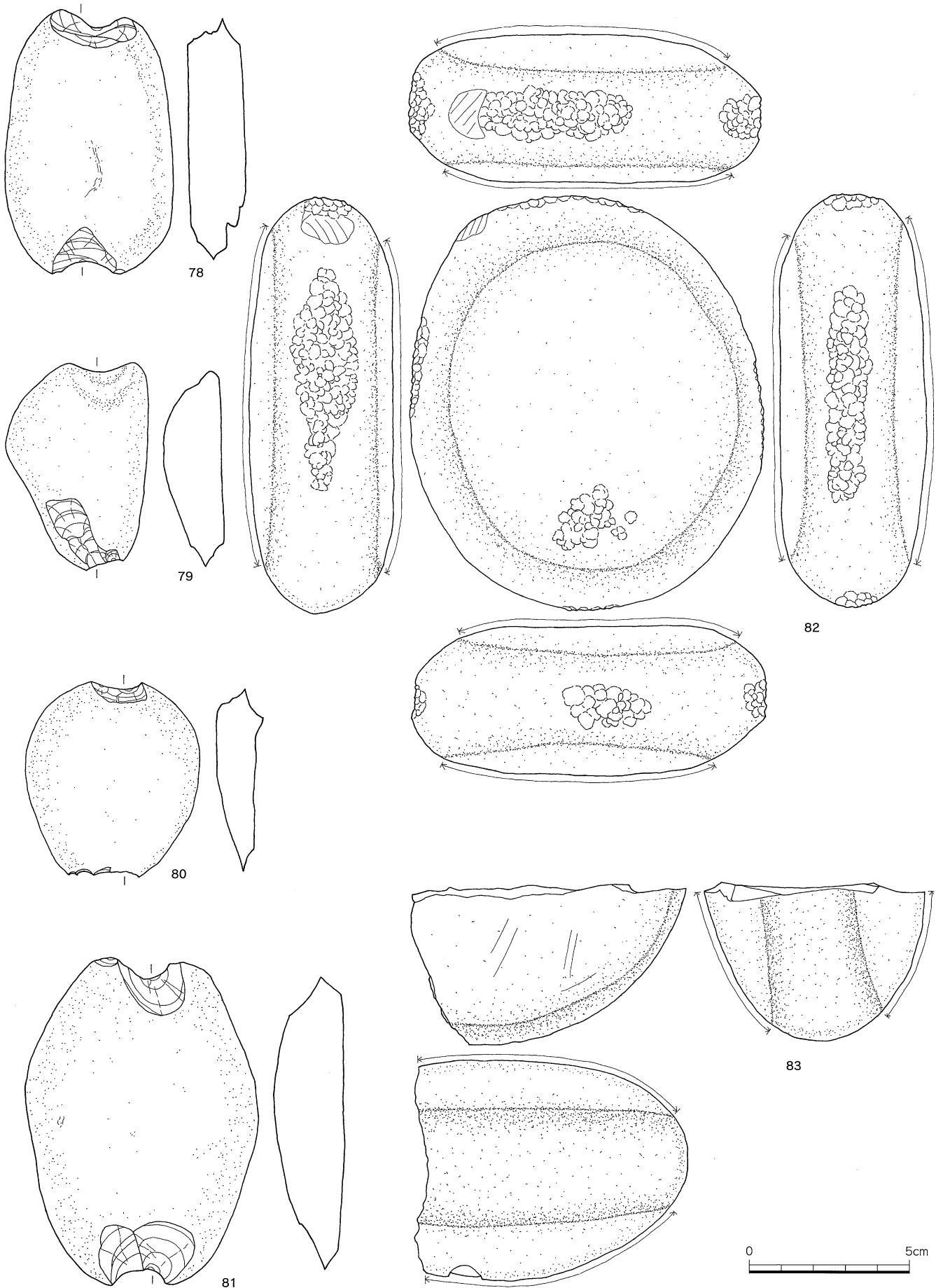


0 5cm

第15図 縄文時代石器実測図(1) (3/5)



第16図 縄文時代石器実測図(2) (3/5)



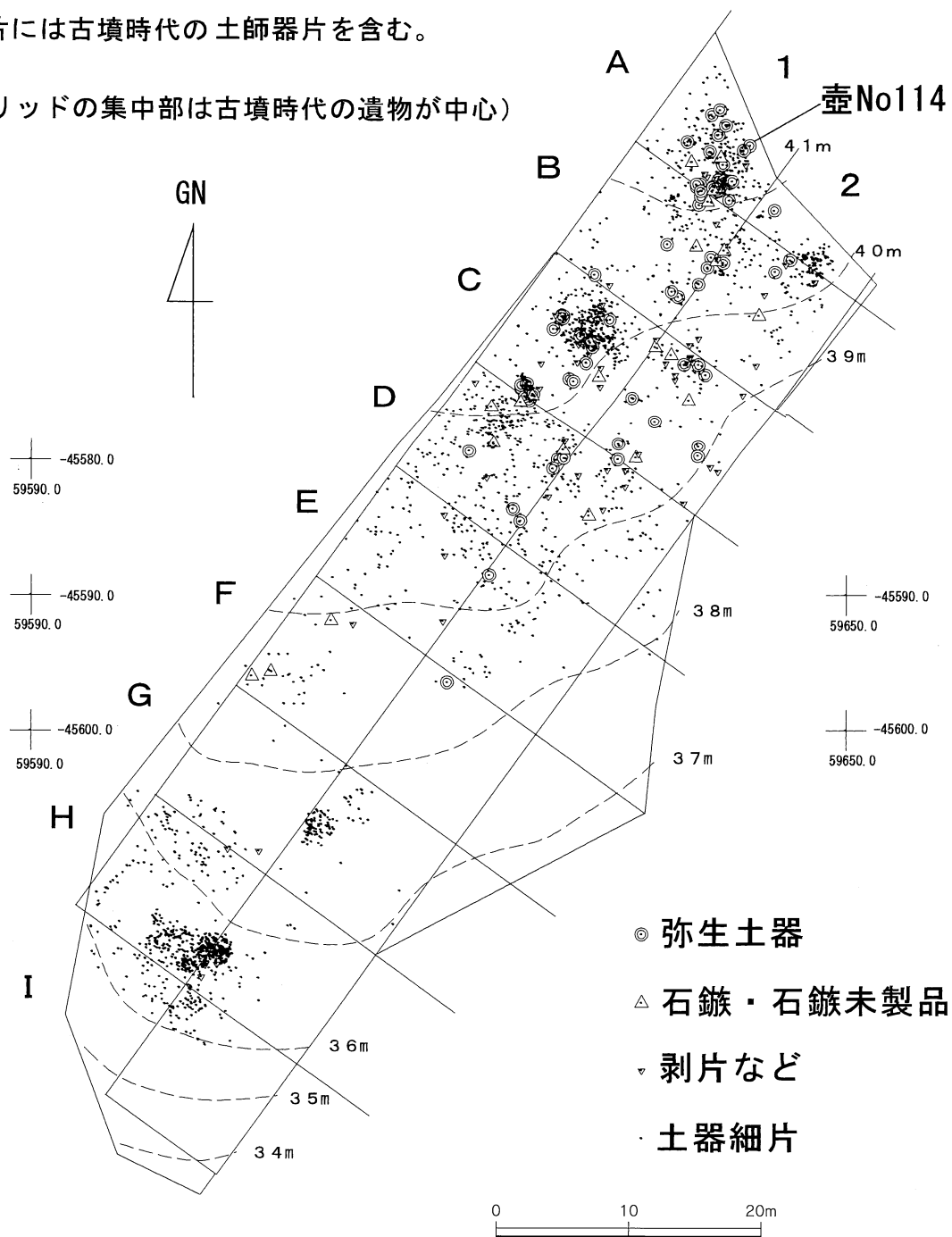
第17図 縄文時代石器実測図(3) (3/5)

その他の石材の石器 (79・82・83)

79は流紋岩質凝灰岩製の石錘である。前述の砂岩製と同様の特徴があるが、打ち欠きの一端は自然の礫形状を利用している。重量は78.4gである。82は行騫山花崗斑岩製、83はデイサイト製の磨・敲石である。いずれも硬質緻密で節理割れを起こしにくい火成岩の円礫であり、打撃に向く岩石を熟知し選択していると考えられる。

* 土器細片には古墳時代の土師器片を含む。

(G、Hグリッドの集中部は古墳時代の遺物が中心)



第18図 弥生時代・古墳時代遺物分布図 (1/500)

第3節 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構と確認できたものは北部B1グリッドの竪穴住居跡とC1グリッドの炭化物集中土坑の2基のみである。遺物は遺構を検出した北部のA～Dグリッドを中心に分布する傾向がある（第18図）。遺物の分布をみるとC1グリッドの北側に弥生土器の細片が4m×4m程度の方形に集中する区域がみられる。この集中は調査時点から目視で認識できるほどであり、精査するとごくわずかに暗色が強く感じられた。サブトレンチで縦横に確認したが、掘り込みや柱穴を判別することは出来なかった。II章で述べた堆積環境を考えると、上部が削平もしくは流出した住居の床面だけの残存を検出した可能性も否定できない。C1グリッドの遺物方形集中区域については、以上の報告にとどめ、同区域の遺物は包含層出土として取り扱う。

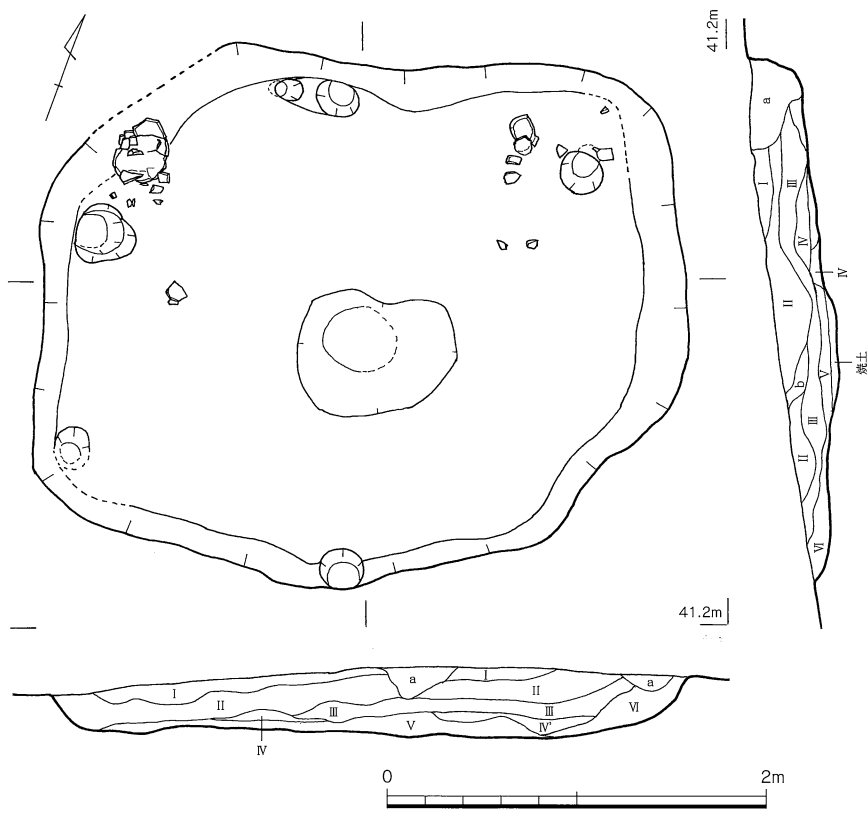
1 竪穴住居跡（第19図）（巻頭図版4）

- ・規模：4m×2.5m
- ・形状：いびつな隅丸方形
- ・柱穴：4本
- ・掘り込み：10cm～30cm
- ・焼土：中央
- ・出土遺物：壺・鉢など

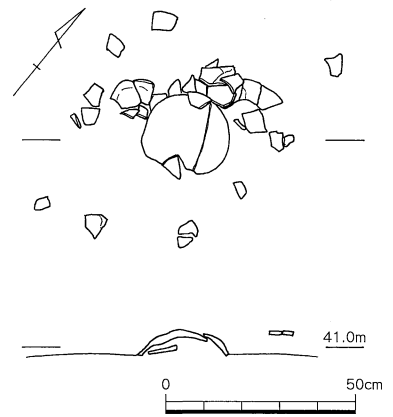
調査区北部のA1、B1グリッドの境界部に位置し長軸方向はN70°Eである。方位との相関はないが住居跡の長軸方向が等高線方向と合致している。検出層位はⅢ層上部であるが、上位数cm程度をⅢ層土で被覆されている。このことから弥生時代に同質の土壌が上方斜面から供給されている期間に住居上部は削平され、連続的に埋積されたと考えられる。住居壁面の立ち上がりは北北西の斜面上位側で約30cm、南南東の斜面下位側で10cm以下となり、床面はほぼ水平に整形され貼り床等の硬化した層は検出されなかった。柱穴は短軸上の両方の壁際に径15～20cm程度の細めのもの、長軸方向は斜面上位側に偏心した両方の壁際に径20～25cm程度の太めのものを検出した。中央部分には焼土が集中して堆積していた。焼土下位に掘り込みといえるほどのものはなく、床面で直接火を焚いているようである。埋土の堆積構造からは斜面上位からの自然流入の様子が観察できる。遺構埋土の上部からは縄文時代晩期のもと考えられる姫島産黒曜石製の五角形の石鏃が検出されている。

出土遺物（第20図：84～89）（図版13）

床面付近の遺物は北北西の壁際に集中し、二本の太い柱穴の近くに比較的良好な保存状態で出土した。84は南西側の柱穴近くより出土した器高30cmを超える壺である。胴部は球胴で中央部に最大径があり口縁部は欠損しているが直立気味で短頸のようである。底部は直径3cmの平底である。頸部から底部まで、ほぼ完形に復元できるほど残存しており、斜面上方の北北西方向からの力で圧砕されている。口縁部だけが破片すら検出できないことから、住居の上部が削平されたときに口縁部ごと住居外の斜面下方に流下したと考えられる。85は櫛描波状文と横方向の櫛描文をもつ甕、86は同様の特徴を持つ壺の胴部と考えられる。ほとんど接合しない小片であるが、床に近い埋土中より出土している。87は84によく似た状況で北東側の柱穴近くより出土した鉢である。ほぼ完形であるが、口縁部から胴部にかけて斜めにそがれたように欠損しており、住居上部の削平が比較的急激な作用であったことをうかがわせる。88は底径4.4cmの平底を呈する壺の底部である。ゆるやかに立ち上がる外面には工具による調整痕がみられる。89は底径7cmの平底を呈する甕の底部である。また、竪穴住居跡の北東数mの位置には時期的に近いと思われる壺が押しつぶれた状態（第21図・第24図－114・図版2）で出土した。

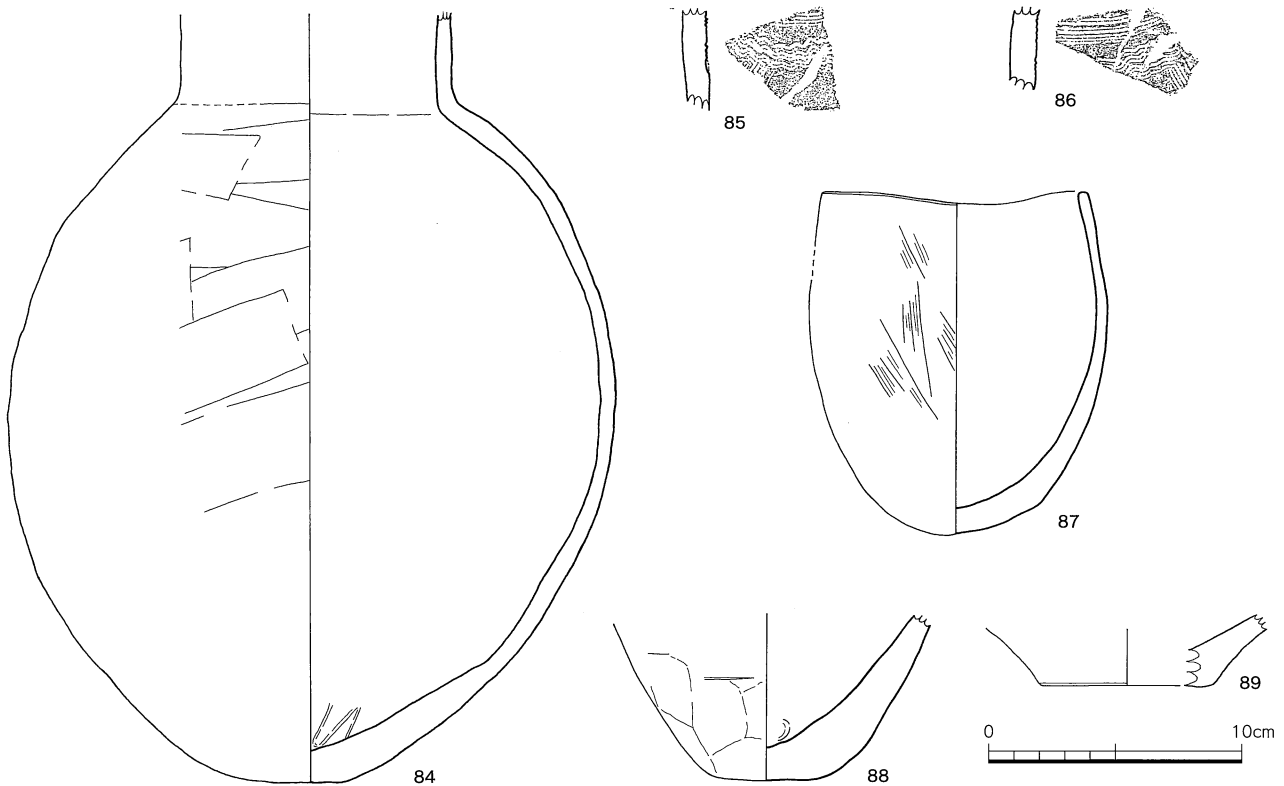


第19図 弥生時代竪穴住居跡実測図 (1/40)



第21図 弥生土器出土状況実測図 (1/20)

- SA2 注記
- I. 7.5 Y R 5/3 にふい褐色 軟質 しまり無し
わずかに二次A h粒を含む
 - II. 7.5 Y R 3/3 暗褐色 軟質 しまり無し
粘性あり 均質で混じりは少ない
 - III. 7.5 Y R 4/3 褐色 軟質 しまり無し
粘性あり 均質で混じりは少ない
(IIIとほぼ同質だが、色調が明るい)
 - IV. 7.5 Y R 4/3 褐色 IIIとVの中間的な層
わずかに焼土粒を含む
 - V. 5 Y R 5/6 明赤褐色 しまりあり
粘土質 多くの焼土粒を含む
 - VI. 7.5 Y R 5/3 にふい褐色 軟質 しまり無し
粘性あり 壁の土が混ざってブロック状
を含むピットか
- a. 7.5 Y R 3/2 黒褐色 大きなA hブロック
を含むピットか
 - b. 7.5 Y R 5/2 灰褐色 多くの白色粒子を
含む植物根か

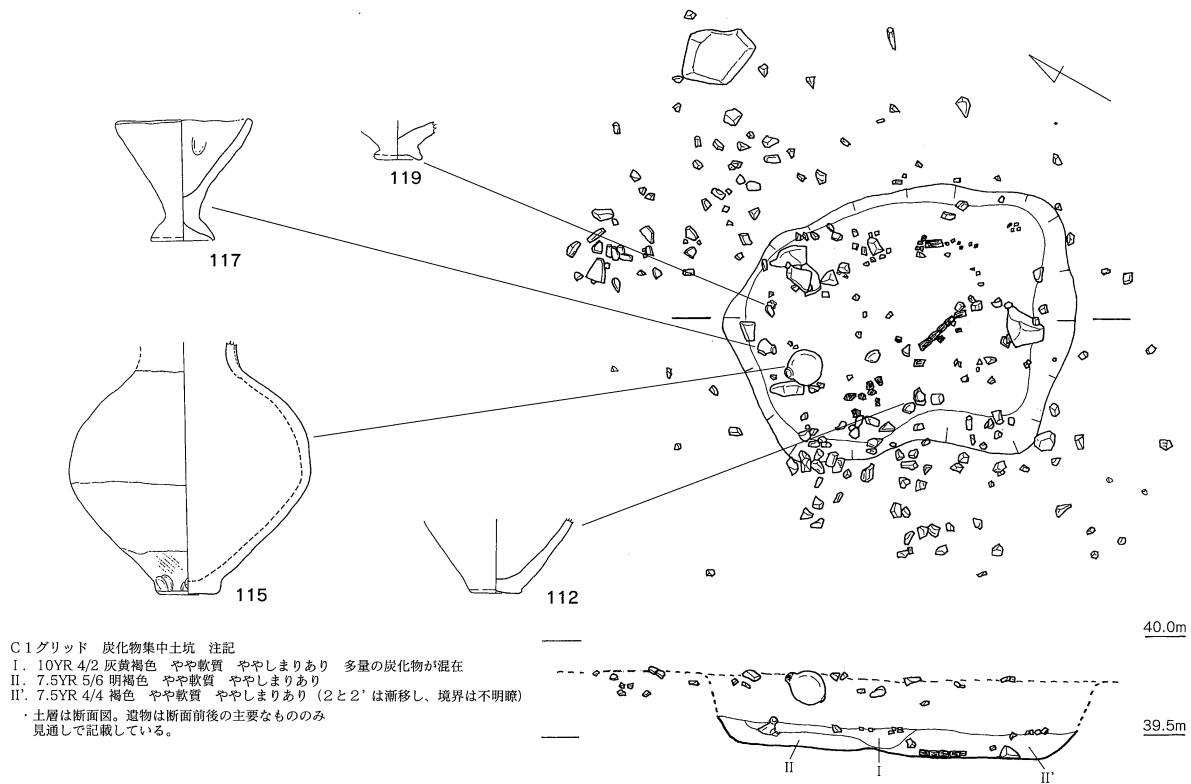


第20図 弥生時代竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

2 炭化物集中土坑 (第22図・右)

調査区中央よりのC1グリッド南部にて検出した。土坑検出位置はⅢ層上面から遺物の集中が見られ、斜面上方2m程度から50cm×40cmの平板状の巨礫や多くの小礫が土器とともに散乱していた。特に第24図-115の壺(図版14)はほとんど完形で出土している。この段階では、遺物の集中のみで土坑は検出できていない。(第22図・右) この下位約5~10cmで土坑を検出している。

土坑は2m×1.5mのくずれた隅丸方形を呈し、底面に最大で長さ20cm、直径5cm程度のものから小指大のものまで多数の炭化材を検出した。炭化材は南東側半分に集中する傾向があり、北西側半分には112・117・119といった鉢や甕の底部(図版14)が出土した。上位の散礫・遺物と土坑が直接関係があるかどうかは不明であるが、土坑底部から出土した遺物と上位のものとの接合がみられる。両者の関連性は高いと思われるが、遺物は包含層遺物として記載する。



第22図 弥生時代 炭化物集中土坑実測図(遺構1/40・遺物1/6)

3 弥生土器 (第23図: 90~106、第24図: 107~121) (図版15~17)

甕・口縁部 (90~106)

90~92は直立する口縁部に断面三角形の刻目突帯を巡らした下城式土器である。90・92には口唇部にも刻目を有する。94は刻目のない断面三角形の貼付突帯を1条を巡らせた甕であり、器形は90~91の甕に類似する。93は頸部に1条の刻目突帯を有する壺である。95はやや下ぶくれの球形胴から小さく外反する直口縁を有する壺である。口唇部は拡張した先端をわずかに凹ませており、頸部に2か所の穿孔がある。胎土に含まれる鉱物粒が微少で調整が他の土器と比較して丁寧であり瀬戸内

系の影響を受けた土器と考えられる。96・97は櫛描波状文と横方向の櫛描文をもつ壺の胴部である。これは北部の竪穴住居跡出土遺物に類似している。98は細い沈線を1条有する壺の胴部である。99・100・103～106は口縁部がゆるやかに「く」の字に外反し、口唇部が平坦に作られる甕である。99～102は口縁部と胴部の屈曲直下に斜短線の刺突列が巡る土器である。99の刺突列は左上がり、100は右上がりで施されている。101・102は刺突列の直上に3条の凹線が平行に巡る壺の頸部である。胎土・色調等から同一個体とも考えられる。103～106は刺突列がなく、胎土に2mm以上の鈳物粒を多量に含む。

甕・胴部・底部 (107～113)

底部から口縁部まで接合した個体はないが、長胴で上部に最大径のある甕と考えられる。すべて端部はごくわずかに張り出すか、ほとんど張り出さない。107・109・112・113は平底で、110・111はごくわずかに上げ底となっている。

壺 (114・115)

114は竪穴住居跡の北東から押しつぶれた状態で出土した。2mm程度の鈳物粒を多量に含み風化が著しい、レンズ状底部の球形胴で口縁部はゆるやかに外反する。115は炭化物集中土坑の直上より口縁部が欠損している他にほとんど破損が無い状態で出土した。貼付円盤状の平底で中央部に最大径がある球形胴である。胴部には明瞭な接合痕が見られる。

鉢 (116～121)

116は平底の偏球胴形で口唇部は丸く作られ口縁部が内湾する。118は平底で胴部が直線的に広がりながら立ち上がる。117は手捏ねで直線的な逆円錐形の胴部を持ち、外方に張り出した上げ底の小さな底部をもつ特徴的な鉢である。119～121は117と同様の器形をもつものの底部と思われる。これらはほとんどがC1グリッドの炭化物集中土坑周辺出土であり胎土も類似している。

4 石器 (第25図：122～130、第26図：131～145) (図版18)

いずれも圧砕されて片理構造があり、加工によって薄く剥がれる特性のある岩石を石材に選択している。これらは、延岡近郊で容易に採取可能であり、製作時に黒色もしくは緑色を呈する岩石を選択的に使用している可能性がある。

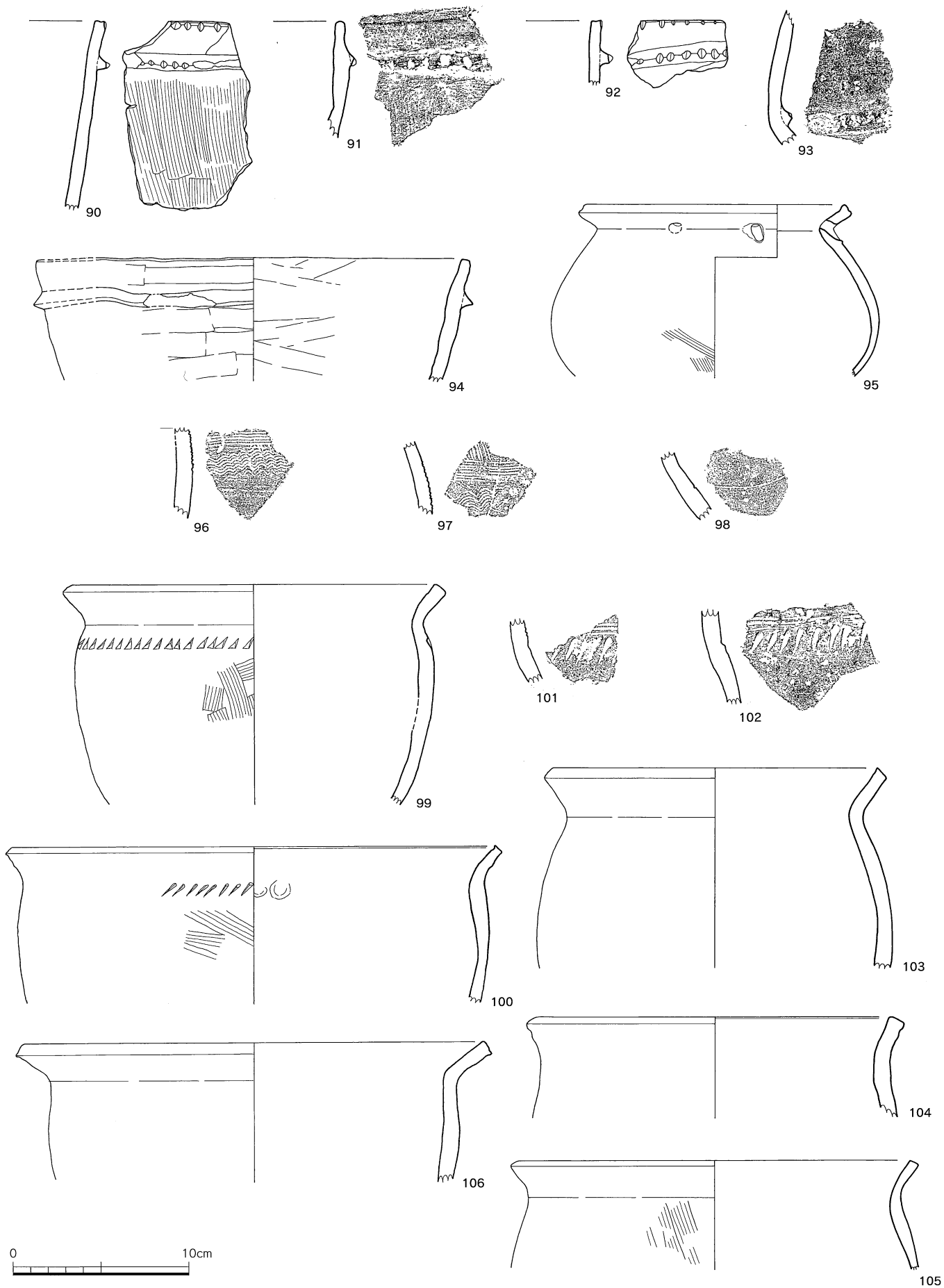
黒色千枚岩製石器群 (122～130)

122は先端部が欠損した磨製石鏃である。無茎平基で、側縁を緩やかにカーブさせる砲弾形である。刃部はカーブに沿って丁寧に研磨されている。123～126・128は石鏃未製品である。123の形態は122と類似しており、研磨直前と思われる。129は磨製石斧である。側縁は面状に、刃部は両側から研磨されている。130は石核であり、礫面を剥がした剥片が127である。そのほかは石器の作成過程の段階をおったものと考えられる。これらを石鏃等の作成の中途段階であると考えるとき、次の点が観察できる。

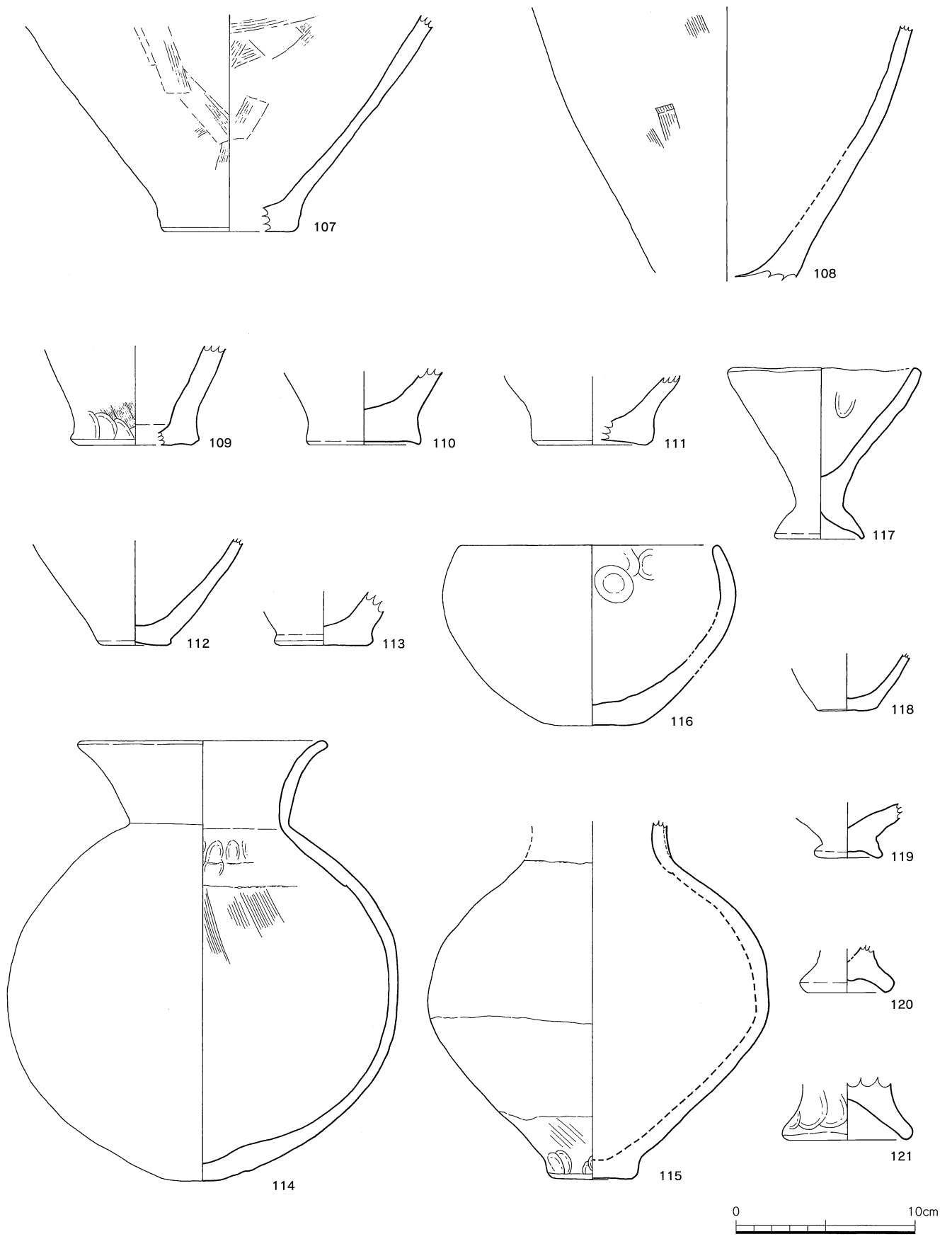
①片状に剥離する千枚岩を片理面に対して垂直に大きな力を加え薄い板状に整形している。

②柳葉状に成形していく段階で外周を尖頭状の工具で5mm程度ずつ小刻みに砕いている。

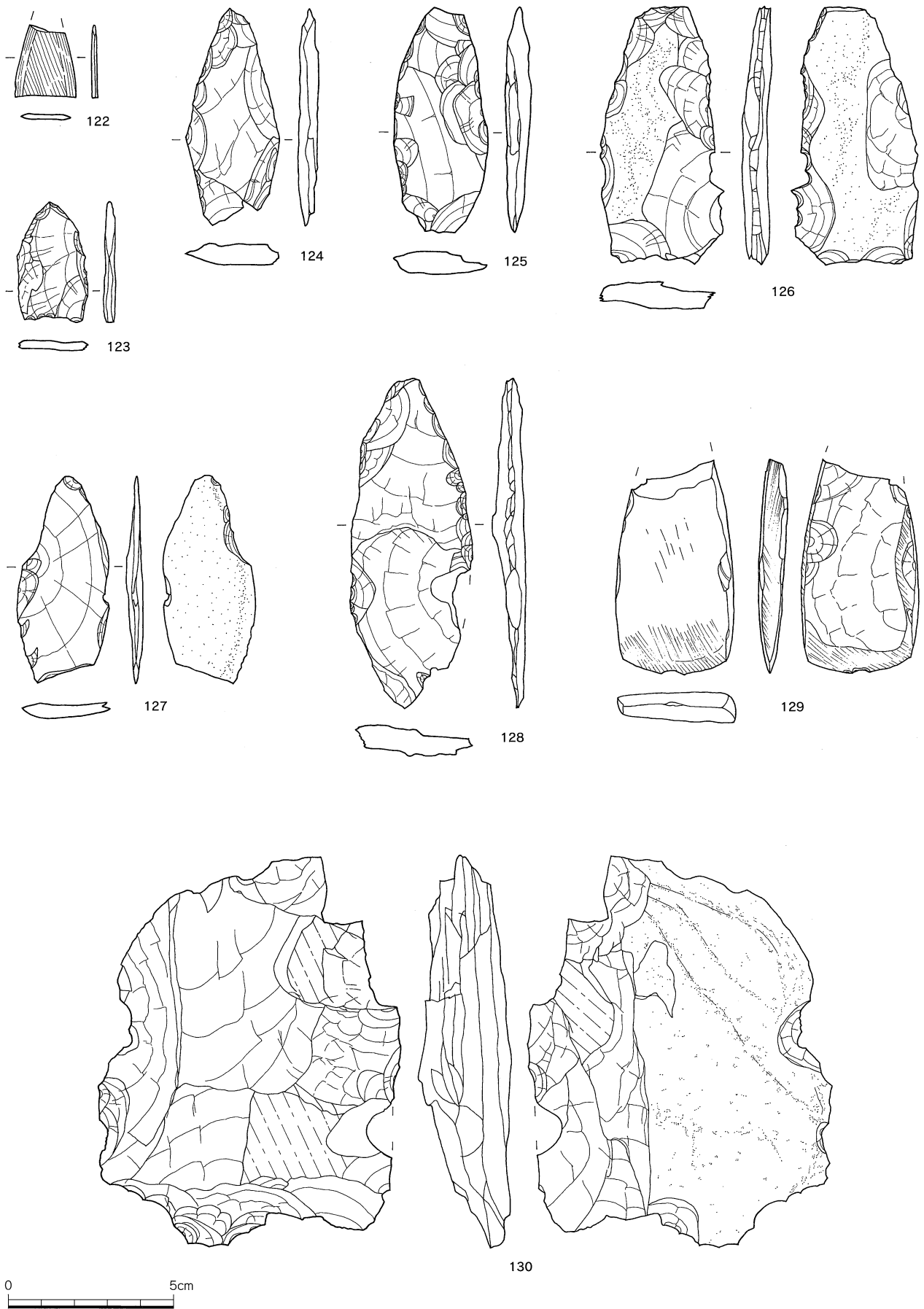
(実験的に千枚岩を鉄釘で成型すると同様の小刻みな剥離を作成できた。第IV章参照)



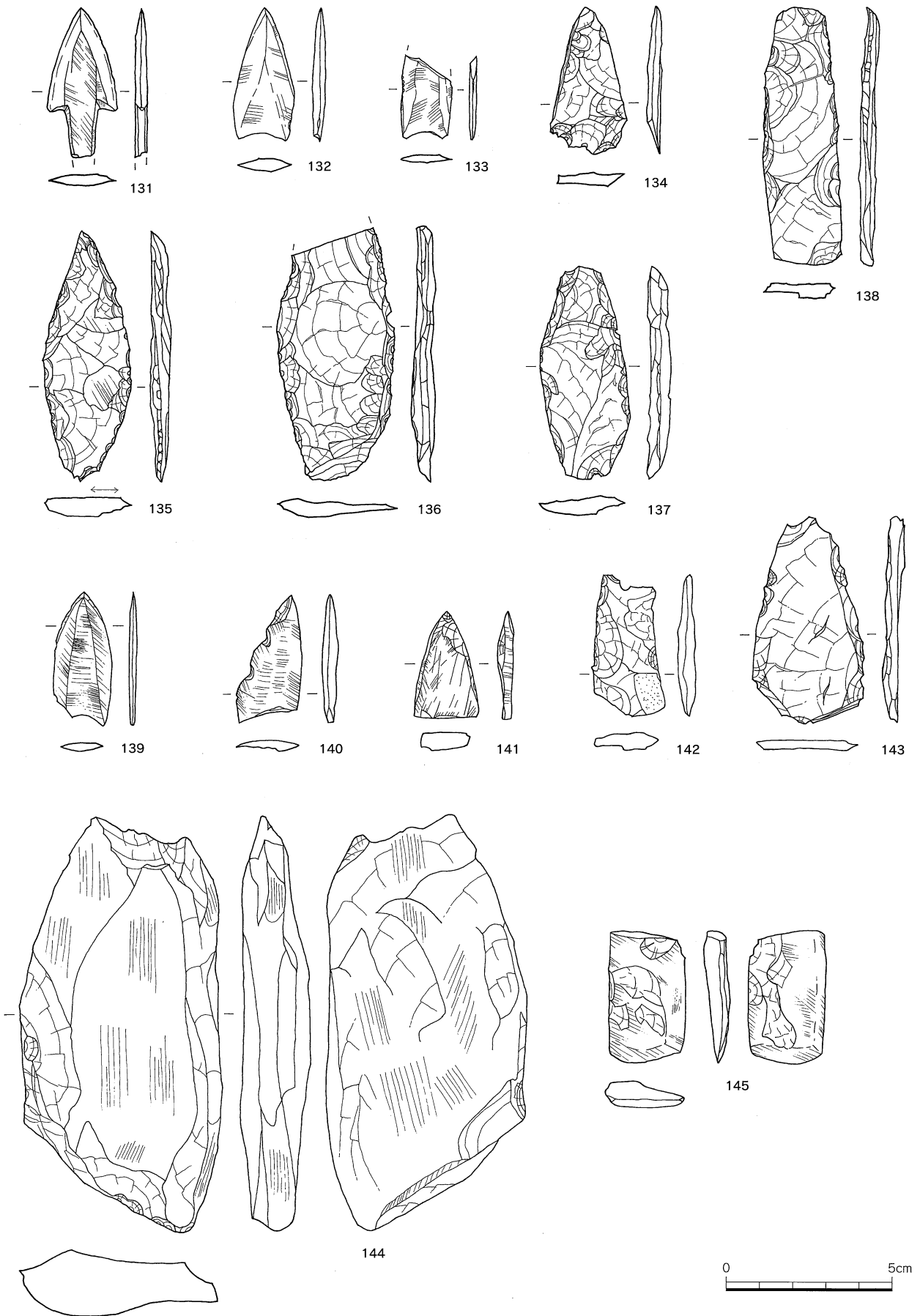
第23图 弥生土器実測图(1) (1/3)



第24図 弥生土器実測図(2) (1/3)



第25図 弥生時代石器実測図(1) (3/5)



第26図 弥生時代石器実測図(2) (3/5)

緑色頁岩製石器群 (131~138)

本石材は、岩石名としては多色頁岩と称され、堆積環境等の差違によって赤色もしくは緑色を呈し、延岡近郊で普通に採取できる。赤色頁岩は北川町で多産され硯の材料などに使用される。しかし、本遺跡では赤色部分は全く使用されず、緑色部分のみ使用していることが興味深い。

131~133は磨製石鏃である。131は有茎であり丁寧な研磨が施されている。132・133は、なだらかなカーブを描く側縁の基部側がわずかに細くなり、基部はわずかな凹基である。134~137は未製品であり黒色千枚岩で観察された①、②の特徴を共有する。138は形状が長方形であるが、周縁に微細な剥離が連続的に見られ同様な未製品と考えられる。

緑色凝灰岩製石器群 (139~143)

細粒の凝灰岩であるが淡緑色を呈しており、緑色頁岩と同質の石材として扱われた可能性は高い。139は上記の132・133と同様の形状である。140は研磨面に稜が見られず、折損後に再成形しようとした可能性がある。141は全面に研磨を開始している未製品である。142・143は未製品として共通する特徴を有する。

黒色頁岩製石器群 (144・145)

144は砥石である。片理が無く、細粒で塊状であるため、研磨に適している。145は両刃の磨製石斧である。風化の具合から弱い熱変成を受けており、作成当時は硬質黒色の石材であったと思われる。研磨後も表面に初期成形段階の剥離による若干の凹凸が残っている。

第4節 古墳時代の遺構と遺物

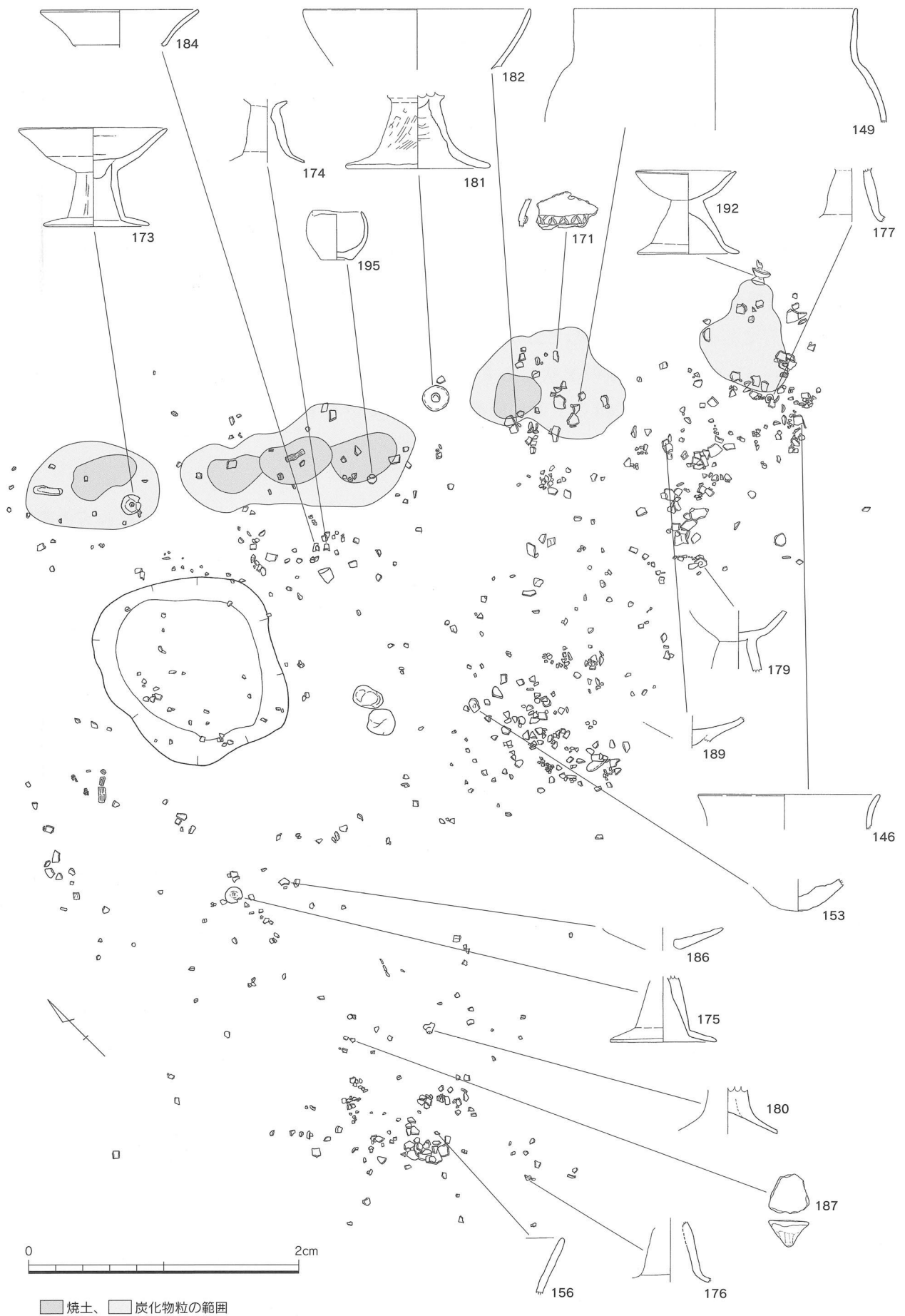
古墳時代の遺物は調査区南部のH1~I1グリッドのIV層に集中して多数出土したほか、耕作等で破壊されているGグリッドにも小規模な出土があった。北部には少数の散在にとどまった。

遺物の形態から、おおむね5世紀末から6世紀初頭にかけてのものと考えられる。

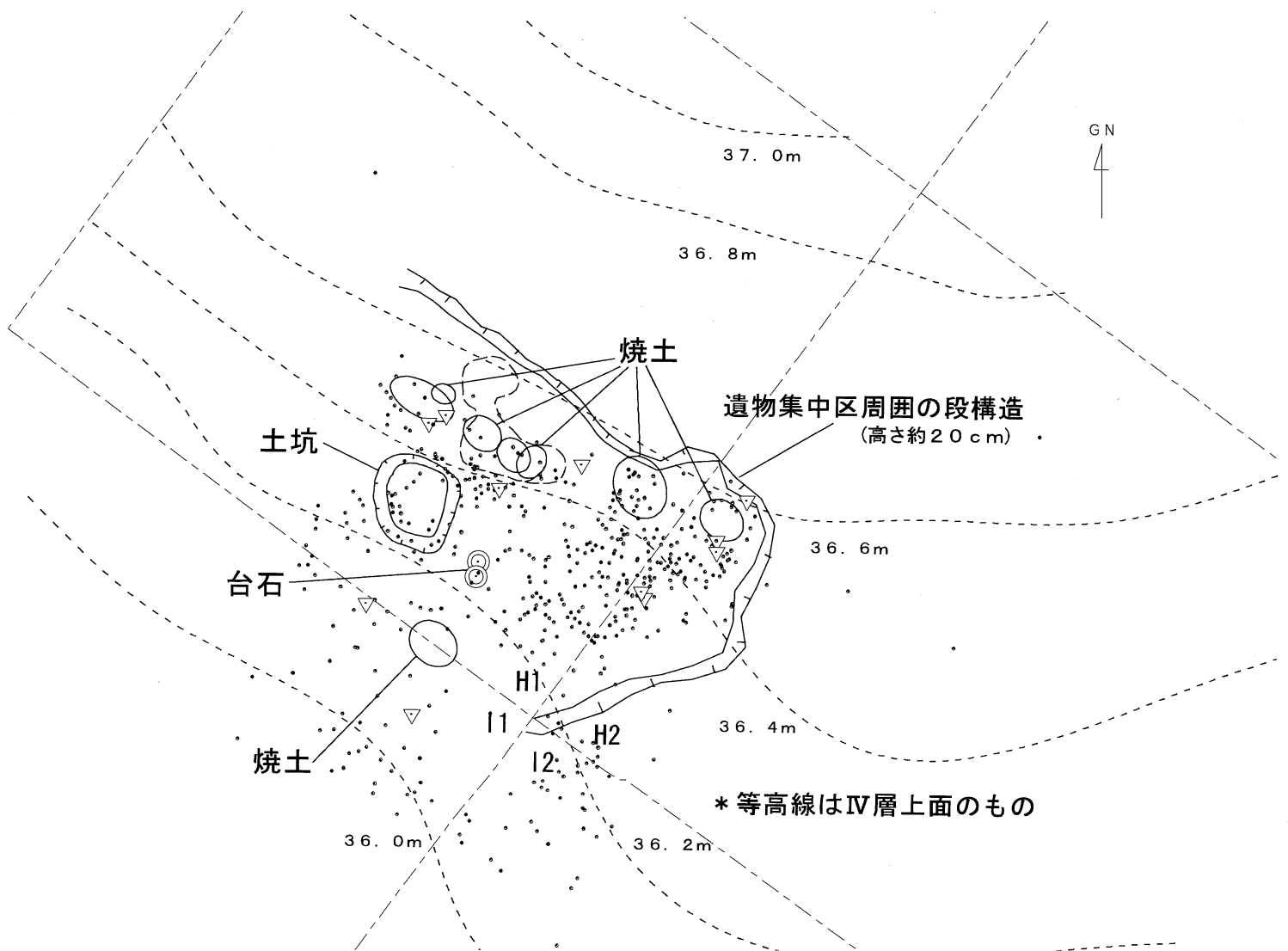
1 遺物・焼土集中区 (第27・28図) (図版3)

上記の土器の集中した区域周辺では列状をなす焼土、および台石と土坑の組み合わせが検出され、遺構として記載する。

H1グリッド南東部を中心に一辺約6mの正三角形に遺物・焼土が分布する。遺物の集中はIV層上面から始まる。同色の埋土のため不明瞭ながら約20~30cmほど斜面側を掘り込んで地面を水平に成形しているようであり、遺物集中のピークは掘り込まれた段構造の内側下部に集中する(第28図)。正三角形の北側の高平山に向いた辺には、径40~50cm程度の焼土が6か所、列を成している。周辺からは炭化物粒が検出されるが、炭化材と呼べる大型のものは検出できなかった。中央の3か所は連続しており、右側からミニチュア土器が出土した。焼土の下に掘り込みはなく、地面で直接火を焚いたようである。出土した土器は高坏が多く、約10点前後が確認できた。土器の分布は南東の辺の3か所に集中した。正三角形の中心付近には径20cmの砂岩の扁平な円礫が置かれ、焼土との間に径1.5m、深さ約10cmの土坑が存在した。それぞれの要素は幾何学的な分布を見せ、遺物の構成から日常的な生活の痕跡というより祭祀的な行為を行った場所ではないかとの推測も成り立つ。



第27図 古墳時代遺物・焼土集中区実測図（遺構1/40・遺物1/6）



第28図 古墳時代遺物・焼土集中区分布図 (1/100)

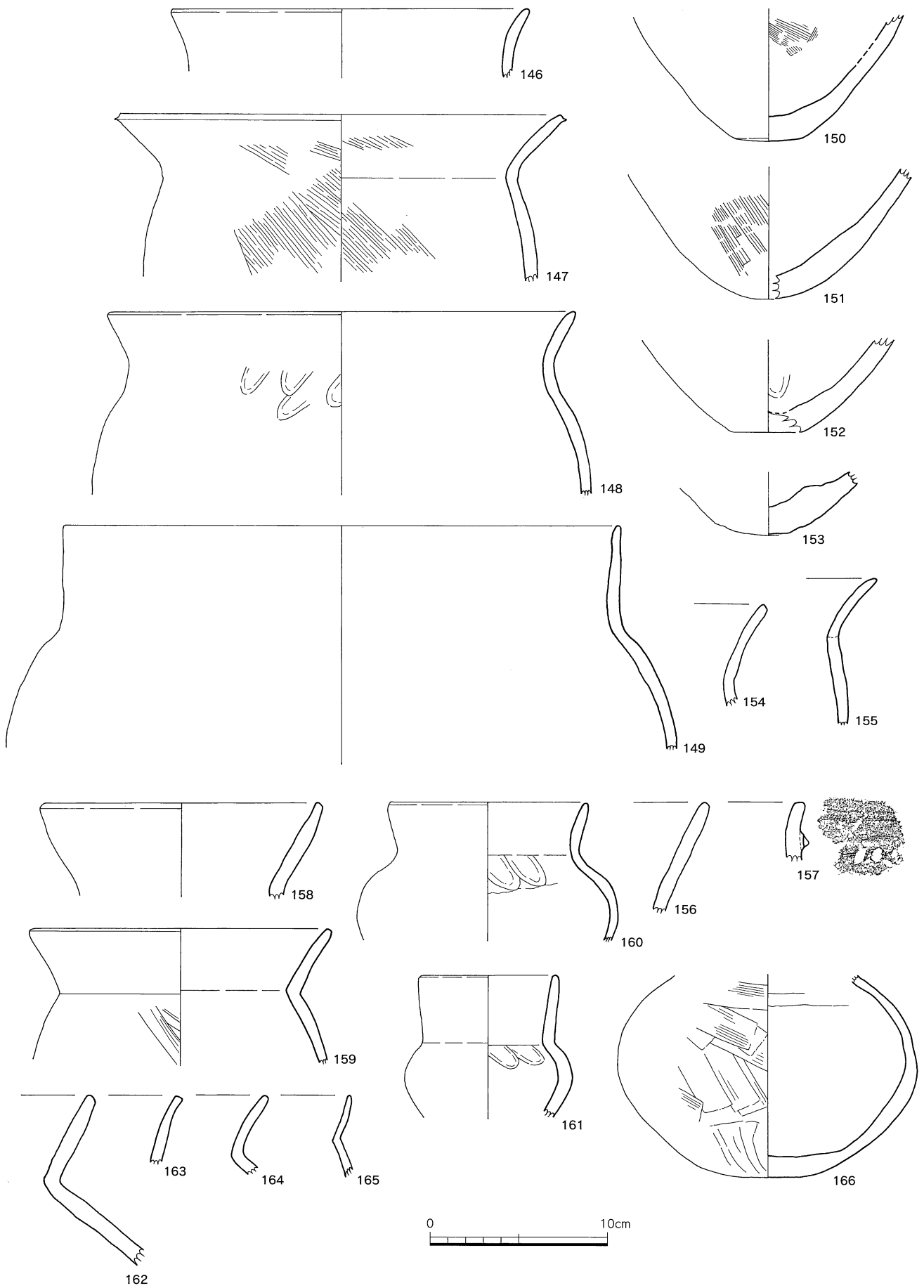
2 土師器 (第29図: 146~166、第30図: 167~196) (図版19~23)

甕 (146~157)

146~149・154~157は甕の口縁部である。148・155は頸部がなめらかに屈曲し明瞭な稜が無く、口縁部が緩やかに外反し、口唇部が丸く作られる甕である。154はこれらに類似した口縁部の形状を有するが口唇部がわずかに平坦に作られ、色調が赤みを帯びている。147は頸部の屈曲が強くわずかな稜をもつものであり、口径が胴部径を上回り、内外面ともに明瞭なハケ目を施し、口唇部は明瞭に平坦である。これは南部のH~IグリッドのIV'層に集中する古墳時代の遺物群ではなく、GグリッドIII層出土の一群である。弥生土器である可能性もあるが供伴遺物(150~152・159・178)から、これらの一群を古墳時代の遺物と判断し記載する。149は口縁部が直立気味、156は口縁部がわずかに外傾している。いずれも口縁部は直行し、先端部が丸く作られる点が共通している。150~153は内湾しながら立ち上がる甕の底部である。150・152は平底、151・153は丸底である。157は刻み目のある突帯を貼り付けた甕の口縁部で、口唇部がわずかに平坦に作られるものである。

壺 (158~172)

158・159・162~164は口縁部が直行し外反する壺である。頸部の残るものは比較的明瞭に「く」の字に屈曲する。160は胴部が縦方向につぶれた球形で、口縁部が直行しわずかに外反する壺である。161は縦方向につぶれた球形の胴部にほぼ直立気味に直行する口縁部を有する小型の壺(小埴)である。165も小埴であるが、器壁が薄く口縁部がわずかに内湾する。166は縦方向につぶれ



第29図 古墳時代土師器実測図(1) (1/3)

た球形の胴部で、不明瞭な平底の底部を有する中型の壺である。167・168は4本櫛目の櫛描波状文を施した複合口縁壺の拡張部である。外傾する二重口縁部の口唇部側が接合面より剥離しており接合面に条線を施している。口唇部は欠損している。炭化物の付着等により2点の色調は異なるが、どちらもC1グリッド出土であり、調整、胎土等に類似点が多いことから同一個体の可能性もある。169は外面に斜方向のハケ目の後、横方向にナデ消す調整を施している壺の胴部である。器壁が薄く、胎土のきめが細かく堅いなど、本遺跡の土師器中では異色の特徴を備えている。170～172は刻み目のある突帯を有する壺または甕の頸部である。171の刻み目は双方向から施されている。

高坏 (173～191)

高坏は19点である。このうち178・188・190・191の4点以外の15点はすべて調査区南部H1・2～I1・2グリッドのIV'層の遺物・焼土集中区より出土したものである。これらは脚部形態で2類、裾部形態で2類、坏部形態で2類、充填部形態で2類に細分できる。それぞれ出現頻度の多い順にI、II類とした。

脚部形態

- ┌ K I 類：直線的な円錐形であるもの (173・174・179・180・181)
- └ K II 類：わずかにエンタシス状であるもの (175・176・177・178)

裾部形態

- ┌ S I 類：脚部と裾部の境が明瞭で平板状に広がるもの (173・174・175・176・191)
- └ S II 類：緩やかなカーブでラッパ状に広がるもの (180・181)

坏部形態

- ┌ T I 類：屈曲部からほぼ直行し外傾する口縁部をもつもの (173・183・184)
- └ T II 類：全体的に緩やかな内湾傾向を示すもの (179・182)

充填部形態

- ┌ J I 類：へそ状突起を有するもの (173・178・181・187・188・189)
- └ J II 類：突起を有さないもの (179・190)

173はほぼ完形の個体であり、上記の分類ではK I・S I・T I・J Iの特徴を有しており、本遺跡の高坏は、このグループの出現頻度が高いと思われる。

器台 (192)

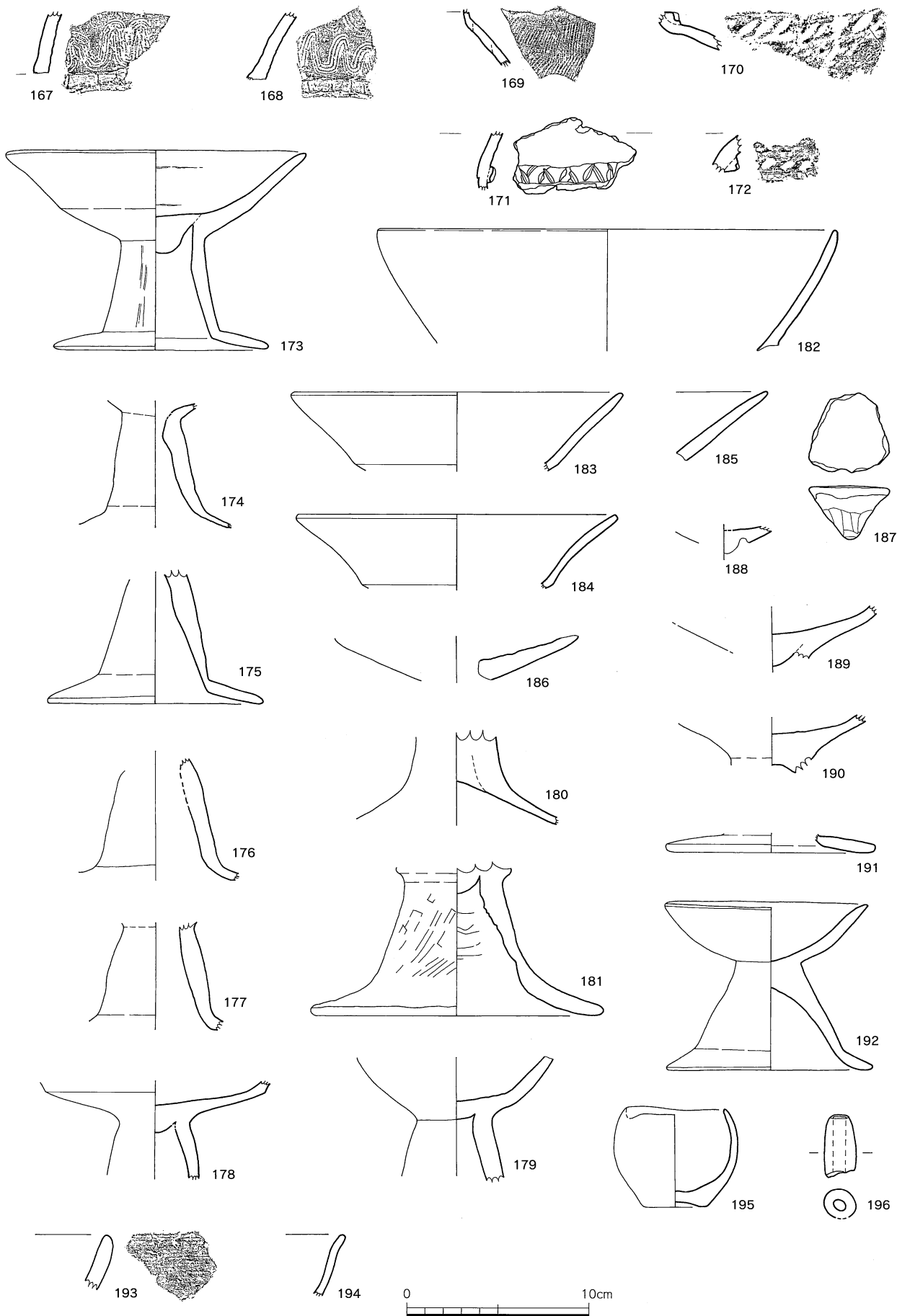
192の1点のみを器台とした。形態的には高坏の可能性を考慮する必要もあるが、前述の本遺跡の高坏の形態的特徴から類似する個体は無く、特に坏部が裾部より小さいことや、坏部に全く屈曲が見られないこと、脚部から裾部への独特のカーブ、さらに接合方法など、高坏類との相違点が大きいためから目的用途の違う器種では無いかと考え器台とした。

鉢 (193・194)

いずれも口縁部の小片であり、詳細な器形は不明である。193はごくわずかに内湾し、横方向のハケ目が明瞭である。194は薄い器壁で緩やかに外反するものである。

ミニチュア土器 (195)

1点のみの出土である。調査区南部H1・2～I1・2グリッドのIV'層の遺物・焼土集中区の北側(高平山山頂側)に並ぶ焼土列のほぼ中央より出土したものである。手捏ねの薄い器壁を有する球形で、わずかに上げ底の平底である。



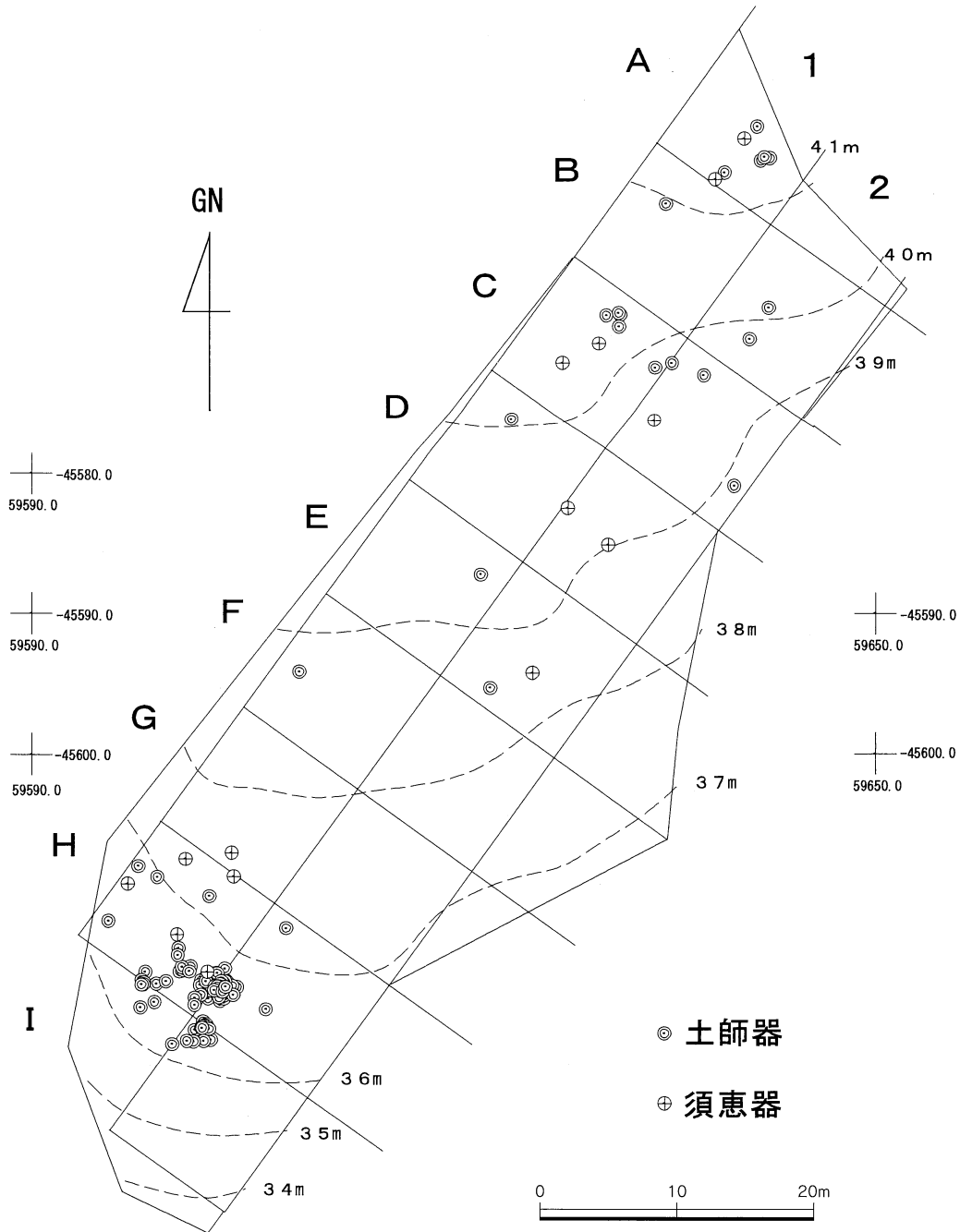
第30図 古墳時代土師器他実測図(2) (1/3)

土鍾 (196)

時代不詳であるが、H 1 グリッドのⅣ' 層出土であることから古墳時代の遺物として記載する。

第5節 古代の遺構と遺物

古代の遺物は調査区南部のH、IグリッドのⅢ層で検出した遺構を中心に分布するが、北部のA～Cグリッドにも散在する (第31図)。遺物全体の様相は8～9世紀にかけての遺物と考えられる。



第31図 古代遺物分布図 (1/500)

1 竪穴住居跡 (第32図) (図版5)

- ・規模：4.5m×4.2m
- ・形状：方形
- ・柱穴：4本 (不明瞭)
- ・掘り込み：20cm～30cm
- ・焼土：なし
- ・出土遺物：甕・坏など

調査区南部のH1、I1グリッド境界部の東端に位置し長軸方向はN45°Wである。方位との相関はないが住居跡の長軸方向が等高線方向と合致している。検出層位はⅢ層上面であるが、遺構上部は削平されており、薄く途切れ気味のⅡ層と厚く堆積するⅠ層の角礫層に被覆されている。埋土は主として黒色～暗褐色であり (埋土Ⅰ層)、アカホヤ火山灰層上位の黒色土壌に類似している。完掘状況では中央部がやや窪地状に掘り込まれるが、その部分には砂質で、やや硬質な土 (埋土Ⅱ層) で水平に埋められており、上面に土器の小片が集中することから、ここを床面として使用したと考えられる。床面に埋没するように幅20～30cm、厚さ15cm程度の大型の角礫が5個検出された。(第32図に図示) 相互の位置に規則性は見いだせず、用途不明である。柱穴は深さ10～20cm程度のものが複数個検出されたが、位置に規則性や対象性が乏しく、不明瞭である。遺構と周辺のⅢ層上面には小規模な亀裂が等高線の方向に数本検出された (巻頭図版3)。この亀裂は地震による斜面下方への緩やかな地盤の移動が原因と考えられる。

出土遺物 (第33図：197～202) (図版24)

197～201は甕である。197は甕の口縁部である。胴部から直行する口縁が外傾してわずかな稜を作り、口唇部は上部が水平になるように平坦に作られている。頸部外面には1条の凹線を有し、頸部から胴部にかけて斜方向の荒いハケ目が明瞭である。これは包含層遺物の203～207と同様の特徴を有し、本遺跡から出土する古代の遺物の主体をしめるものである。198は緩やかに外反する口縁部を有し、口唇部に1条の凹線を施す甕である。199は外面に格子目のタタキ、内面に同心円状の当て具痕が残る甕である。200・201は甕の底部である。200は木葉の圧痕が残り、わずかに外反しながら立ち上がる。201は緩やかに内湾しながら立ち上がり、径の小さな平底を有する。202は平底の坏である。これは遺構床面直上の出土である。

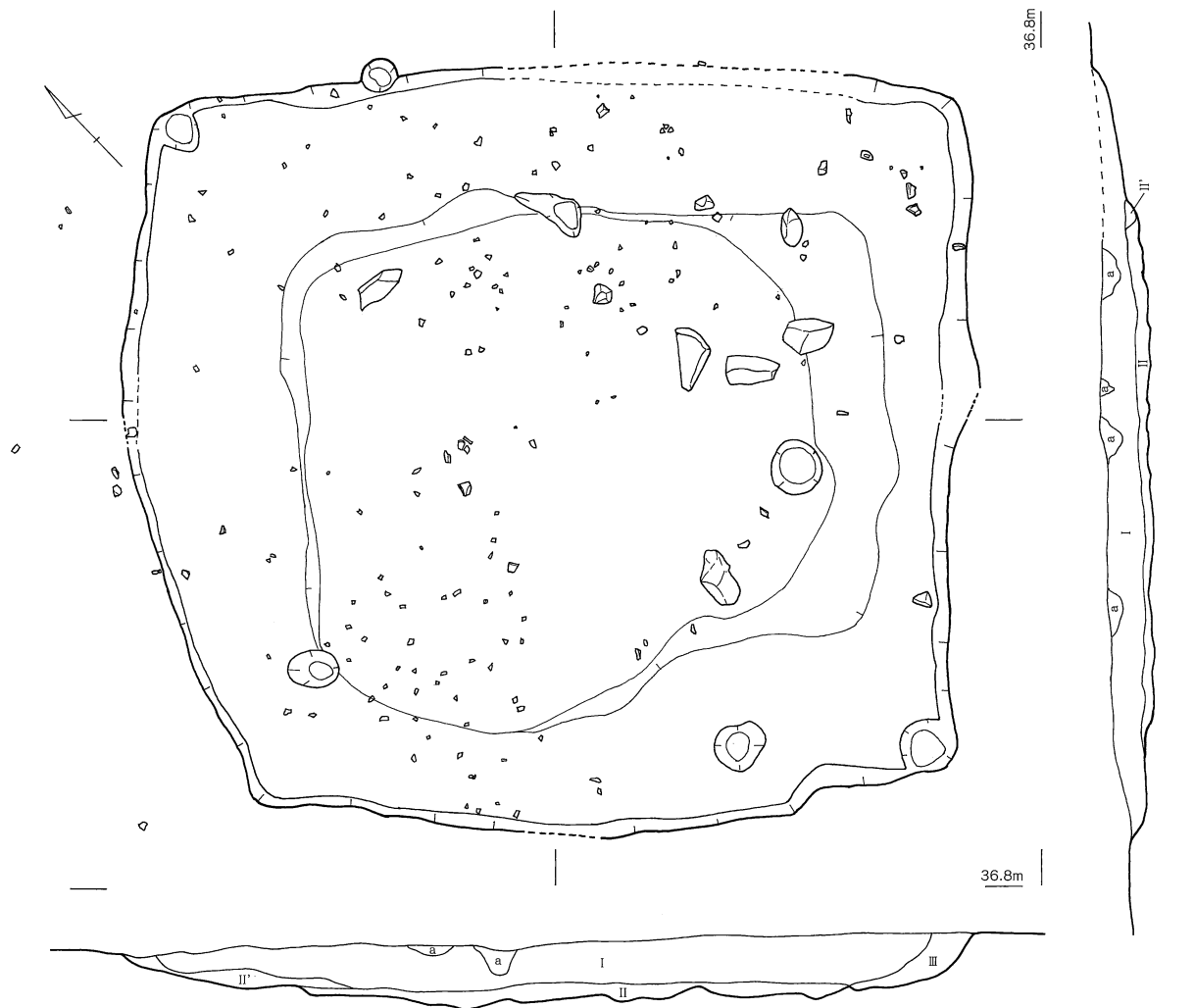
2 土師器 (第34図：203～217) (図版25・26)

甕 (203～209)

203～206は前述の竪穴住居跡出土の甕197と同様の形態を示す甕の口縁部である。この形態を示す遺物は調査区南部のH、Iグリッドの遺構周辺を中心に遺物点数約100点、総重量約1kg程度出土したが、接合状況は芳しくなく、胎土、色調、器壁の厚さ等を観察すると同様の形態をした複数の個体が確認できる。胴部と底部が接合した資料はないが、おそらく207がこれらの底部であろうと考えられる。これは丸底で外面全体にハケ目を有し、底部のハケ目がわずかにつぶれている。総合すると、直行する口縁部と平坦な口唇部を有する頸部の締まらない外面に明瞭なハケ目をもつ丸底の甕の一群の存在が考えられる。208は外面にタタキ目のある丸底の甕である。この形態を示す遺物は約30点、総重量約600g出土している。209は甕の底部である。丸底風の厚い底部となる。

坏 (210～215)

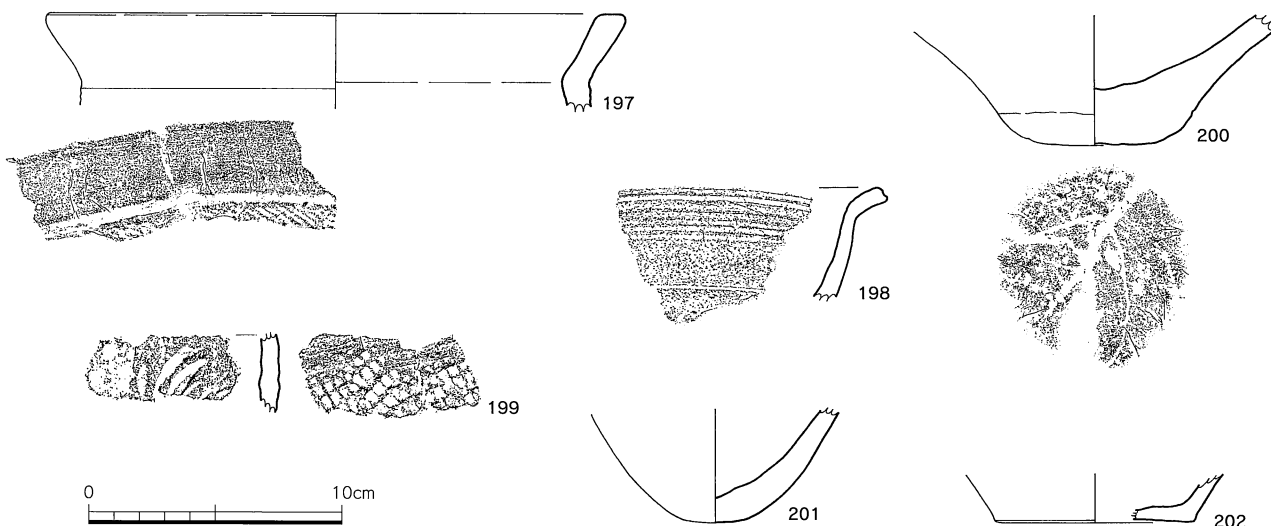
210～212はC、Dグリッド出土、213～215はH、Iグリッド及び同位置の試掘トレンチ出土である。いずれも回転ナデによる成形であるが、210～212はへら切りの平底、213～215はナデによる平底である。



- SA1 注記
 I. 7.5 YR 1.7/1 黒色 軟質 しまり無し わずかに焼土粒、炭化物粒を含む (縄文早期の層と思われる)
 II. 7.5 YR 3/3 暗褐色 やや硬質 しまりあり 砂質 多くの炭化物を含む 上面に土器小片が集中
 II'. 7.5 YR 4/3 褐色 IIの土に基本土層III層の土が混在 多くの炭化物を含む
 III. 7.5 YR 4/4 褐色 しまり無し 遺構の壁が崩れ、Iと混在土
 a. 基本土層II層の土が、地滑りによる割れ目に入り込んだもの地表では地割れ状に帯をなす



第32図 古代竪穴住居跡実測図 (1/40)



第33図 古代竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3)

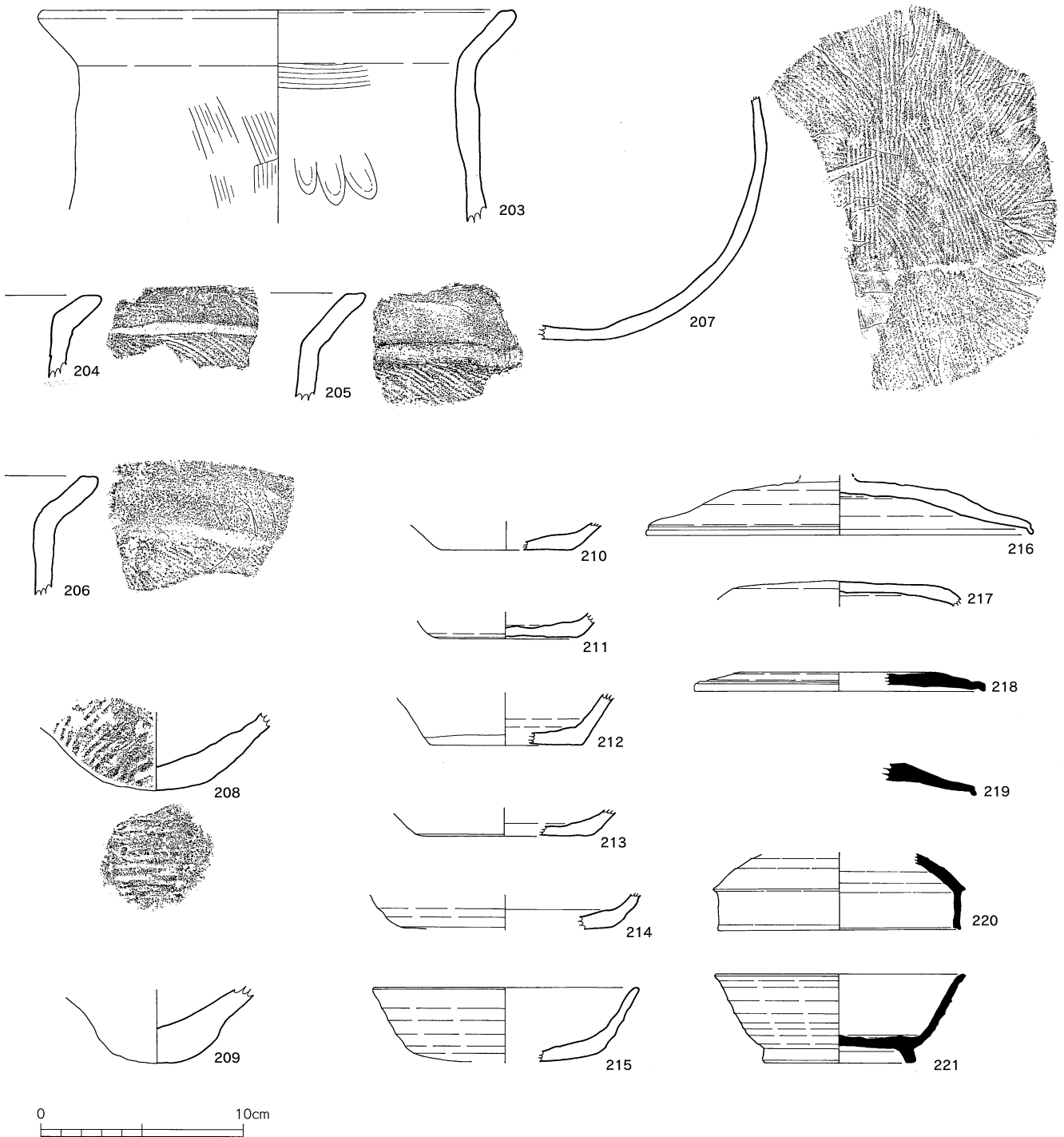
坏蓋 (216・217)

216・217は模倣坏蓋である。216は上部中央につまみの欠損した跡があり、外周の端部に凹線を1条巡らしている。217はつまみを付けない蓋であり口縁部を欠損している。

3 須恵器 (第34図：218～221) (図版26)

坏蓋・高台付碗 (218～221)

218は平板状でつまみがない坏蓋である。219はわずかに中央が隆起する平板状でつまみの有無は不明である。220は丸みのある坏蓋である。上面に自然釉が掛かっており、端部が凹んでいる。時期がやや周囲の遺物より古いものとも考えられる。221は高台付碗である。



第34図 古代土師器・須恵器実測図 (1/3)

第6節 その他の遺構など

1 不明土坑 (第35図)

Ⅲ層上面検出でⅡ層に完全に被覆された土坑である。現代の植栽痕とは埋土が異なり比較的しまりがあり、層状構造のない様な堆積を示す。SC8より縄文土器の小片、その他の土坑からも弥生・古墳と思われる土器の細片数点が出土したが、統一性が無く、本遺跡のⅡ・Ⅲ層の包含状況を考えると時期決定は困難であると判断した。

不明土坑は3種類に分類できる。SC1・SC2・SC6は直径約1mの円形でG、Hグリッドの境界部につぶれた二等辺三角形を形成している。SC3・SC4・SC5・SC7は長軸約1mの長方形で長軸が斜面の傾斜する方向であるものがSC4・5・7の3基、SC3は長軸が等高線の方である。SC8のみ不定形である。

2 その他

本遺跡では、不明土坑の他に近・現代の植栽痕、馬埋葬土坑などが検出されている。植栽痕はほとんどがミカン植栽痕である。現地周辺では現在もミカン栽培が盛んであるが、昭和から平成はじめにかけて周辺の山に灌漑と消毒のための地中パイプラインを設営するほどにミカン栽培が隆盛な時期があった。本遺跡もE1グリッドに1辺3m角のコンクリート製地下貯水タンク1基と直径3cm程度の塩化ビニール製の埋設パイプが縦横に検出されている。Ⅱ章の層序で述べたE、F、Gグリッド周辺の攪乱や、Ⅰ層の角礫層はこの工事で形成された可能性が高い。ミカン植栽痕は等間隔で規格性のある直径60cm程度円形の穴であり。確認のため数基を掘削して調査した。馬埋葬土坑は表土剥ぎの段階から蹄鉄、歯、大腿骨等が散見され、地元での聞き取りによれば戦後しばらくは死亡した馬等を埋めた覚えがあるとのことであった。トレンチに掛かった馬埋葬土坑の埋土を除去したところ肥料用のビニールとともに骨が出土した。念のため蹄鉄が古い時代のものでないか鑑定したのち調査対象から除外した。

[参考・引用文献]

「野田町八田遺跡」延岡市教育委員会 1978

「寺田遺跡」『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第70集 1988

「林遺跡」宮崎県教育委員会 1990

「地蔵ヶ森遺跡」『宮崎県史 資料編 考古2』宮崎県 1993

「門川南町遺跡」宮崎県教育委員会 1996

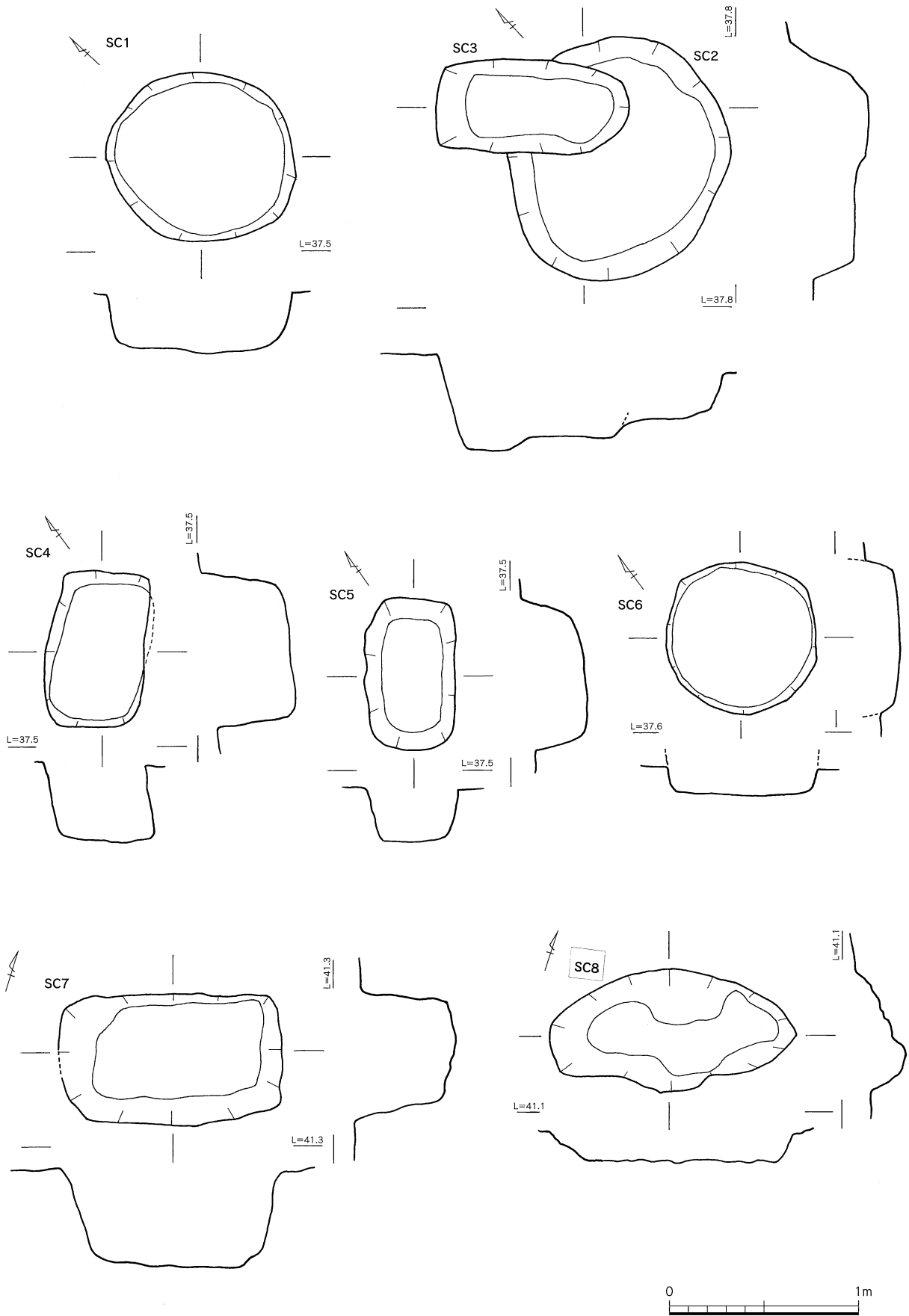
宍戸章「五ヶ瀬川の転位(演旨)」『日本地質学会第103回学術大会講演演旨』日本地質学会 1996

今塩屋毅行・松永幸寿「日向における古墳時代中～後期の土師器—宮崎平野を中心にして—」『第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料 古墳時代中・後期の土師器—その編年と地域性—』九州前方後円墳研究会 2002

「赤木遺跡(第7次)」『延岡市文化財調査報告書』第25集 延岡市教育委員会2002

「下那珂遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第90集 2004

「山口遺跡第2地点」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第99集 2005



第35图 土坑实测图 (1/30)

第Ⅳ章 まとめ

野門遺跡では通常の堆積とは様相が異なり一見すると攪乱土層ともとれる二次・三次の堆積をした地層より旧石器時代、縄文時代晩期、弥生時代、古墳時代、古代の遺構・遺物を検出した。以下、本遺跡の性質と各時代ごとの遺構・遺物を概括するとともに、第Ⅲ章で述べたものに加え本書に掲載しなかった遺物についても分類可能なものは総点数を掲載してまとめとする。(総点数は同一番号の細片を1点としたり表採やトレンチ資料を除外したりしているため概数として「約〇〇点」と記載する。)

遺跡の性質

第Ⅱ章第二節に記述したように本遺跡は高平山の稜線上の断層に近い場所に立地しており、脆弱で風化しやすい地盤に立地した「緩傾斜地立地遺跡」である。一次堆積の遺物が移動し再堆積したために起こる時期の混在や二次堆積土層上に形成された遺構を三次堆積物が被覆する状況、地表面に見られる地滑りと思われる亀裂、人工的な工事掘削による破壊など、調査を混乱させかねない諸要因が絡み合う遺跡ともいえる。実際、試掘段階の報告では遺物は一定量得られるものの攪乱が進行しており遺構等の検出される可能性は低いとのことであった。本遺跡ではトレンチの設定場所により様相が大きく異なり、試掘で全容をつかむことは困難であったといえよう。

旧石器時代

本遺跡に旧石器時代の指標となるテフラは存在しない。始良Tn火山灰下位の暗色帯が破碎されブロック状になった地層の上位に明褐色の地層が一次堆積層として分布していた。本遺跡で一次堆積層であったのはこの層準だけである。この層準を面的に調査できたのは南部のみである。トレンチ調査では中部で遺物が少数、北部ではほとんど見られなかった。遺物の総点数は約30点、総重量1177.2gと少なかった。ほとんどが同質の白色に表面が風化する流紋岩である。時代は剥片尖頭器を含むことと一次堆積の明褐色層出土であることから赤木遺跡第1文化層相当の遺物と考えたい。(第1表参照)

縄文時代晩期

本遺跡に縄文時代の遺構は検出されなかった。遺物はⅡ、Ⅲ層から弥生土器と混在して出土し、点数の割に接合状況の芳しくない個体が多い。縄文土器は晩期の粗製の深鉢と精製の浅鉢を主体としている。粗製深鉢は口縁帯をもつものが多く、精製土器は黒川式のヒレ状突帯を有する黒色磨研土器を中心としている。縄文土器の総点数は粗製土器が約573点、精製土器が約69点、合計約642点であった。石器は側縁に段を有する五角形の石鏃を中心に尖頭状石器、礫器、石錘、磨・敲石、剥片などが出土した。石材は周辺地区で採取可能なチャート、砂岩、行藤山の花崗斑岩などとともに大分県姫島産黒曜石や同じく姫島産と思われるガラス質安山岩を用いており、当時の流通を知ることができる。縄文時代と考えられる石器の総点数は35点であった。

弥生時代

竪穴住居跡が1軒、炭化物集中土坑が1基検出された。遺構は二次堆積土であるⅢ層上面で検出され、遺物は遺構周辺を中心に、縄文時代晩期の土器とともにⅡ、Ⅲ層中から多量に出土した。この出土状況から弥生時代の長い期間にわたって遺跡は生活空間として活用されており、その間、斜面土壌の削平流出から再堆積が複数回繰り返されたことが推定できる。土器の形態からも時期の幅を見ることができる。遺跡内の古い時期のグループは突帯を有する下城式の甕を主体とした弥生時代中期後半に比定できるものであり、新しい時期のグループは甕の底部の形状やなどから後期後葉の様相を呈するものである。

弥生土器の総量は細片において弥生土器と古墳時代の土師器を分別することが困難であったため詳細な数量の記載をさけるが、遺跡内で最も広範囲に出土し1300点程度のボリュームを有する遺物群であった。(弥生土器と古墳時代の土師器の合計点数は2600点以上である。)

石器については磨製石鏃が未製品とともに多数出土した。形態は無茎平基の砲弾型が主体であるが、有茎のものも出土している。その他、磨製石斧、砥石等が少数出土している。石材は千枚岩、緑色頁岩、黒色頁岩、緑色凝灰岩といった、周辺地区で採集可能な薄く剥がれやすい岩石を選択的に使用している。弥生時代の石器の総点数78点であった。

磨製石鏃未製品に残る痕跡について

遺跡からは未製品の各段階と考えられるものや素材と考えられる石核が出土している。これらを観察すると、風化面のついた剥片では岩石の葉理面に対して垂直方向からの打撃で剥離を行っており、未製品の外周には尖頭状の工具を使用したと考えられる痕跡が共通して見られる。試みに北方町の槇峰で採取した千枚岩を鉄釘で成形する実験を行った。ハンマーで岩石の葉理面に対して垂直方向から打撃し薄い片状に打ち割った素材を鉄の5寸釘により未製品に類似する形や砲弾型に成形した。得られた外周の痕跡と遺物に残る痕跡を双眼実体顕微鏡にて比較検討した。肉眼で観察する限りでは、ほぼ同質な破断面を示しているようである。尖頭状の工具の実体が特定できないので推定の域を出ないが、石製品では該当する尖頭状の遺物は出土がないため金属、硬質の木材、鹿角などの可能性も考えられる。

古墳時代

遺物のほとんどは南部のⅣ層より検出された遺物・焼土集中区周辺から出土している。それ以外の場所からの出土は極端に少ないため、遺跡内の特定の部分のみを限定して使用していた可能性がある。第Ⅲ章第4節に記述したように規則性のある焼土の配列と高坏を主体とした遺物群が密集しており、何らかの祭祀的な行為を行った可能性が考えられる。また、遺物集中区の斜面上位側に約20～30cmの段構造があり、周辺のⅣ層は斜面をわずかに掘り込んで水平な地面を成形しているようである。

出土した土師器はその形態から古墳時代の5世紀後半から6世紀初頭のもと考えられる。弥生土器と同様の理由で詳細な点数は記載しないが狭い範囲に1300点程度の遺物が集中していた。

古代

竪穴住居跡は南部の古墳時代の遺物・焼土集中区の上位から検出され、埋土中には本遺跡の主体層であるⅢ層の弥生時代、縄文時代晩期の遺物が混在している。現場では床面直上から土師器の坏を検出し、ほぼ同水準から須恵器と模倣坏蓋が出土したため古代であろうと推定した。整理作業を実施すると埋土中では古代の遺物が主体となり、他の時代のは細片や摩滅が進行しており流入と考えてよいようである。その他の場所からも小規模な出土があったため、古代においては古墳時代と比較してある程度、遺跡内を広く活用していたと思われる。出土した遺物はその形態から平安時代8～9世紀にかけてのもと考えられる。遺物の総点数は土師器約126点、須恵器約14点、合計約140点であった。

以上のように野門遺跡は5つの時代の遺構、遺物を検出した複合遺跡である。五ヶ瀬川本流沿いの丘陵のように阿蘇溶結凝灰岩の上面に地下水の湧水ポイントのない標高40mの高平山の稜線上で複数の時代の人々が活動したということである。脆弱な地盤であるが故に丘陵上に平地を確保しやすい点で有利であったのか、河川本流の氾濫原からのアクセスの利便性によるものか。いずれにせよ、周辺地区の同様の立地をもった稜線上に類似した遺跡が存在しないか興味深いところである。

遺物 番号	出土 地点	層位	器 種	石 材	計 測 値			
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
1	H2	Ⅳ	剥片尖頭器	流紋岩(白色)	5.35	2.70	1.50	16.40
2	G2	Ⅲ	微細剥離ある剥片	流紋岩(白色)	6.00	2.00	0.85	6.70
3	F2	Ⅲ	微細剥離ある剥片	流紋岩(白色)	4.95	2.00	0.90	5.20
4	G2	Ⅲ	縦長剥片	流紋岩(白色)	8.75	2.40	1.30	24.30
5	H1	Ⅳ	微細剥離ある剥片	流紋岩(暗灰色)	4.20	2.20	0.85	5.20
6	H1	Ⅲ	縦長剥片	流紋岩(白色)	4.30	2.30	0.70	4.80
7	G1	Ⅲ	縦長剥片	流紋岩(白色)	5.00	2.10	1.85	7.90
8	E1	Ⅲ	縦長剥片	流紋岩(白色)	5.00	2.20	8.50	5.50
9	H1	Ⅲ	微細剥離ある剥片	流紋岩(白色)	5.00	2.85	1.50	12.50
10	I2	Ⅳ	二次加工剥片	流紋岩(白色)	5.70	4.70	1.70	27.20
11	H1	Ⅳ	剥片	流紋岩(暗灰色)	4.55	2.90	1.45	12.90
12	C1	Ⅲ	二次加工剥片	流紋岩(白色)	2.90	2.35	0.90	4.70
13	D1	Ⅲ	剥片	流紋岩(暗灰色)	2.75	2.70	8.50	5.40
14	H1	Ⅲ	剥片	流紋岩(白色)	4.50	4.70	1.10	14.70
15	D1	Ⅱ	二次加工剥片	流紋岩(白色)	6.65	6.35	2.30	82.30
16	H2	Ⅳ	二次加工剥片	流紋岩(白色)	6.65	3.85	2.05	37.80
17	H1	Ⅳ	二次加工剥片	流紋岩(暗灰色)	4.20	4.25	1.60	20.90
18	E1	Ⅲ	剥片	流紋岩(暗灰色)	4.40	4.00	1.45	20.20
19	H2	Ⅳ	剥片	流紋岩(縞状)	4.40	2.30	1.25	7.90
20	G1	Ⅱ	石核	流紋岩(縞状)	8.30	12.05	6.10	769.40
21	G1	Ⅱ	微細剥離ある剥片	流紋岩(縞状)	7.90	6.00	2.15	72.30
22	D2	Ⅱ	微細剥離ある剥片	流紋岩(白色)	4.00	2.00	1.20	5.20
23	H2	Ⅳ	二次加工剥片	流紋岩(白色)	3.70	3.20	1.05	7.80
63	C1	Ⅲ	石鏃	灰青色チャート	3.60	1.45	0.49	1.60
64	H1	Ⅱ	石鏃	灰青色チャート	3.15	1.90	0.50	2.60
65	A1	Ⅲ	石鏃	灰青色チャート	2.20	1.60	0.40	1.00
66	D2	Ⅱ	石鏃	灰青色チャート	1.90	1.60	0.45	1.10
67	A1	Ⅲ	石鏃	ガラス質安山岩	4.00	1.95	0.45	2.90
68	E1	Ⅲ	石鏃	ガラス質安山岩	3.00	1.60	3.50	1.60
69	E1	Ⅲ	石鏃	ガラス質安山岩	2.70	1.55	4.00	1.50
70	G2	Ⅲ	石鏃	ガラス質安山岩	2.30	1.65	0.30	1.00
71	SA2	—	石鏃	姫島産黒曜石	2.45	1.70	0.65	2.30
72	C1	Ⅲ	二次加工剥片	姫島産黒曜石	4.30	2.65	0.80	4.40
73	E2	Ⅱ	尖頭状石器	姫島産黒曜石	5.90	4.70	1.90	41.80
74	B2	Ⅲ	石核	姫島産黒曜石	6.25	3.40	1.95	28.80

第4表 野門遺跡石器観察表(1)

遺物 番号	出土 地点	層位	器 種	石 材	計 測 値			
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
75	A1	Ⅲ	剥片	姫島産黒曜石	3.95	2.50	7.50	4.40
76	H1	Ⅲ	剥片	姫島産黒曜石	2.50	1.00	0.20	0.40
77	H2	Ⅲ	礫器	砂岩	15.65	13.20	4.90	1233.10
78	E1	Ⅲ	石錘	砂岩	8.30	5.25	1.80	120.30
79	A1	Ⅲ	石錘	流紋岩質凝灰岩	6.55	4.45	1.90	78.40
80	B1	Ⅲ	石錘	砂岩	6.20	5.50	1.45	59.60
81	D1	Ⅲ	石錘	砂岩	10.30	7.35	2.20	247.60
82	E1	Ⅱ	磨・敲石	花崗斑岩(行藤)	13.10	11.05	4.60	1038.20
83	B2	Ⅲ	磨石	石英安山岩	8.60	5.00	6.95	393.00
122	D1	Ⅲ	磨製石鏃	黒色千枚岩	2.20	1.80	0.20	0.80
123	C2	Ⅲ	石鏃未製品	黒色千枚岩	3.65	2.15	0.35	3.00
124	F1	Ⅲ	石鏃未製品	黒色千枚岩	6.60	2.85	0.60	11.20
125	F1	Ⅲ	石鏃未製品	黒色千枚岩	6.85	2.85	0.80	15.50
126	C2	Ⅲ	石鏃未製品	黒色千枚岩	7.80	3.75	0.80	26.50
127	C2	Ⅲ	剥片	黒色千枚岩	6.25	2.80	0.50	6.70
128	C2	Ⅲ	石鏃未製品	黒色千枚岩	10.00	3.70	1.00	30.80
129	A1	Ⅱ	磨製石斧	黒色千枚岩	6.50	3.55	0.85	28.30
130	A1	Ⅲ	石核	黒色千枚岩	11.80	9.10	2.85	25.12
131	D1	Ⅲ	磨製石鏃	緑色頁岩	4.50	2.10	0.35	3.10
132	C1	Ⅲ	磨製石鏃	緑色頁岩	4.00	1.85	0.40	2.80
133	T2	Ⅱ	磨製石鏃	緑色頁岩	2.50	1.55	0.20	1.30
134	B1	Ⅲ	石鏃未製品	緑色頁岩	4.45	2.30	0.50	3.90
135	B2	Ⅲ	石鏃未製品	緑色頁岩	7.50	2.60	0.65	11.90
136	B1	Ⅲ	石鏃未製品	緑色頁岩	7.65	3.55	0.75	20.90
137	C1	Ⅱ	石鏃未製品	緑色頁岩	6.40	2.70	0.70	11.60
138	D1	Ⅲ	石鏃未製品	緑色頁岩	7.80	2.35	0.55	11.00
139	B2	Ⅱ	磨製石鏃	緑色凝灰岩	4.02	1.75	0.23	1.80
140	C1	Ⅲ	磨製石鏃	緑色凝灰岩	3.35	1.90	0.49	2.80
141	B1	Ⅲ	石鏃未製品	緑色凝灰岩	3.20	1.95	0.50	3.10
142	D1	Ⅱ	石鏃未製品	緑色凝灰岩	4.25	2.10	0.52	4.70
143	D2	Ⅲ	石鏃未製品	緑色凝灰岩	6.20	3.35	0.50	12.50
144	A1	Ⅲ	砥石	黒色頁岩	8.50	6.05	2.00	172.70
145	F1	Ⅲ	磨製石斧	黒色頁岩	4.00	2.50	0.80	8.50

第5表 野門遺跡石器観察表(2)

遺物 番号	種別	出土 地点	層位	器種	部位	法 量			色 調		調整・文様ほか		胎 土	備考
						口径	底径	器高	外 面	内 面	調 整・文 様 ほか			
											外 面	内 面		
24	縄文 土器	A1	Ⅲ	深鉢	口縁部				橙	橙	貼付突帯、横方向ナデ、横・斜方向 の工具痕	横方向ナデ	1~2mmの白色粒多、そろい良	
25	縄文 土器	A1	Ⅲ	深鉢	口縁部 ~胴部				橙	にぶい橙	貼付突帯、粗い横・斜方向のナデ、 黒変	横方向ナデ、一部黒変	1~2mmの岩片多、そろい良、1 mm以下の雲母片わずか、そろい良	
26	縄文 土器	C1	Ⅲ	深鉢	口縁部				橙	橙	貼付突帯、粗い横方向ナデ、一部黒 変	丁寧な横、斜方向ナデ	1~2mmの岩片、白色粒多、そろい 良、1mm以下の雲母片ごくわずか	
27	縄文 土器	A1	Ⅲ	深鉢	口縁部				橙	にぶい橙	貼付突帯、横方向ナデ、炭化物付着	風化ぎみ横方向ナデ、黒変	2mm以上の白色粒多、そろい不良	
28	縄文 土器	D1	Ⅲ	深鉢	口縁部				橙	橙	貼付突帯、横方向ナデ	風化ぎみ横方向ナデ	1~2mmの岩片多、そろい良、 1mm以下の白色粒多、そろい良	
29	縄文 土器	H1	I	深鉢	口縁部				橙	にぶい橙	貼付突帯、横方向ナデ	横方向ナデ	2mm以上の白色粒多、そろい良、 1~2mmの岩片多、そろい良	
30	縄文 土器	A1	Ⅲ	深鉢	口縁部				灰黄褐	にぶい黄褐	貼付突帯、横方向ナデ、黒変	横方向ナデ、粗いナデ	2mm以下の黒色針状多、そろい良、 白色粒多、そろい不良	
31	縄文 土器	D1	Ⅱ	深鉢	口縁部				にぶい黄橙	にぶい黄褐	貼付突帯、粗い横方向ナデ	丁寧なナデ	1mm以下の岩片多、そろい良	
32	縄文 土器	D1	Ⅲ	深鉢	口縁部				橙	橙	貼付突帯、粗い横方向ナデ	丁寧な横、斜方向ナデ	1~2mmの岩片多、そろい良	
33	縄文 土器	D2	Ⅲ	深鉢	口縁部				橙	橙	貼付突帯、横方向ナデ	横方向ナデ	1mm以下の岩片多、そろい良、 2mm以上の白色粒少、そろい不良	
34	縄文 土器	D1	Ⅲ	深鉢	口縁部				橙	橙	貼付突帯、粗い横方向ナデ、一部黒 変	横、斜方向ナデ	1mm以下の白色粒少、そろい不良、 1mm以下の岩片多、そろい良	
35	縄文 土器	D2	Ⅲ	深鉢	口縁部				橙	橙	貼付突帯、横方向ナデ	風化ぎみ横方向ナデ	1~2mm白色粒・岩片多、そろい良	
36	縄文 土器	A1	Ⅱ	深鉢	口縁部 ~頸部	35.20			にぶい黄橙	橙	頸部に条痕、丁寧な横方向ナデ	丁寧な横方向ナデ	2mm以上の岩片少、1~2mm多、 そろい不良	折曲 口縁
37	縄文 土器	A1	Ⅲ	深鉢	口縁部	34.00			橙	にぶい橙	丁寧な横、斜方向のナデ	丁寧な横・斜方向のナデ	1~2mmの岩片多、そろい良	折曲 口縁
38	縄文 土器	A1	Ⅲ	深鉢	口縁部				橙	橙	貼付突帯、丁寧な横方向ナデ	丁寧な横・縦・斜方向ナデ	1~2mmの白色粒多、そろい不良、 1~2mmの岩片多、そろい良	
39	縄文 土器	B1	Ⅲ	深鉢	口縁部				にぶい橙	にぶい橙	貼付突帯、粗い横方向ナデ	横方向ナデ	1~2mmの岩片多、そろい良	
40	縄文 土器	A1	Ⅲ	深鉢	口縁部				橙	橙	貼付突帯、横方向ナデ	横方向ナデ	1~2mmの黒色針状多、そろい不良、 1mm以下の岩片多、そろい良	
41	縄文 土器	F1	Ⅲ	深鉢	口縁部				橙	橙	貼付突帯、横・斜方向の貝殻条痕、 横方向ナデ	丁寧な横・斜方向のナデ	1~2mmの黒色針状多、そろい良、 1~2mm以上の白色粒少、そろい不良、 1mm以下の雲母片わずか、そろい良	
42	縄文 土器	A1	Ⅲ	深鉢	口縁部				明褐	にぶい褐	貼付突帯、横方向ナデ	横方向ナデ、黒変か	1~2mmの黒色針状多、そろい不良、 2mm以上の白色粒少、そろい不良	
43	縄文 土器	B1	Ⅲ	深鉢	口縁部				にぶい赤褐	にぶい褐	貼付突帯、横方向ナデ、一部黒変	横方向ナデ	2mm以下の黒色針状多、そろい不良、 2mm以上の白色粒少、そろい不良	
44	縄文 土器	B2	Ⅱ	深鉢	口縁部				橙	橙	貼付突帯、風化著しい、粗い横方向 ナデ	横方向ナデ	1mm以下の岩片多、そろい良	
45	縄文 土器	D1	Ⅱ	深鉢	口縁部				橙	橙	貼付突帯、横・斜方向ナデ、炭化物 付着	横・斜方向のナデ	1~2mmの黒色針状多、そろい良、 1~2mmの岩片多、そろい不良、 1mm以下の白色粒少、そろい良	
46	縄文 土器	E1	Ⅱ	深鉢	胴部				赤褐	明赤褐	粗いナデ、黒変	横方向ナデ、条痕(5本)、 黒変	2mm以上の白色粒多、そろい不良	
47	縄文 土器	-	-	深鉢	胴部				にぶい褐	橙	組織痕	斜方向のナデ、風化	1mm以下の黒色針状、白色粒わずか、 そろい良、岩片ごくわずか	
48	縄文 土器	E2	Ⅱ	深鉢	胴部				にぶい赤褐	にぶい褐	組織痕、条痕	縦方向の条痕	1mm以上の黒色針状多く、そろい良、 岩片、雲母片ごくわずか	
49	縄文 土器	H1	Ⅳ	浅鉢	口縁部				橙	橙	縦方向の浅い凹線連続	横方向の条痕	1mm以下の黒色針状ごくわずか、 1~2mmの岩片多、そろい良	
50	縄文 土器	B2	Ⅲ	深鉢	口縁部				にぶい黄橙	にぶい黄橙	丁寧なナデの後、横方向条痕	丁寧な横・斜方向ナデ	1~2mmの黒色針状多、そろい良、 2mm以上の白色粒多、そろい不良、 1mm以下の石英粒わずか、そろい良	
51	縄文 土器	D1	Ⅲ	深鉢	底部	13.60			橙	橙	横・斜方向のナデ	ナデ	1~2mmの白色粒少、そろい不良、 1~2mmの岩片多、そろい不良、 1mm以下の雲母片ごくわずか	
52	縄文 土器	E1	Ⅲ	深鉢	底部		6.90		にぶい橙	にぶい黄橙	横方向のナデ	ナデ	1~2mmの黒色針状多、そろい良、 2mm以上の岩片多、そろい不良	
53	縄文 土器	B1	Ⅱ	深鉢	底部		9.70		橙	にぶい橙	横・斜方向のナデ	粗いナデ	1~2mmの黒色針状、白色粒、岩 片多、そろい不良	
54	縄文 土器	D1	Ⅲ	浅鉢	口縁部 ~胴部	30.85			赤褐	にぶい赤褐	ヒレ状突起、口縁部横方向ミガキ、 胴部縦横・斜方向ミガキ(風化ぎみ)	口縁部横方向ミガキ、胴部 横・斜方向ミガキ(風化ぎみ)	1mm以下の黒色針状、白色粒、火 山ガラス少、そろい良	
55	縄文 土器	D1	Ⅲ	浅鉢	口縁部				赤褐	にぶい赤褐	ナデの後ミガキ(風化ぎみ)	ナデの後ミガキ(風化ぎみ)	1mm以下の黒色針状、白色粒、火 山ガラス少、そろい良	

第6表 野門遺跡土器観察(1)

遺物 番号	種別	出土 地点	層位	器種	部位	法 量			色 調		調整・文様ほか		胎 土	備考
						口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面		
56	縄文 土器	D1	Ⅲ	浅鉢	口縁部				にぶい赤褐	にぶい赤褐	ナデの後ミガキ(風化ぎみ)	ナデの後ミガキ(風化ぎみ)	1mm以下の黒色針状、白色粒、火山ガラス少、そろい良	
57	縄文 土器	H2	Ⅲ	浅鉢	口縁部				橙	橙	ミガキ(風化)	ミガキ(風化)、黒変	1mm以下の黒色針状少、そろい不良、石英粒わずか、岩片多、そろい良	
58	縄文 土器	D1	Ⅲ	浅鉢	口縁部				にぶい赤褐	にぶい橙	ナデの後横方向ミガキ、沈線	ナデの後ミガキ(風化ぎみ)	1~2mmの黒色針状多、そろい良、1mm以下の岩片少、そろい良	
59	縄文 土器	C1	Ⅲ	浅鉢	口縁部				橙	にぶい黄橙	ヒレ状突起、丁寧なナデ	丁寧なナデ	1mm以下の黒色針状、白色粒ごくわずか、そろい良	
60	縄文 土器	D2	Ⅱ	浅鉢	口縁部				にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヒレ状突起、丁寧なナデ	丁寧な横方向ナデ	1mm以下の黒色針状多、そろい不良、白色粒わずか、そろい良	
61	縄文 土器	A1	Ⅲ	深鉢	口縁部				橙	にぶい橙	ヒレ状突起、貼付突起、横・斜方向のナデ、一部黒変	横・斜方向ナデ、一部黒変	1~2mmの黒色針状多、そろい良、1mm以下の白色粒少、そろい良、2mm以上の岩片多、そろい不良	
62	縄文 土器	A1	Ⅲ	浅鉢	口縁部				にぶい黄橙	にぶい黄橙	ミガキ(風化)	ミガキ(風化)	1mm以下の黒色針状、石英粒わずか、そろい良	
84	弥生 土器	SA2		壺	頸部~ 底部		2.95		にぶい黄橙	にぶい黄橙	風化ぎみ、横・斜め方向の丁寧な工具によるナデ、底部丁寧なナデ、一部炭化物付着	風化ぎみ、縦・横方向、斜め方向のナデ、底部に放射状の指ナデ痕	2mm以下の岩片多、そろい不良、1~2mmの黒色針状少、雲母わずか、そろい良	
85	弥生 土器	SA2		甌	胴部				橙	橙	丁寧な横方向ナデ、横方向の櫛描文、櫛描波状文	風化ぎみ横・斜方向ナデ	1~2mmの岩片多、1~2mmの雲母わずか、そろい良	
86	弥生 土器	SA2		壺	胴部				橙	橙	丁寧な横方向ナデ、横方向の櫛描文、櫛描波状文	斜方向ナデ	1mm以下の白色粒少、雲母ごくわずか、そろい良、1~2mmの岩片多、そろい不良	
87	弥生 土器	SA2		鉢	ほぼ 完形	10.10	3.00	13.50	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ、斜方向わずかなハケ目、一部黒変	ナデ、表面にヒビ、底部に一部黒変	1mm以下の白色、黒色粒わずか、2mm以上の岩片わずか、そろい良	
88	弥生 土器	SA2		壺	底部		4.40		にぶい黄橙	灰黄褐	ナデ、工具による面、工具痕、底面粗いナデ、炭化物微量付着	ナデ、中央付近に指頭圧痕、炭化物微量付着	1~2mmの岩片、黒色粒多、そろい良、2mm以上の白色粒ごくわずか	
89	弥生 土器	SA2		甌	底部		7.00		橙	橙	横・斜方向ナデ	横方向ナデ	1~2mmの白色粒多、2mm以上の岩片多、そろい不良	
90	弥生 土器	C2	Ⅲ	甌	口縁部 ~胴部				にぶい褐	にぶい橙	口縁部横方向のナデ、刻目貼付突起、口唇外面に刻目、口唇部がやや凹む、胴部縦方向のハケ目、炭化物付着	横・斜方向のハケ目の後、ナデ消し	2mm以上の白色粒わずか、そろい不良、1mm以下の火山ガラス多、1~2mm岩片多、そろい良	
91	弥生 土器	C1	Ⅲ	甌	口縁部 ~胴部				浅黄橙	浅黄橙	横方向のナデ(風化著しい)、縦方向のハケ目、刻目貼付突起、炭化物付着	横・斜方向のハケ目(風化著しい)、指頭圧痕あり	1~2mmの白色粒多、1mm以下の火山ガラス多、2mm岩片わずか、そろい良	
92	弥生 土器	C2	Ⅱ	甌	口縁部				にぶい黄橙	にぶい黄橙	横方向のナデ、刻目貼付突起、口唇外面に刻目、口唇部がやや凹む	横方向のナデ、ナデ、炭化物少量付着	1~2mmの白色粒、岩片少、そろい良、1mm以下の火山ガラスごくわずか	
93	弥生 土器	C1	Ⅲ	壺	口縁部 ~頸部				橙	橙	丁寧な横方向のナデ、刻目貼付突起	横方向のナデ	1~2mmの岩片多、そろい不良、1mm程度の白色粒わずか、そろい良	
94	弥生 土器	C2	Ⅲ	甌	口縁部 ~胴部	24.60			にぶい黄橙	にぶい黄橙	横方向のナデ(風化ぎみ)、刻みのない貼付突起、口唇部に指押さえが残る、わずかに鉄分付着	横・斜方向のナデ(風化ぎみ)、黒変あり	2mm以上の白色粒多、1mm以下の火山ガラス多、そろい良、1~2mm岩片多、そろい不良	
95	弥生 土器	D1	Ⅲ	壺	口縁部 ~胴部	14.60			橙	橙	横方向のナデ、丁寧なナデ、斜方向のハケ目、穿孔二箇所あり、口唇部やや凹む	ナデ	1mm以下の黒色針状、白色粒多	
96	弥生 土器	A1	Ⅲ	壺	胴部				にぶい黄橙	橙	横方向の櫛描文、櫛描波状文、横方向のナデ	横・斜方向のナデ	2mm程度の石英粒ごくわずか、2mm以下の白色粒少、そろい不良、1mm以下の岩片多、そろい良	
97	弥生 土器	B2	Ⅲ	壺	胴部				橙	橙	横・縦方向の櫛描文、櫛描波状文、一部黒片	粗い斜方向のナデ、黒変あり	1mm以下の黒色針状わずか、2mm以下の白色粒少、2mm以下の岩片多、そろい不良	
98	弥生 土器	B1	Ⅲ	壺	胴部				にぶい黄橙	褐灰	ナデ、沈線あり、指頭圧痕あり	ナデ	2mm以下の白色粒多、石英粒多、1mm以下の黒色針状わずか、そろい不良	
99	弥生 土器	SA2	Ⅲ	甌	口縁部 ~胴部	20.50			にぶい黄橙	橙	横・縦・斜方向のハケ目、丁寧な横方向のナデ、斜短線の刺突列あり、黒変、炭化物付着	丁寧な横方向のナデ(風化著しい)	1~2mmの白色粒少、2mm以上の岩片多、そろい不良	
100	弥生 土器	C1	Ⅲ	甌	口縁部 ~胴部	27.50			灰褐	にぶい橙	横・斜方向のハケ目、丁寧な横方向のナデ、斜短線の刺突列あり、一部黒変	横方向のナデ、指頭圧痕	1mm以下の岩片多、2mm以上の白色ごくわずか、そろい良、10mmの石英粒1個	
101	弥生 土器	A1	Ⅲ	壺	頸部				橙	橙	横方向の凹線文、丁寧な横方向のナデ、斜短線の刺突列あり	丁寧な斜方向のナデ、一部剥離	2mm以上の石英粒、岩片わずか、1~2mmの岩片多、そろい不良	
102	弥生 土器	B1	Ⅲ	壺	頸部				橙	にぶい黄橙	横方向のハケ目、横方向の凹線文、ナデ、斜短線の刺突列あり	横方向のナデ	2mm以上の石英粒、岩片わずか、1~2mmの岩片多、そろい不良	
103	弥生 土器	A1	Ⅲ	甌	口縁部 ~胴部	18.35			橙	明黄褐	横方向のナデ、横・斜方向のナデ	横方向のナデ	1~2mmの岩片多、2mm以下の石英粒少、そろい良	
104	弥生 土器	C2	Ⅲ	甌	口縁部	20.05			橙	橙	横・斜方向の粗いナデ、炭化物付着、口唇部がわずかに凹む	斜方向の粗いナデ、炭化物付着で黒変	1mm以下の白色粒わずか、2mm以上の岩片少、そろい不良、5mm程度の岩片ごくわずか	
105	弥生 土器	D1	Ⅲ	甌	口縁部 ~胴部	22.10			橙	橙	横方向のナデの後、縦方向のハケ、一部黒変	横方向のナデ、一部黒変	1~2mmの岩片少、そろい良、2mm以上の石英粒わずか	
106	弥生 土器	A1	Ⅲ	甌	口縁部 ~胴部	26.00			橙	にぶい黄橙	横・斜方向のナデ、剥落わずかにあり	横方向のナデ、5mm程度の剥落著しい	2mm以上の白色粒多、1~2mm岩片多、そろい不良	
107	弥生 土器	SC7	-	甌	胴部~ 底部		7.60		橙	にぶい黄橙	縦・斜方向のハケ目、横方向のナデ	ナデ、わずかにハケ目あり、炭化物付着	2mm以上の石英粒少、そろい不良、1~2mmの岩片多、そろい不良	
108	弥生 土器	A1	Ⅲ	甌	胴部~ 底部				にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ、工具痕あり、部分的に炭化物付着	ナデ、わずかに黒変	1~2mmの白色粒、岩片少、2mm程度の石英粒少、そろい不良	

第7表 野門遺跡土器観察表(2)

遺物番号	種別	出土地点	層位	器種	部位	法 量			色 調		調整・文様ほか		胎 土	備考
						口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面		
109	弥生土器	A1	Ⅲ	甕	底部		7.20		橙	橙	斜方向のハケ目、横方向のナデ、指頭圧痕	ナデ、わずかな縦方向のハケ目、炭化物付着	2mm以上の岩片少、1~2mmの白色粒多、石英粒少、そろい不良	
110	弥生土器	C1	Ⅲ	甕	底部		6.10		浅黄橙	褐灰	横・縦・斜方向のハケ目がわずかに残る、横方向のナデ	ナデ、炭化物付着	1~2mmの白色粒、岩片多、1mm程度の石英粒少、そろい良	
111	弥生土器	B1	Ⅲ	甕	底部		6.70		浅黄橙	浅黄橙	縦・斜方向のハケ目、横方向のナデ	ナデ	1mm以下の黒色針状少、石英粒わずか、岩片多、そろい良	
112	弥生土器	C1	Ⅲ	甕	胴部~底部		3.55		にぶい褐	橙	ナデ、斜方向のハケ目、横方向のナデ	ナデ、斜方向のハケ目	1mm以下の黒色針状ごくわずか、岩片多、1~2mmの石英粒わずか、そろい良	
113	弥生土器	A1	Ⅲ	甕	底部		5.50		橙	橙	ナデ、横方向のナデ	ナデ、炭化物付着、黒変	1mm以下の岩片多、そろい良、1~2mmの白色粒、黒色粒ごくわずか	
114	弥生土器	A1	Ⅲ	壺	ほぼ完形	13.45	24.60	浅黄橙	浅黄橙	横方向のナデ(風化著しい)、炭化物付着、わずかに黒変	ナデ(風化著しい)、斜方向のハケ目が残る、接合痕、指頭圧痕あり	ナデ(風化著しい)、斜方向のハケ目が残る、接合痕、指頭圧痕あり	1~2mmの白色粒、岩片多、そろい良	
115	弥生土器	C1	Ⅲ	壺	頸部~底部		4.45		にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ(風化著しい)、炭化物付着、斜方向のハケ目、指頭圧痕、粘土接合痕	ナデ	1~2mmの石英粒、白色粒多、岩片わずか、そろい良、1mm以下の雲母片ごくわずか	底部安定立する
116	弥生土器	C1	Ⅲ	鉢	ほぼ完形	14.15	5.60	10.10	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ(全体的に風化)、横方向のナデ、わずかに黒変	ナデ(風化)、指頭圧痕	1~2mmの白色粒、岩片多、そろい不良、2mm以上の岩片わずか	
117	弥生土器	C1	Ⅲ	鉢	ほぼ完形	10.00	4.70	9.60	にぶい黄橙	にぶい黄橙	縦・斜方向のナデ、横方向のナデ、工具によるナデ痕、炭化物付着	縦・横方向のナデ、炭化物付着、工具痕あり、指頭圧痕	2mm以上の白色粒多、1~2mmの岩片多、そろい不良	
118	弥生土器	C1	Ⅲ	鉢	胴部~底部		3.40		にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ、炭化物付着	ナデ、工具痕あり、一部黒変	1~2mmの岩片多、1mm以下の石英粒、黒色粒少、そろい不良	
119	弥生土器	C1	Ⅲ	鉢	底部		3.25		にぶい黄橙	明黄橙	横方向のナデ、指頭圧痕、一部黒変	ナデ	2mm以上の白色粒多、1~2mmの岩片多、そろい不良	
120	弥生土器	A1	Ⅲ	鉢	底部		4.40		橙	橙	ナデ、横方向のナデ	ナデ	2mm以上の白色粒多、1~2mmの岩片多、そろい不良	
121	弥生土器	C1	Ⅲ	鉢	底部		6.50		にぶい黄橙	にぶい黄橙	縦方向の指による強いナデ、炭化物付着	ナデ、炭化物付着	1~2mmの岩片多、そろい不良、1mm程度の白色粒、黒色粒わずか、そろい不良	
146	土師器	H2	Ⅳ	甕	口縁部	20.10			橙	橙	横方向のナデ、炭化物付着	横方向のナデ	1~2mmの岩片少、1mm程度の白色粒、黒色粒少、そろい良、雲母片ごくわずか	
147	土師器	G2	Ⅲ	甕	口縁部~胴部	24.70			にぶい橙	にぶい橙	斜方向のハケ目、横方向のナデ、一部に炭化物付着	横方向のナデ、斜方向のハケ目	5mm程度の岩片ごくわずか、1~2mmの岩片多、そろい不良	
148	土師器	H1	Ⅳ	甕	口縁部~胴部	26.10			浅黄橙	浅黄橙	横・斜方向のナデ(風化さみ)、指頭圧痕	斜方向のナデ(風化さみ)	2mm以上少、1~2mm・1mm以下の岩片多、そろい不良	
149	土師器	H1	Ⅳ	甕	口縁部~胴部	31.00			橙	橙	粗い斜方向のナデ(風化さみ)、炭化物付着	横・斜方向のナデ	2mm以上の白色粒、岩片少、1~2mmの岩片多、そろい不良	
150	土師器	G2	Ⅲ	甕	胴部~底部		3.80		にぶい橙	にぶい橙	粗いナデ	斜方向のハケ目、粗いナデ	1~2mmの白色粒、黒色粒少、岩片多、2mm以上の岩片わずか	
151	土師器	G2	Ⅲ	甕	胴部~底部				橙	黄橙	縦・斜方向のハケ目、一部に黒変	ナデ、一部黒変	1~2mmの岩片、白色粒多、そろい不良	
152	土師器	G2	Ⅲ	甕	胴部~底部		4.00		にぶい黄橙	にぶい黄橙	縦方向のナデ	縦方向のナデ、指頭圧痕、黒変あり	1~2mmの岩片多、1mm以下の白色粒少、そろい良、黒色針状、黒色粒わずか	
153	土師器	H1	Ⅳ	甕	底部				にぶい黄橙	にぶい橙	ナデ	粗いナデ、中央部丸くくぼむ	2mm以上の岩片少、水晶粒1個、1~2mmの白色粒、岩片多	
154	土師器	B2	Ⅱ	甕	口縁部				橙	橙	横・斜方向のナデ	横・縦方向のナデ	1~2mmの白色粒小、そろい不良、1mm以下の岩片多、そろい良、2mm以上の岩片ごくわずか	
155	土師器	H1	Ⅳ	甕	口縁部~胴部				浅黄橙	にぶい黄橙	横方向ナデか(風化著しい)、口縁部わずかに黒変、接合痕あり	縦・横・斜方向ナデ(風化著しい)	1mm以下の白色、黒色粒わずか、2mm以上の岩片多、そろい不良	
156	土師器	I1	Ⅳ	甕	口縁部				橙	橙	斜方向のナデ、全体に炭化物付着	ナデ	1~2mmの白色粒、岩片多、そろい良、1mm以下の石英粒少、2mm以上の岩片わずか	
157	土師器	A1	Ⅲ	甕	口縁部				黒褐	黒褐	横方向のナデ、刻目のある貼付突帯	横方向のナデ	2mm以上の岩片多、1~2mm石英粒わずか、そろい不良	
158	土師器	H1	Ⅳ	壺	口縁部	15.20			橙	橙	横・斜方向のナデ(風化)	斜方向のナデ(一部炭化物付着)	2mm以上の白色粒少、岩片わずか、1~2mmの岩片多、そろい不良	
159	土師器	G2	Ⅲ	壺	口縁部~胴部	16.40			橙	橙	横・斜方向のナデ、部分的にハケ目、一部黒変	横・斜方向のナデ、一部黒変	2mm以上の岩片わずか、1~2mmの岩片多、そろい不良	
160	土師器	H2	Ⅳ	壺	口縁部~胴部	10.90			浅黄橙	明黄橙	ナデ(風化著しい)	ナデか(風化著しい)、指頭圧痕	2mm以上の岩片わずか、1~2mmの岩片多、そろい良、1mm程度の黒色粒わずか	
161	土師器	H2	Ⅲ	壺(小罎)	口縁部~胴部	7.50			橙	橙	ナデ(風化著しい)	ナデか(風化著しい)、指頭圧痕	1mm程度の岩片多、そろい良、2mm以上の岩片ごくわずか	
162	土師器	H1	Ⅳ	壺	口縁部~頸部				橙	浅黄橙	ナデ(風化著しい)	ナデ(風化著しい)	2mm以上の岩片多、そろい不良、1~2mmの岩片多、そろい良	
163	土師器	C1	Ⅲ	壺	口縁部				橙	橙	丁寧な横・斜方向のナデ、一部炭化物付着	横・斜方向のナデ、一部炭化物付着	1mm以下の白色粒少、そろい良、1~2mmの岩片多、そろい不良	
164	土師器	C1	Ⅲ	壺	口縁部~頸部				黄橙	橙	口縁部縦ナデ、丁寧な斜方向のナデ、炭化物付着	横・縦方向のナデ	1mm以下の白色粒少、雲母片わずか、そろい良、1~2mmの岩片多、そろい不良	

第8表 野門遺跡土器観察表(3)

遺物 番号	種別	出土 地点	層位	器種	部位	法 量			色 調		調整・文様ほか		胎 土	備考
						口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面		
165	土師器	B2	Ⅲ	壺(小壇)	口縁部～頸部				浅黄橙	灰黄	口縁斜方向、頸部縦・斜方向ナデ、部分的に炭化物付着	斜方向のナデ、部分的に炭化物付着	1～2mmの岩片多、そろい不良、1mm程度の白色粒わずか	
166	土師器	H1	Ⅳ	壺	頸部～底部		3.20		にぶい黄橙	浅黄橙	ナデ、ハケ目跡あり、工具痕、一部炭化物付着	ナデ、粘土縦目跡	2mm以上の岩片わずか、1～2mmの岩片多、そろい良	
167	土師器	C1	Ⅲ	壺	口縁部				にぶい橙	にぶい橙	二重口縁、ナデの後、櫛描波状文(4本櫛目)、黒変	横・斜方向のナデ、わずかに指頭圧痕、黒変	1～2mmの黒色針状少、1～2mmの岩片多、そろい不良	
168	土師器	C1	Ⅲ	壺	口縁部				にぶい橙	浅黄橙	二重口縁、ナデの後、櫛描波状文(4本櫛目)	横方向のナデ(風化ぎみ)、指頭圧痕	2mm以上の白色粒少、そろい不良、1～2mmの黒色針状少、1～2mmの岩片、白色粒多そろい良	
169	土師器	F1	Ⅲ	壺	胴部				橙	橙	斜方向のハケ目の後、横方向にナデ消し	斜方向の指ナデ、粘土のつなぎ目あり	1mm以下の雲母片ごくわずか、1mm以下の岩片わずか	
170	土師器	C1	Ⅲ	壺	頸部				浅黄橙	浅黄橙	刻目突帯、斜方向のナデ	横・斜方向のナデ	2mm以上の石英粒わずか、岩片多、1～2mmの岩片多、そろい不良	
171	土師器	H1	Ⅳ	甕または壺	頸部				浅黄橙	浅黄橙	双方向の刻目突帯、ナデ(風化著しい)	ナデ	1～2mmの白色粒少、そろい良、岩片多、そろい不良	
172	土師器	C1	Ⅲ	壺	頸部				にぶい黄橙	にぶい橙	刻目突帯	横方向のナデ	2mm以上の白色粒少、1～2mmの岩片多、そろい不良	
173	土師器	H1	Ⅳ	高坏	ほぼ完形	16.30	11.35	11.00	にぶい黄橙	にぶい黄橙	坏部横・縦方向の粗いナデ、脚部縦方向の板状工具による粗いナデ	横方向のナデ、坏部内面に板状工具の停止痕多数	1mm以下の黒色多、雲母・石英粒少、1～2mmの岩片多数、そろい良	
174	土師器	H1	Ⅳ	高坏	坏部～裾部				浅黄橙	褐灰	ナデ(風化著しい)、一部黒変	ナデ(風化著しい)	1～2mmの岩片多、そろい不良	
175	土師器	H1	Ⅳ	高坏	脚部～裾部				明黄褐	にぶい黄橙	ナデ(風化著しい)	ナデ(風化著しい)	1～2mmの白色粒、岩片多、そろい不良	
176	土師器	I1	Ⅳ	高坏	脚部～裾部				浅黄橙	浅黄橙	ナデ(風化著しい)	ナデ(風化著しい)	1～2mmの白色粒多、そろい不良、1mm程度の岩片多、そろい良	
176	土師器	H1	Ⅳ	高坏	脚部				浅黄橙	浅黄橙	縦・斜方向のナデ(風化著しい)、工具の端部痕か	縦ナデ	1～2mmの岩片多、そろい良、1mm以下の白色粒わずか	
178	土師器	G2	Ⅲ	高坏	坏部～脚部				にぶい黄橙	にぶい黄橙	横方向のナデ、わずかに黒変	ナデ、工具痕(ハケ目)	1～2mmの岩片多、2mm以上の岩片わずか	
179	土師器	H1	Ⅳ	高坏	坏部～脚部				橙	橙	横・斜・縦方向の丁寧なナデ、接合部に横方向の指頭圧痕わずか、一部黒変	横・斜・縦方向のナデ(風化ぎみ)、一部黒変	1～2mmの岩片多、そろい良、2mm程度の白色粒わずか、そろい不良、1mm以下の雲母片ごくわずか	
180	土師器	I1	Ⅳ	高坏	脚部				浅黄橙	浅黄橙	ナデか(風化著しい)	ナデ、わずかに工具痕(風化著しい)	2mm以上の岩片わずか、1～2mmの岩片多、そろい不良	
181	土師器	H1	Ⅳ	高坏	脚部～裾部		15.50		橙	橙	脚部斜方向のヘラナデ、工具痕、裾部横方向のナデ	脚部粗い横ケズリ痕、横方向のナデ、裾部横方向のナデ	1mm以下の白色粒少、岩片多、そろい良	
182	土師器	H1	Ⅳ	高坏	坏口縁部	24.70			橙	橙	縦・斜方向のナデ、一部黒変、炭化物付着	斜方向の粗いナデ、板状工具端部痕	1～2mmの岩片多、そろい良、1mm程度の白色粒、黒色粒わずか	
183	土師器	H2	Ⅳ	高坏	坏口縁部	17.90			にぶい黄橙	にぶい黄橙	横方向のナデ(風化著しい)	横方向のナデ(風化著しい)	1mm以下の白色粒、黒色粒少、1～2mmの岩片多、そろい良	
184	土師器	H1	Ⅳ	高坏	坏口縁部	17.30			浅黄橙	浅黄橙	横ナデ、わずかに炭化物付着	横ナデ、わずかに炭化物付着	1～2mmの岩片多、そろい良	
185	土師器	H1	Ⅳ	高坏	坏口縁部				橙	橙	横方向のナデ、わずかに黒変	横方向のナデか(風化著しい)	1mm以下の白色粒多、1～2mmの岩片多、そろい良、黒色粒わずか	
186	土師器	I1	Ⅳ	高坏	坏部				浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ(風化、剥落著しい)	1mm程度の雲母片わずか、1～2mmの岩片多、1mm以下の白色粒、黒色粒多、そろい良	
187	土師器	I1	Ⅳ	高坏	充填部					浅黄橙		指頭によるナデ	1mm程度の雲母片ごくわずか、1～2mmの岩片多、そろい良	
188	土師器	E2	Ⅲ	高坏	充填部				にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ、炭化物少量付着	ナデ、炭化物微量付着	1～2mmの岩片多、そろい良	
189	土師器	H1	Ⅳ	高坏	坏部				橙	橙	横方向のナデ	ナデ	1～2mmの白色粒多、そろい良、岩片多、そろい不良	
190	土師器	B2	Ⅲ	高坏	坏部				橙	明黄褐	ナデか(風化気味)	ナデか(風化気味)	1～2mmの岩片多、そろい良、1mm以下の黒色針状わずか	
191	土師器	G2	Ⅲ	高坏	裾部		10.60		にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ、風化気味、炭化物少量付着	ナデ、炭化物少量付着	1～2mmの岩片多、そろい良、2mm程度の石英粒わずか	
192	土師器	H2	Ⅳ	器台	ほぼ完形	11.00	11.20	8.95	にぶい黄橙	浅黄橙	横・斜・縦方向のナデ(風化ぎみ)、一部黒変	横・斜・縦方向のナデ(風化ぎみ)、一部黒変、脚部に工具痕	1～2mmの白色粒、岩片多、そろい良	
193	土師器	B1	Ⅱ	鉢or壺	口縁部				橙	橙	横方向のハケ目	丁寧な横方向のナデ	2mm以上の白色粒、岩片わずか、そろい不良、1～2mmの岩片多、そろい良	
194	土師器	A1	Ⅲ	鉢	口縁部				橙	橙	横方向のナデ	横方向のナデ	1～2mmの石英粒、白色粒、岩片多、そろい良、1mm以下の雲母片ごくわずか	
195	土師器	H1	Ⅳ	ミニチュア土器	ほぼ完形	5.35	3.30	5.40	橙	明黄褐	風化著しく不明	横方向のナデ(風化著しい)	1～2mmの白色粒、石英粒多、1mm以下の黒色粒、岩片多、そろい良	
196	土師器	H1	Ⅴ	土鍾	2/3残存	3.5(長)	1.8(幅)	1.6(厚)	橙	—	—	—	1mm以下の黒色粒わずか、岩片少、そろい良	8.1g(重)

第9表 野門遺跡土器観察表(4)

遺物番号	種別	出土地点	層位	器種	部位	法量			色調		調整・文様ほか		胎土	備考
						口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
197	土師器	SA1		甕	口縁部 ～頸部	22.45			にぶい黄橙	にぶい黄橙	口縁部横方向のナデ、頸部凹線1条、 頸部斜方向ハケ目	横方向ナデ、わずかに黒変	1～2mmの白色粒多、岩片多、そ ろい良	
198	土師器	SA1		甕	口縁部 ～胴部				橙	橙	横方向ナデ、口唇部に凹線、炭化物 微量付着	横方向のハケ目、横方向の ナデ	1mm以下の黒色粒、黒色針状、石 英わずか、1～2mmの岩片多、そ ろい良	
199	土師器	SA1		甕	胴部				にぶい黄橙	にぶい黄橙	斜方向のナデ、格子目タタキ	横方向ナデ、当具痕(同心円)	1mm以下の黒色粒少、岩片多、そ ろい良	
200	土師器	SA1		甕	底部		4.80		橙	明黄褐	ナデ、縦目痕、木葉底	ナデ	5mm程度の白色粒少、そろい不良、 1～2mmの白色粒、岩片多、そ ろい良	
201	土師器	SA1		甕	底部		2.00		橙	橙	縦方向のナデ、ナデ	ナデ、炭化物微量付着	1～2mmの白色粒少、そろい不良、 1mm以下の岩片わずか	
202	土師器	SA1		坏	底部		7.80		浅黄橙	浅黄橙	横方向ナデ、ナデ(底部)	ナデか、剥落著しい	1～2mmの岩片少、そろい不良	
203	土師器	H1	IV	甕	口縁部 ～胴部	23.00			橙	橙	口縁部ナデ、胴部縦・斜め方向のハ ケ目(風化ぎみ)	口縁部ナデ、横方向のハケ 目、指頭圧痕	5mm以上の岩片こくわずか、1～ 2mmの白色粒多、岩片多、そろ い良	
204	土師器	E1	III	甕	口縁部 ～頸部				にぶい橙	にぶい橙	横方向ナデ、斜方向ハケ目	横方向ハケ目、ナデ、一部 黒変	1～2mmの白色粒、石英粒、岩片少、 雲母片わずか、そろい良	
205	土師器	H1	III	甕	口縁部 ～頸部				橙	橙	横方向ナデ、斜方向ハケ目	横方向ナデ(風化)、横方向 ハケ目	1～2mmの白色粒、石英粒少、雲 母片わずか、岩片多、そろい良	
206	土師器	H2	IV	甕	口縁部 ～胴部				橙	橙	口縁横方向ナデ(風化著しい)、胴 部斜方向のハケ目	口縁横方向ナデ(風化著し い)、横方向のハケ目、わず かに黒変	1～2mmの白色粒多、岩片多、1 mm以下の黒色粒少、そろい良	
207	土師器	H1	IV	甕	胴部～ 底部				橙	橙	斜方向のハケ目、わずかに炭化物 付着	ナデ、全体に指頭圧痕、わ ずかに炭化物付着	1～2mmの岩片多、白色粒、黒色 粒少、そろい良、1mm以下の雲 母片こくわずか	
208	土師器	H2	IV	甕	底部		5.15		にぶい橙	明黄褐	粗いタタキ、炭化物微量付着	ナデ、剥落著しい、黒変あ り	2mm以上の岩片多、1～2mmの 岩片多、そろい不良	
209	土師器	H1	IV	甕	底部		4.40		橙	橙	縦方向のナデ(ヘラ状工具)、ナデ	ナデ	2mm以上の岩片わずか、1～2 mmの岩片多、そろい良	
210	土師器	C1	III	坏	底部		6.50		明黄褐	明黄褐	回転ナデか(風化)、底部ナデ、炭化 物付着	回転ナデ	1mm以下の岩片少、そろい良	
211	土師器	C1	III	坏	底部		7.05		浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、底部ヘラ切りの後ナデ	回転ナデ	ほぼ精良、1～2mmの岩片こくわ ずか	
212	土師器	D1	III	坏	胴部～ 底部		7.50		灰白	灰白	回転ナデ(風化ぎみ)	回転ナデ	ほぼ精良、微細な岩片、こくわず か	
213	土師器	I1	III	坏	底部		8.80		にぶい黄橙	橙	横方向ナデ、ナデ(底部)	横方向ナデ	1mm以下の白色粒、黒色粒多、そ ろい良、石英わずか	
214	土師器	H1	IV	坏	底部		10.50		橙	浅黄橙	回転ナデ、底部ナデ、炭化物少量 付着	回転ナデ、ナデ、炭化物少 量付着	1mm以下の黒色粒多、1～2mm の岩片多、7mmの石英角礫1個	
215	土師器			坏	口縁部 ～底部	12.90	9.10		にぶい黄橙	にぶい黄橙	横方向のナデ、全体に炭化物少量 付着	横方向ナデ、風化気味、炭 化物微量付着	1mm以下の黒色針状、石英、雲 母こくわずか、1～2mmの岩片多、 そろい良	
216	土師器	H1	III	坏蓋	口縁部 ～天井 部	19.00			浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ、外周に凹線(風化)、全体 に炭化物付着	回転ナデ(風化著しい)、全 体に炭化物少量付着	1mm以下の黒色粒多、1～2mm の岩片多、そろい良	
217	土師器	H1	III	坏蓋	天井部				にぶい黄橙	橙	回転ナデ、わずかに黒変	回転ナデ	1mm以下の黒色粒、白色粒多、1 ～2mmの岩片多、そろい良	
218	須恵器	H1	III	坏蓋	口縁部 ～天井 部	14.40			灰	灰	回転ナデ	回転ナデ	微細な石英粒多数、そろい良	
219	須恵器	H1	III	坏蓋	口縁部 ～天井 部				灰	灰	回転ナデ	回転ナデ	ほぼ精良、微細な石英粒少	
220	須恵器	H1	III	坏蓋	口縁部 ～胴部	14.00			灰	灰	回転ナデ	回転ナデ	ほぼ精良、4mm程度の石英粒わず か、微細石英粒少、そろい良	
221	須恵器	A1	III	高台付 壺	胴部～ 底部	12.20	7.40	4.40	オリーブ灰	オリーブ灰	回転ナデ、一部自然釉	回転ナデ	精良	

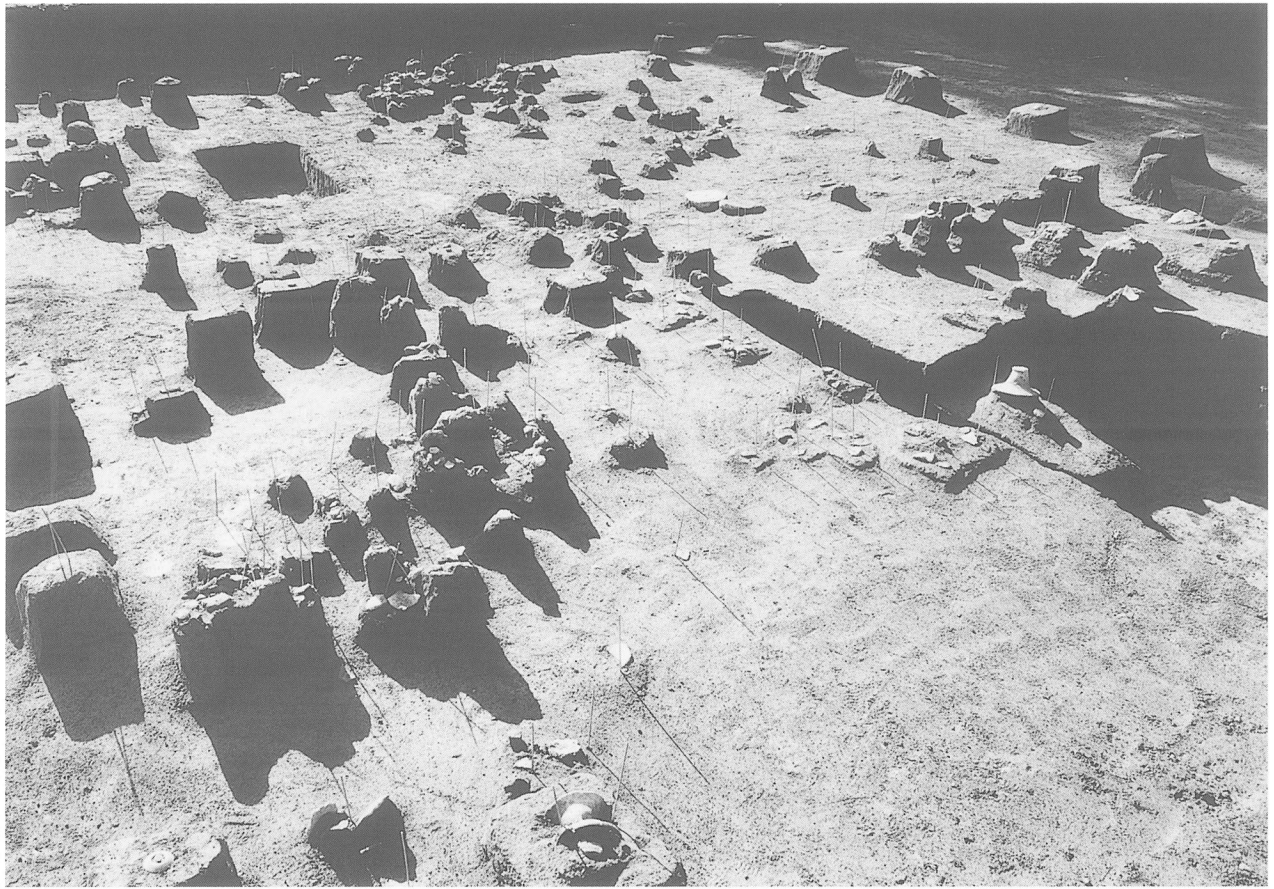
第10表 野門遺跡土器観察表(5)



図版1 弥生時代 竪穴住居跡と土坑 SC7・8 (上が北西)



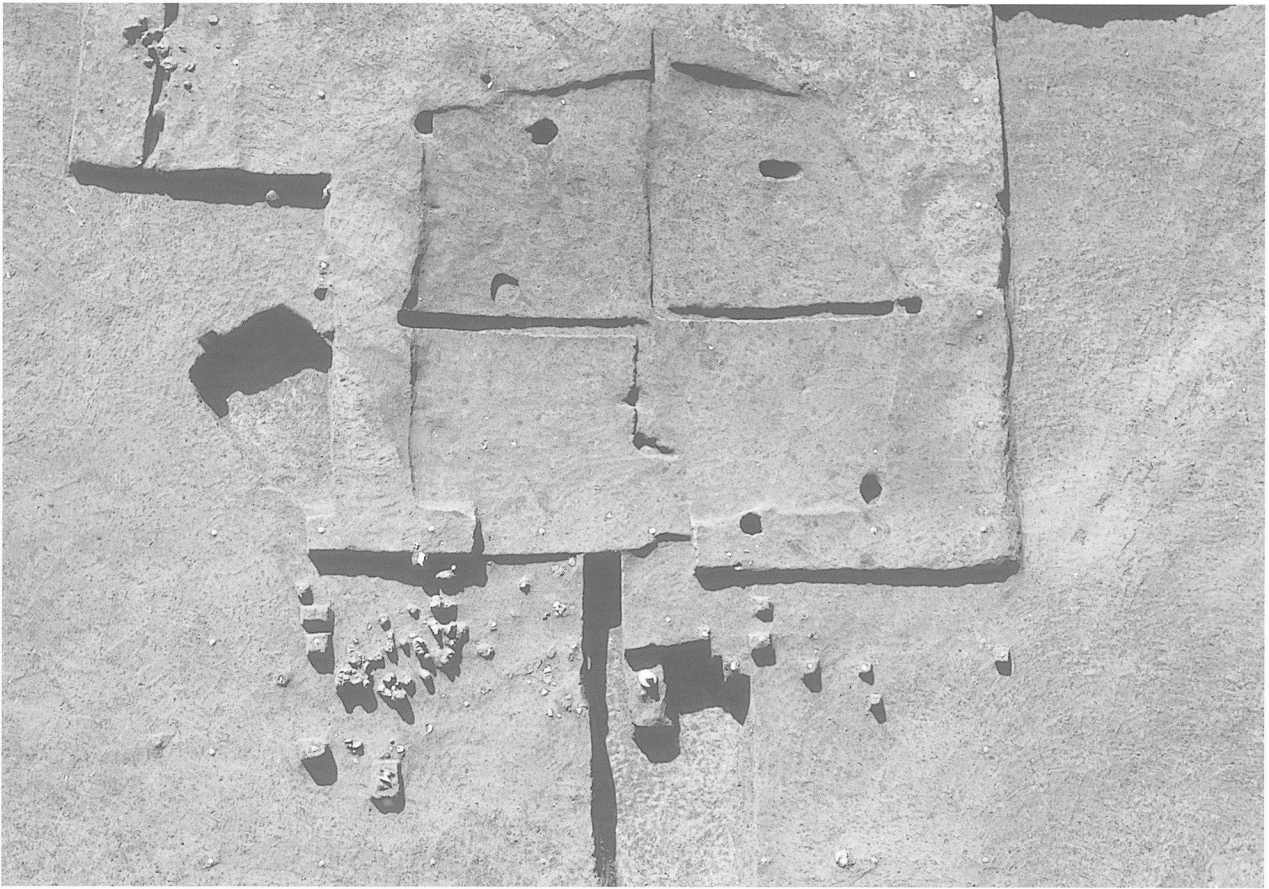
図版2 弥生時代 竪穴住居跡周辺の弥生土器検出状況 (遺物番号114)



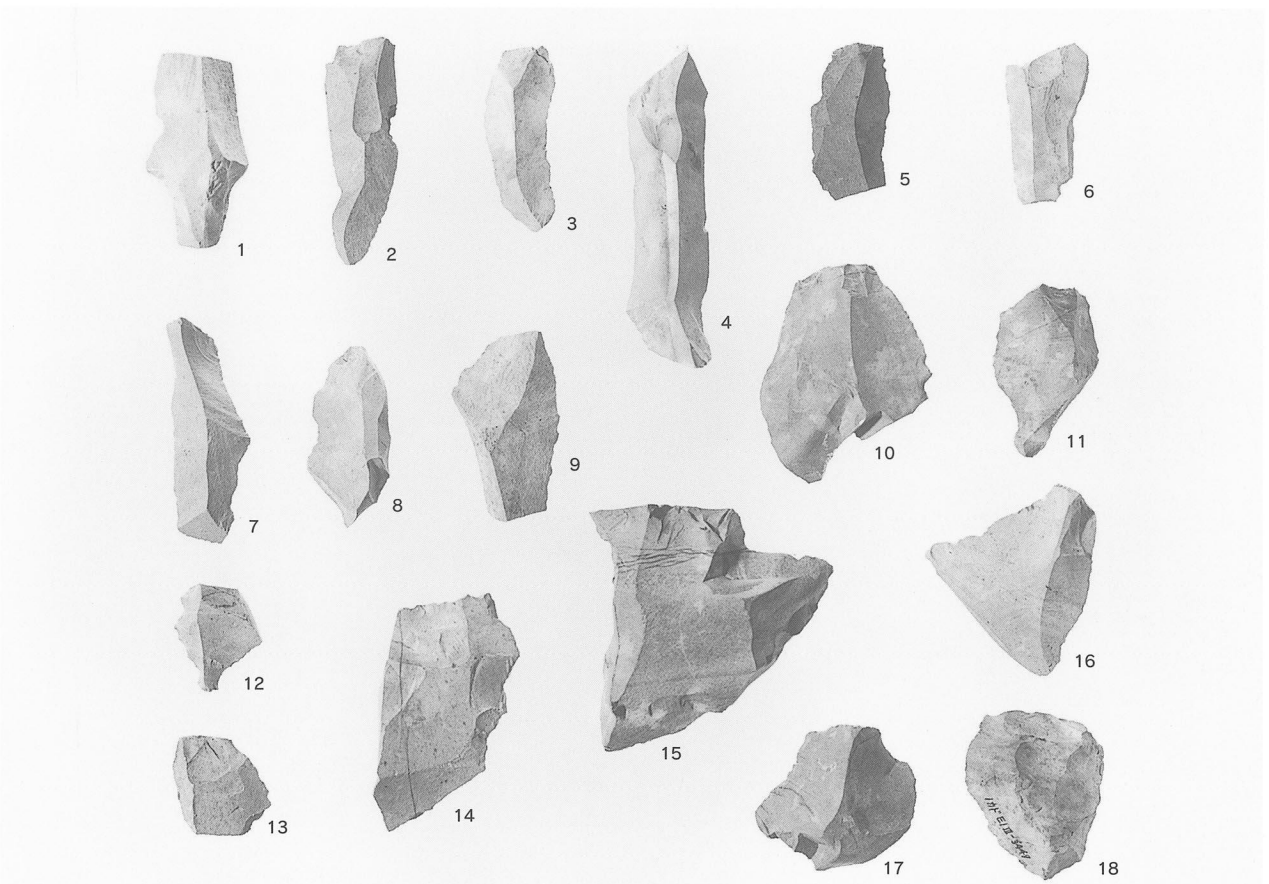
図版3 古墳時代 遺物・焼土集中区（北東より）



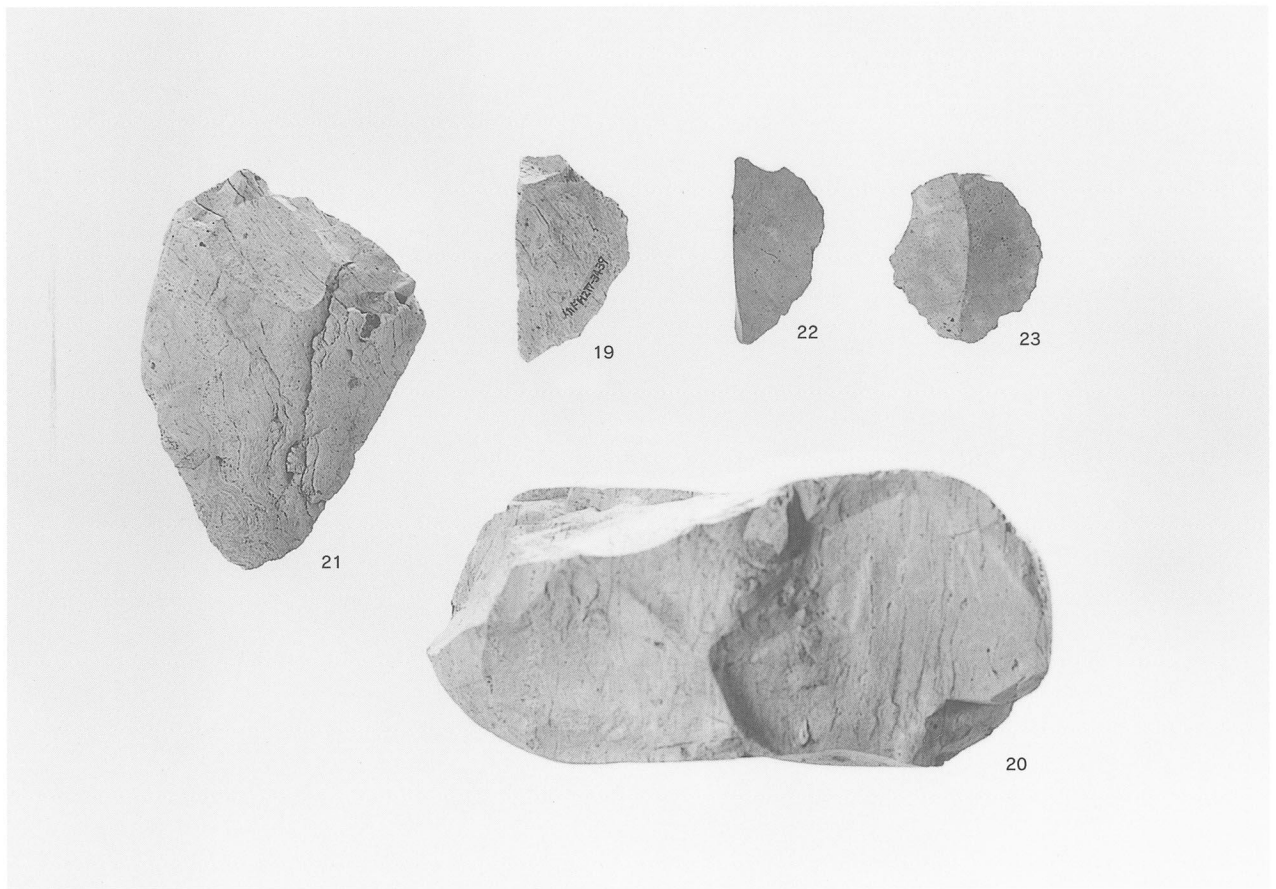
図版4 古墳時代 遺物・焼土集中区 遺物出土状況（遺物番号192）



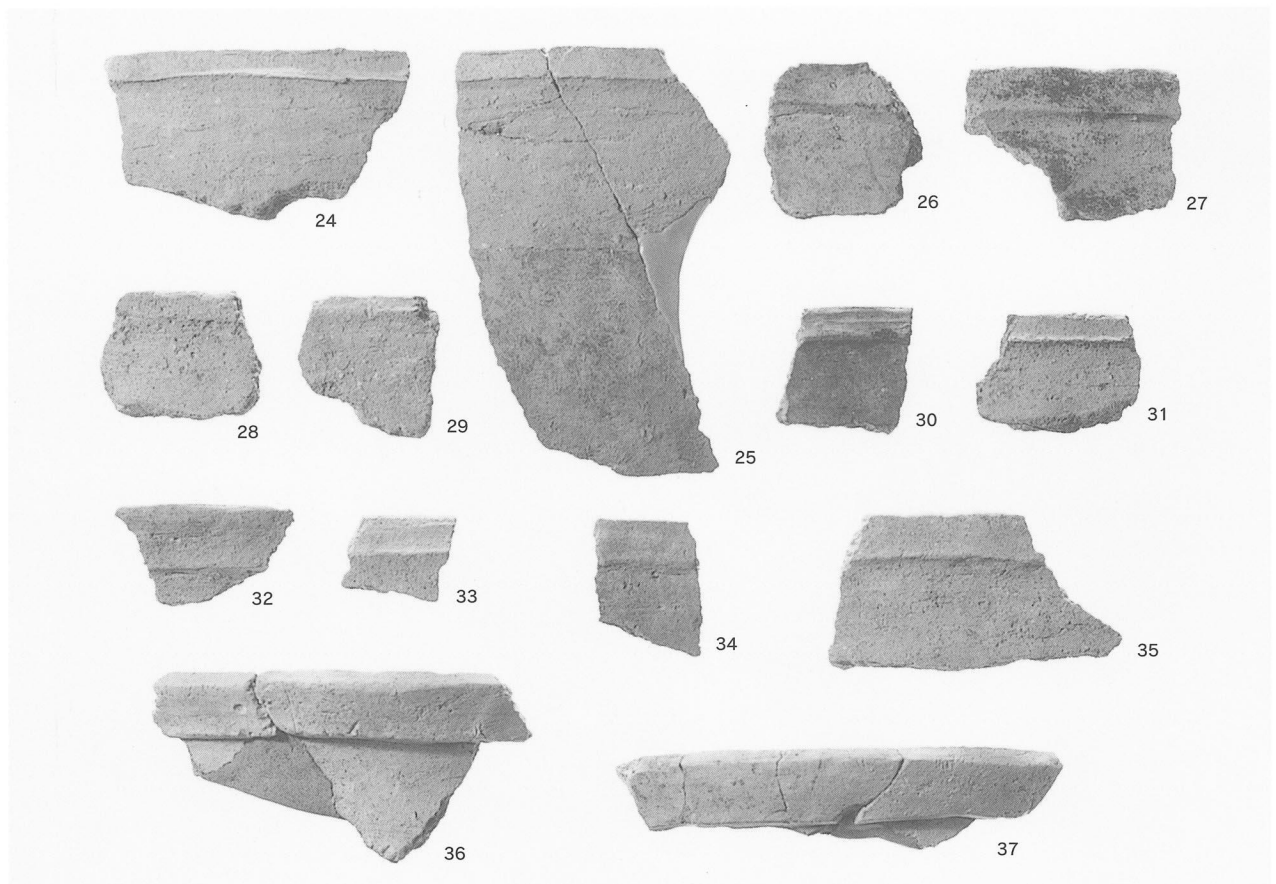
図版5 古代 竪穴住居跡完掘状況（上が南西）下部は古墳時代 遺物・焼土集中区



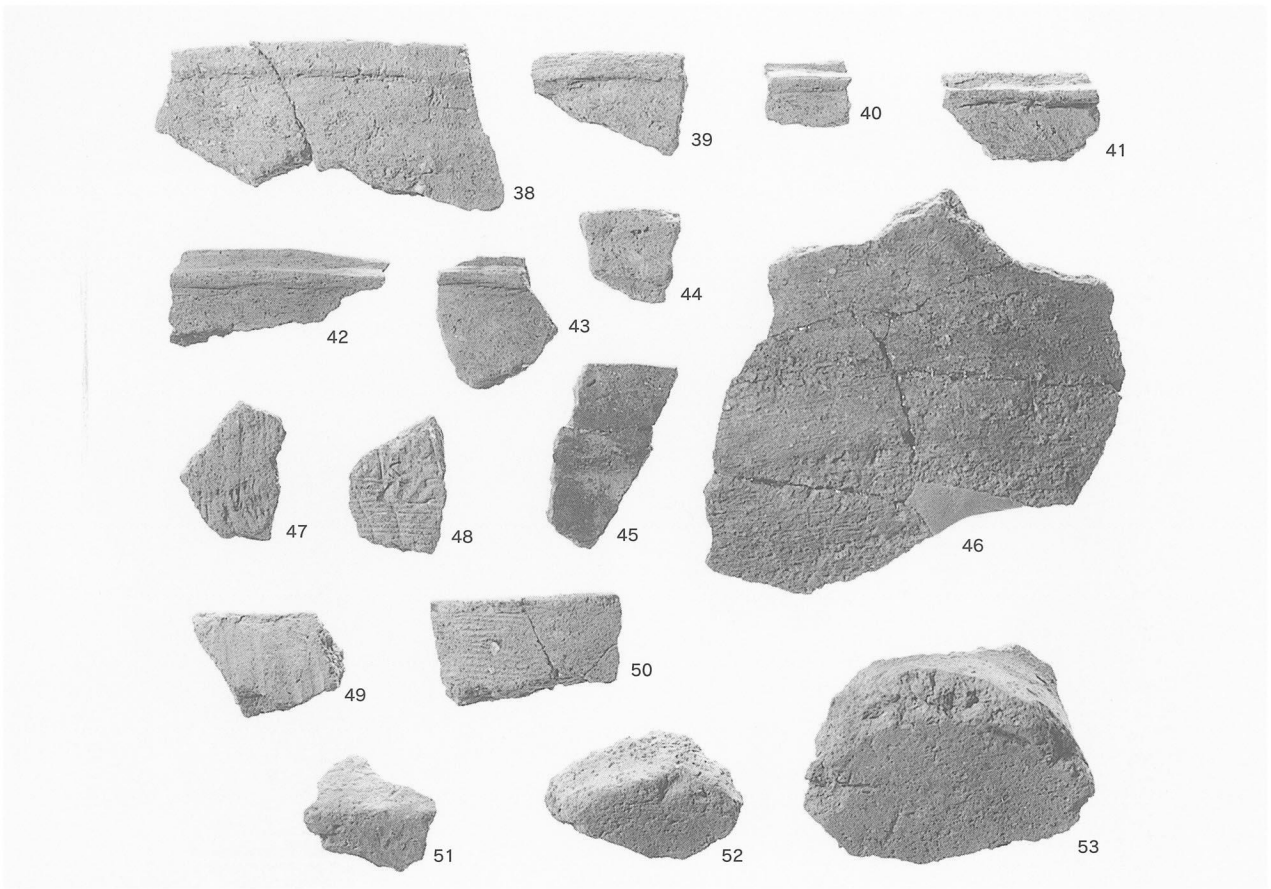
図版6 旧石器時代遺物（1）



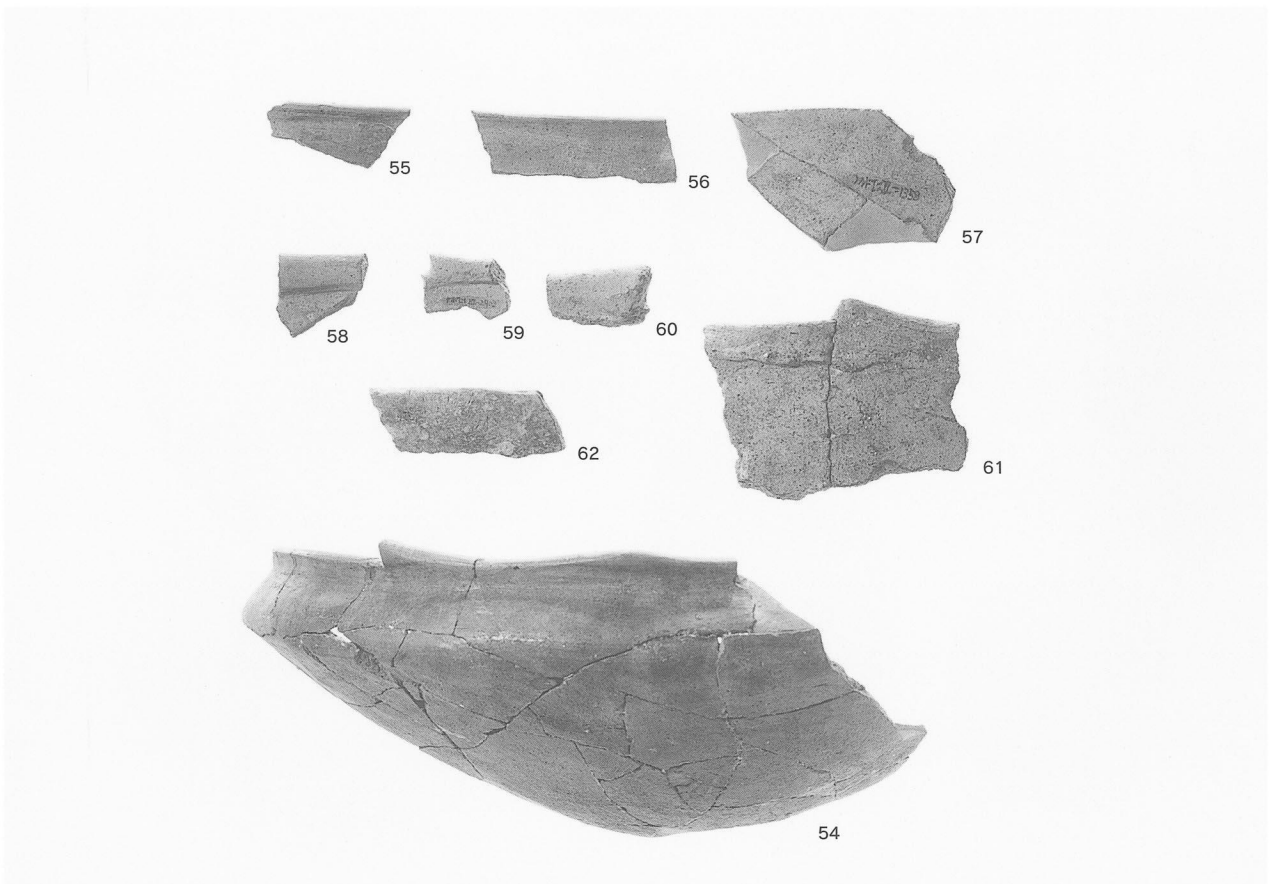
図版7 旧石器時代遺物 (2)



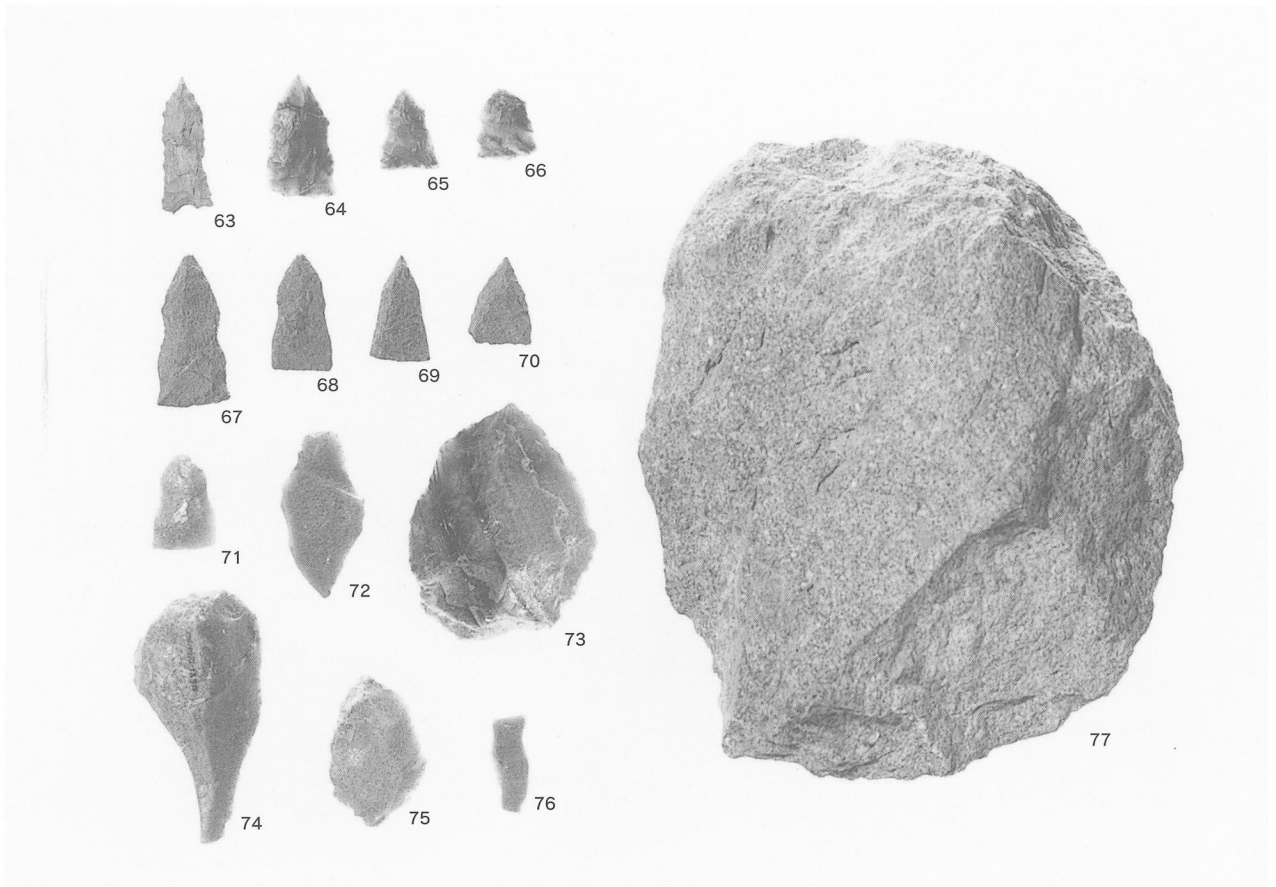
図版8 縄文時代晩期 縄文土器 (1)



図版9 縄文時代晩期 縄文土器 (2)



図版10 縄文時代晩期 縄文土器 (3)



図版11 縄文時代石器（1） 石鏃、礫器ほか



図版12 縄文時代石器（2） 石錘、磨・敲石



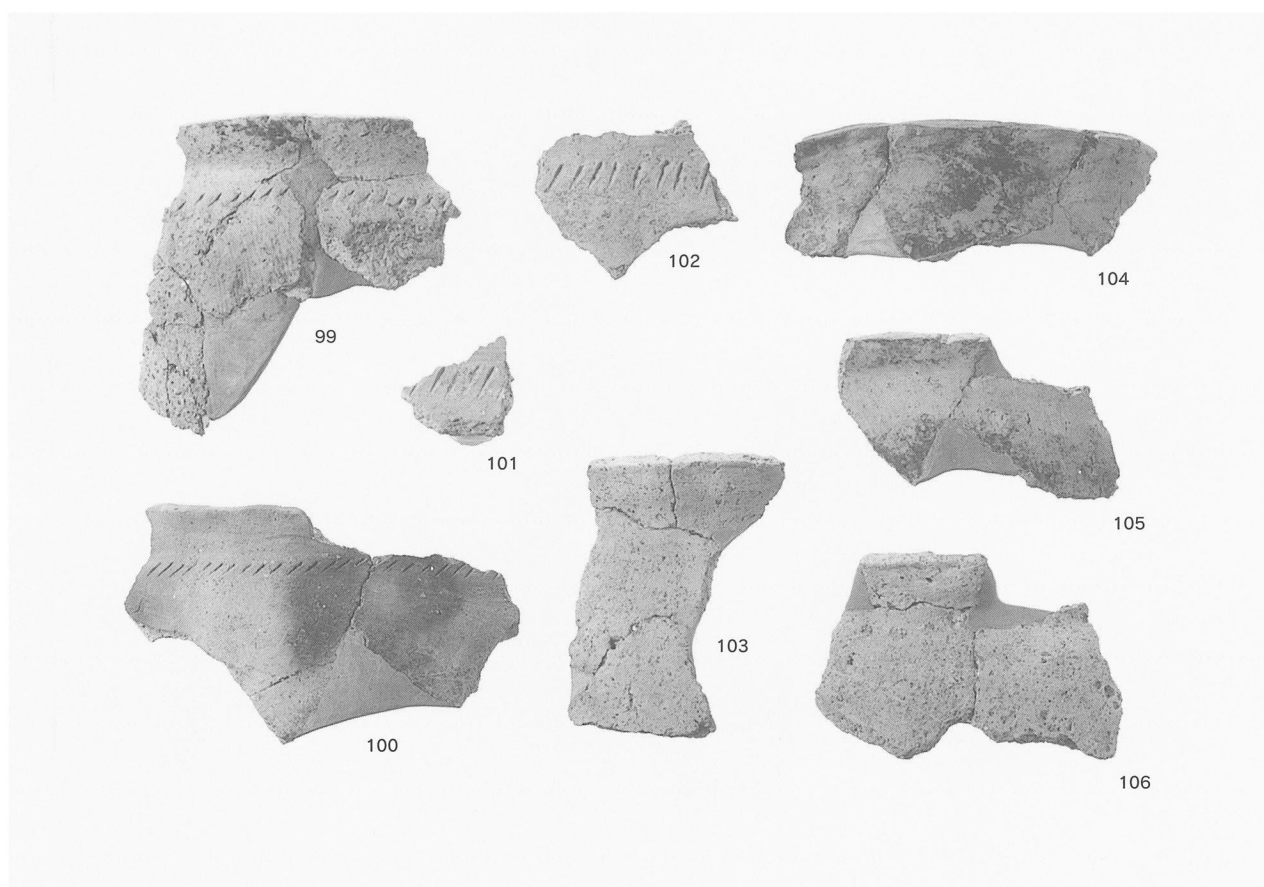
図版13 弥生時代 竪穴住居跡及び周辺出土遺物



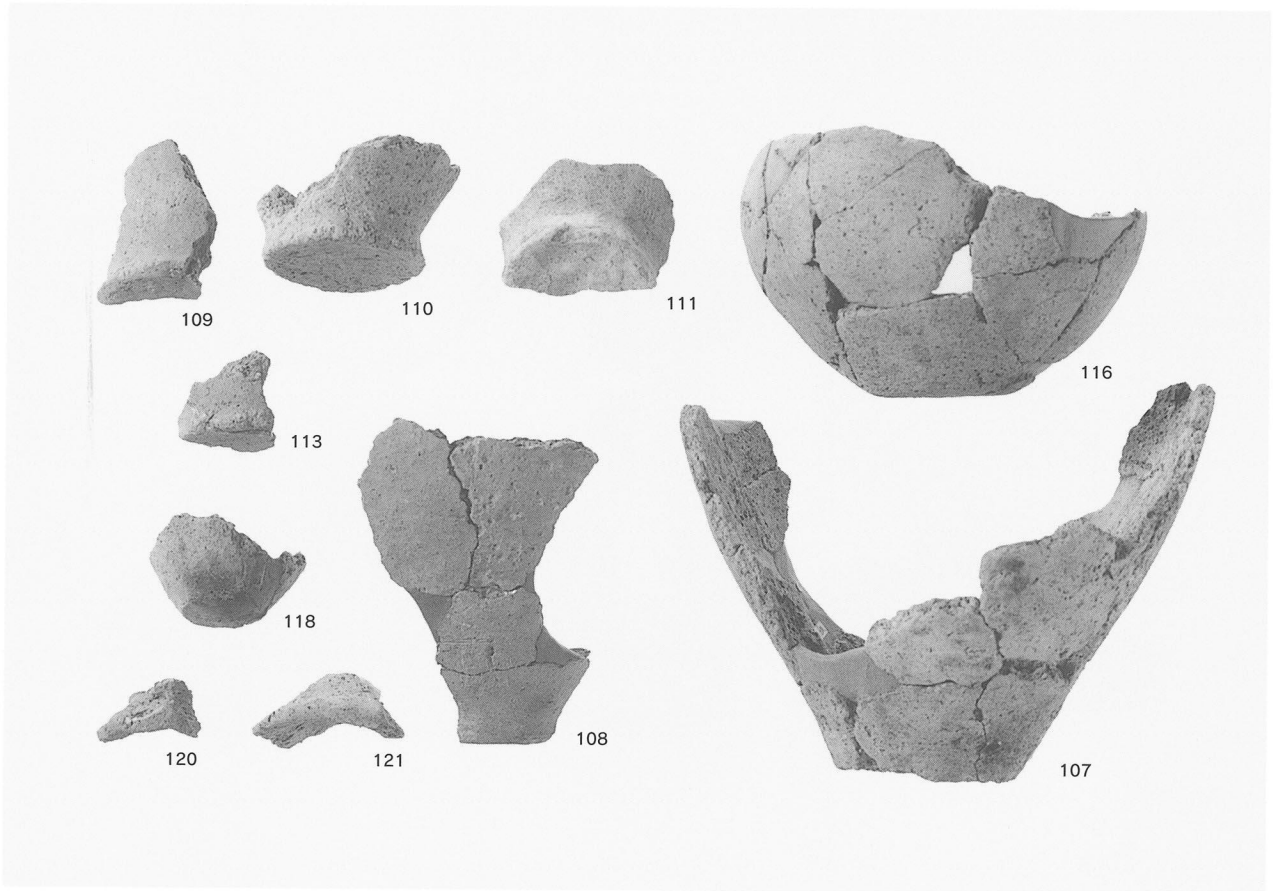
図版14 弥生時代 炭化物集中土坑周辺出土遺物



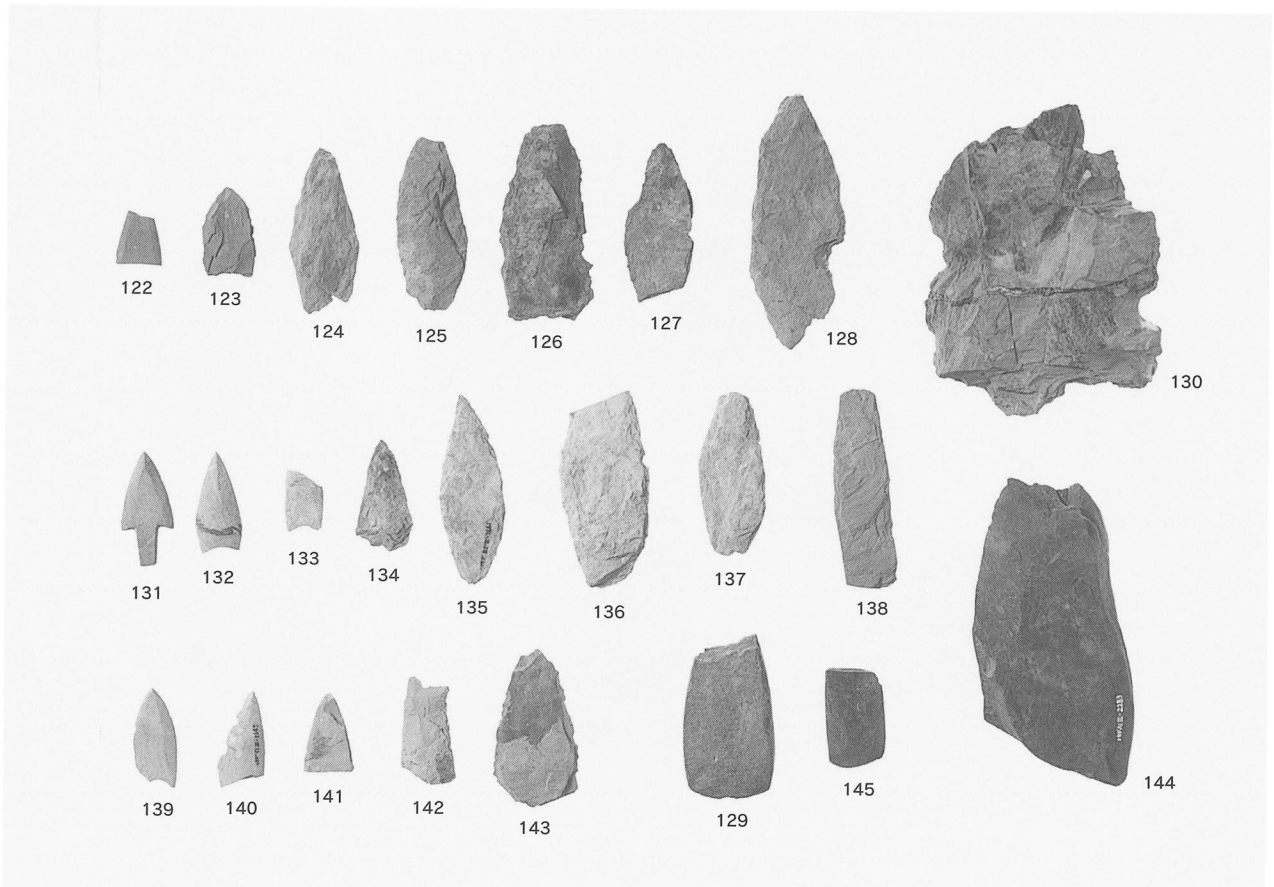
图版15 弥生時代 弥生土器（1）



图版16 弥生時代 弥生土器（2）



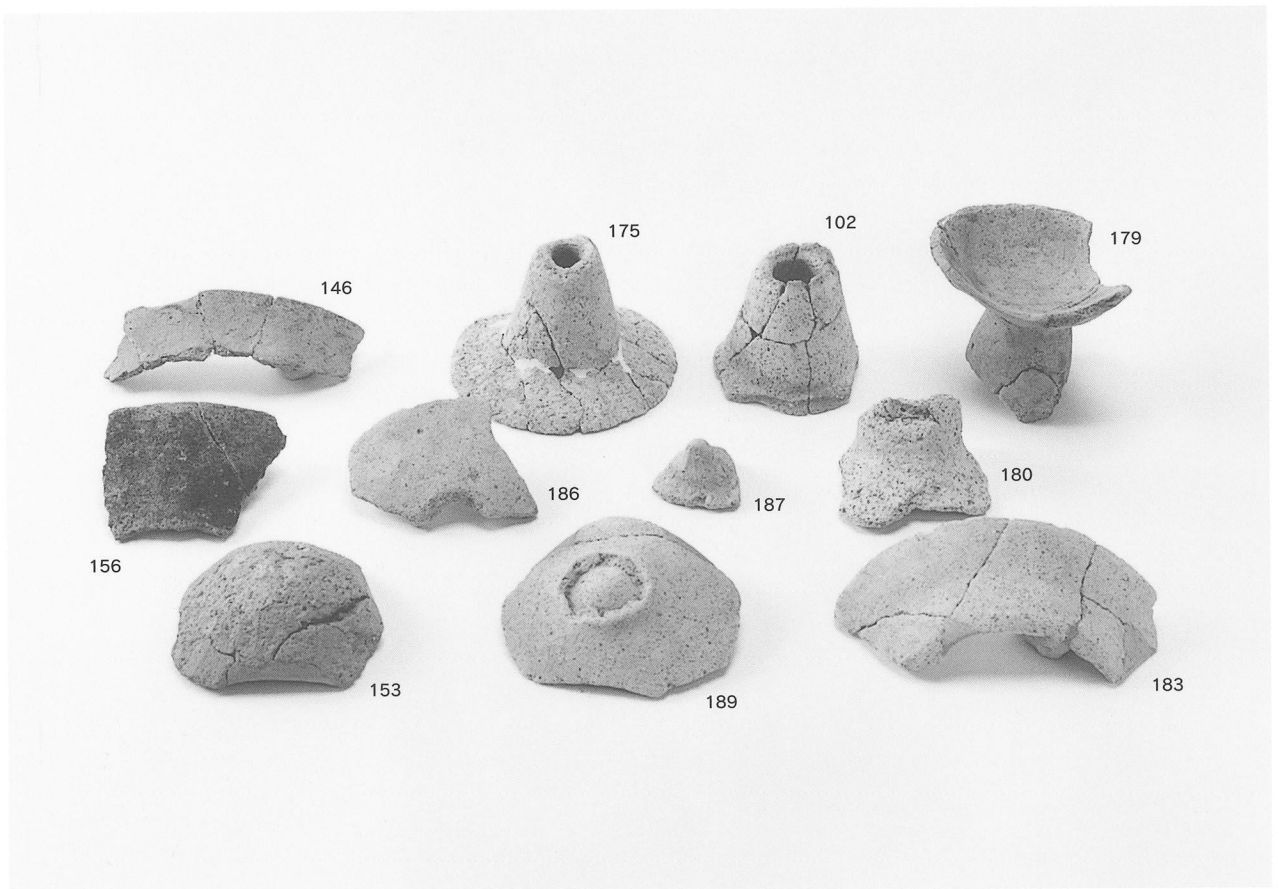
図版17 弥生時代 弥生土器 (3)



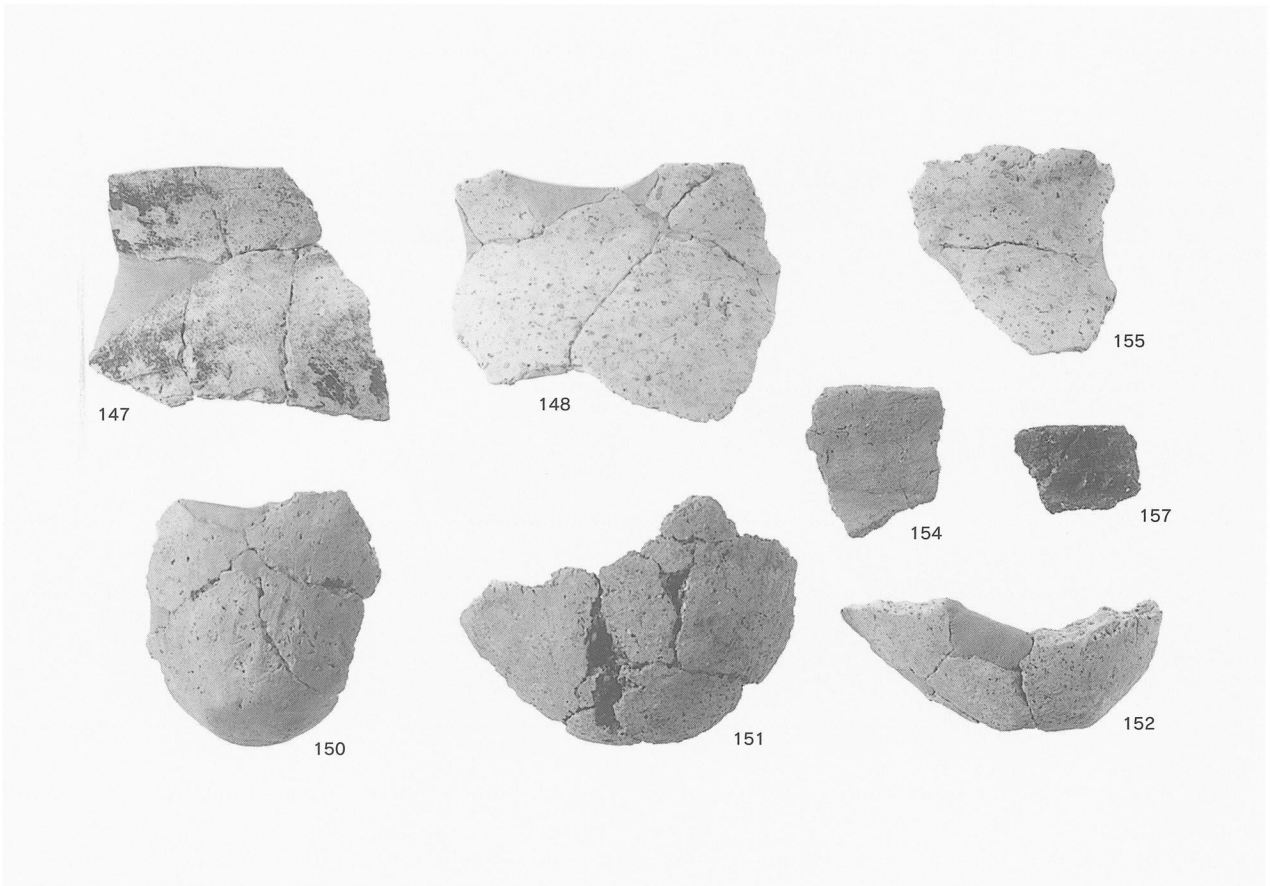
図版18 弥生時代石器 磨製石鏃、磨製石斧、砥石ほか



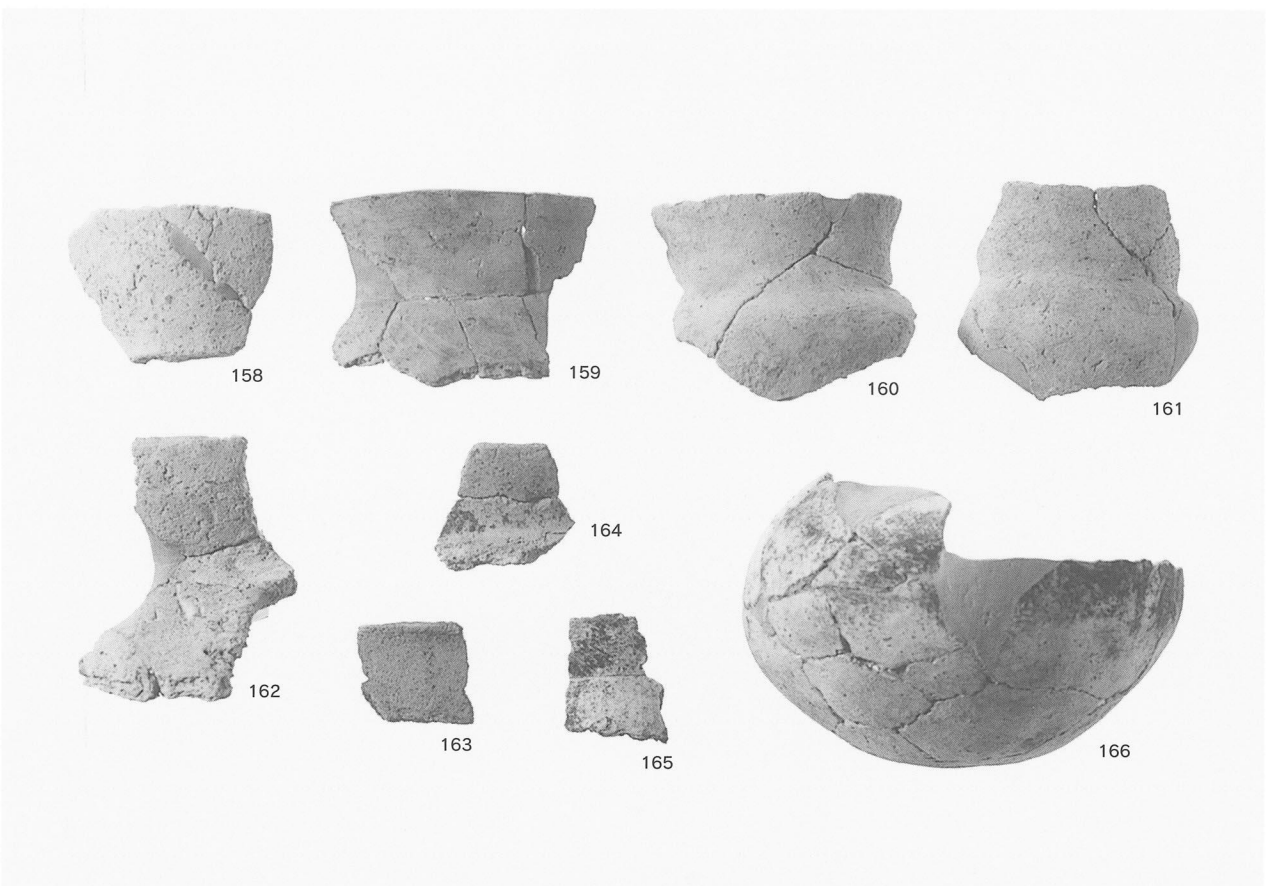
图版19 古墳時代 土師器 (1) 遺物・焼土集中区北部



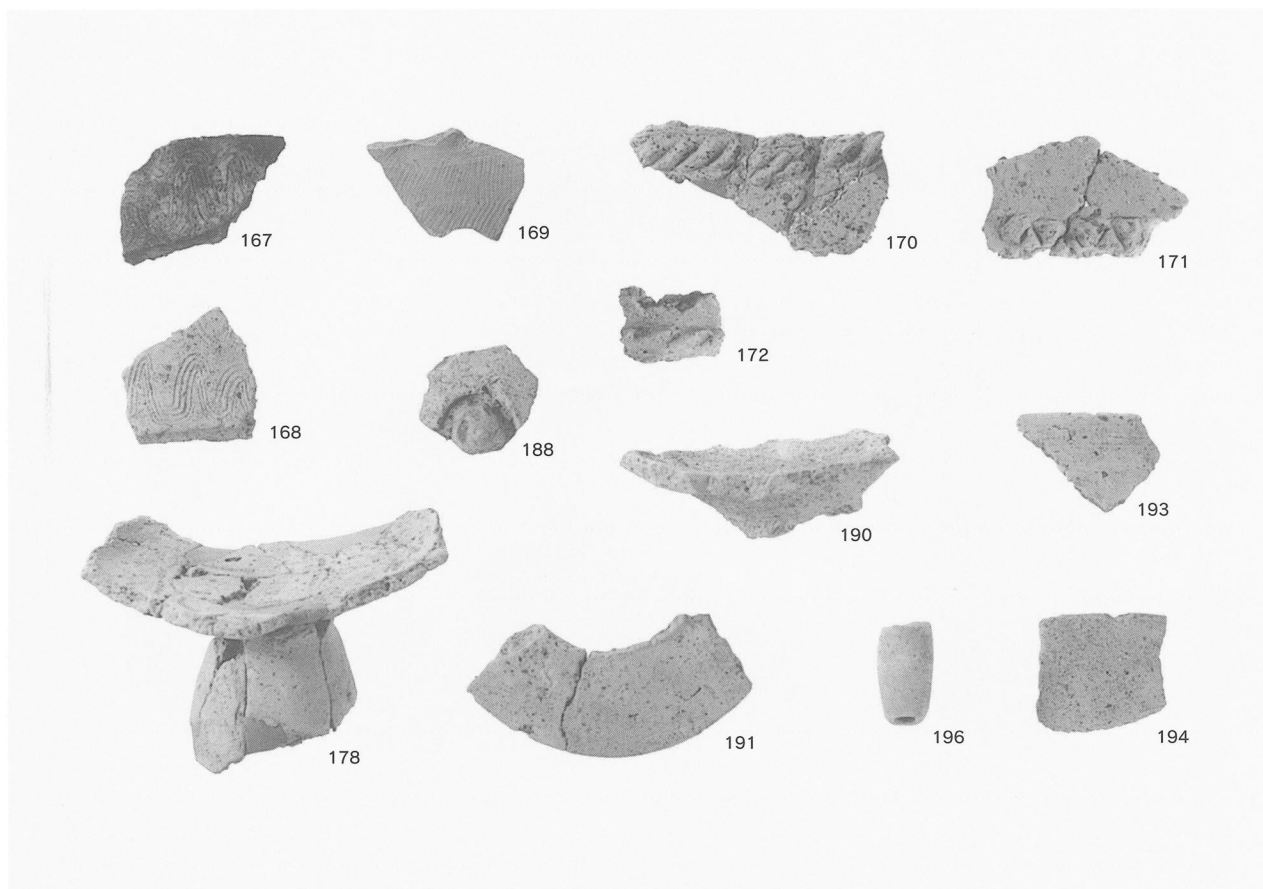
图版20 古墳時代 土師器 (2) 遺物・焼土集中区南部



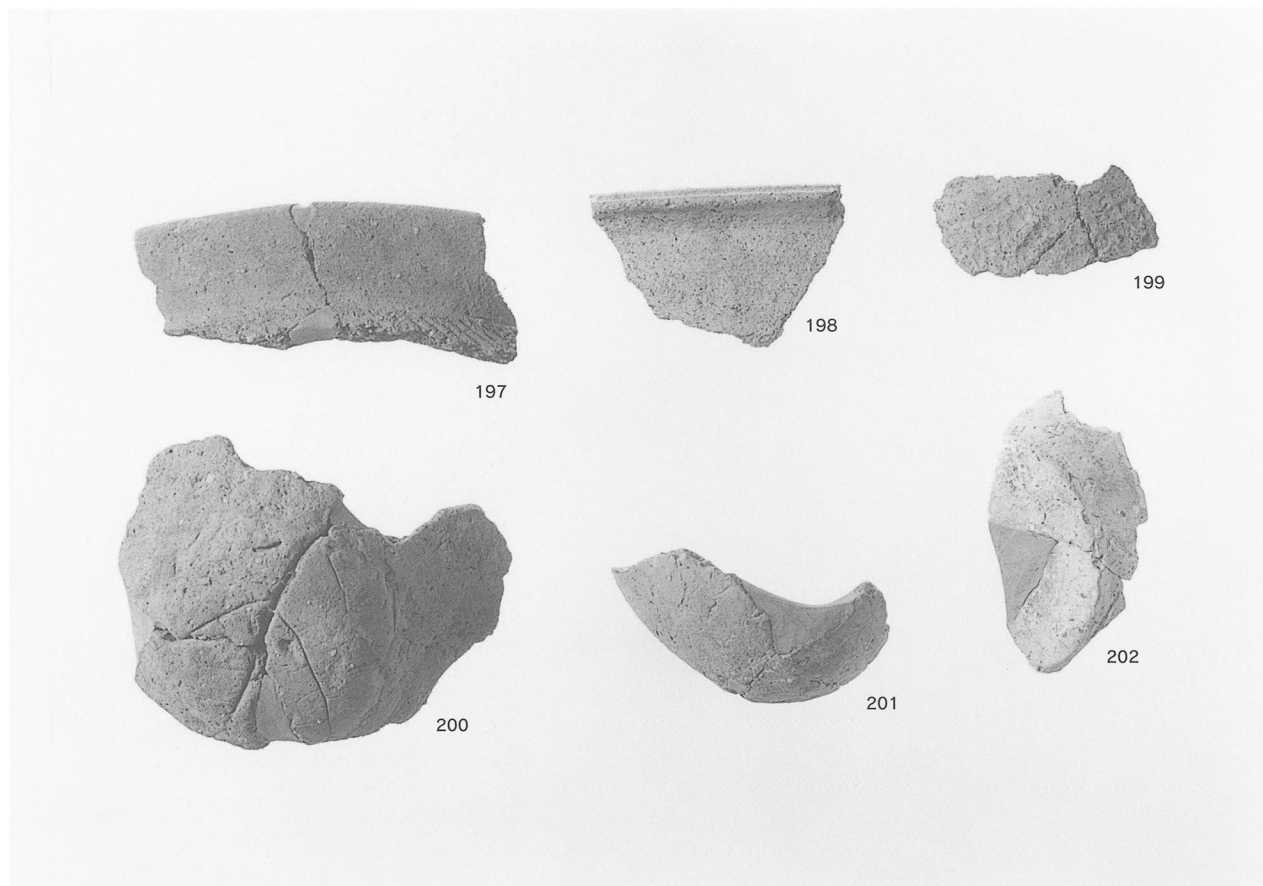
図版21 古墳時代 土師器 (3) 甕



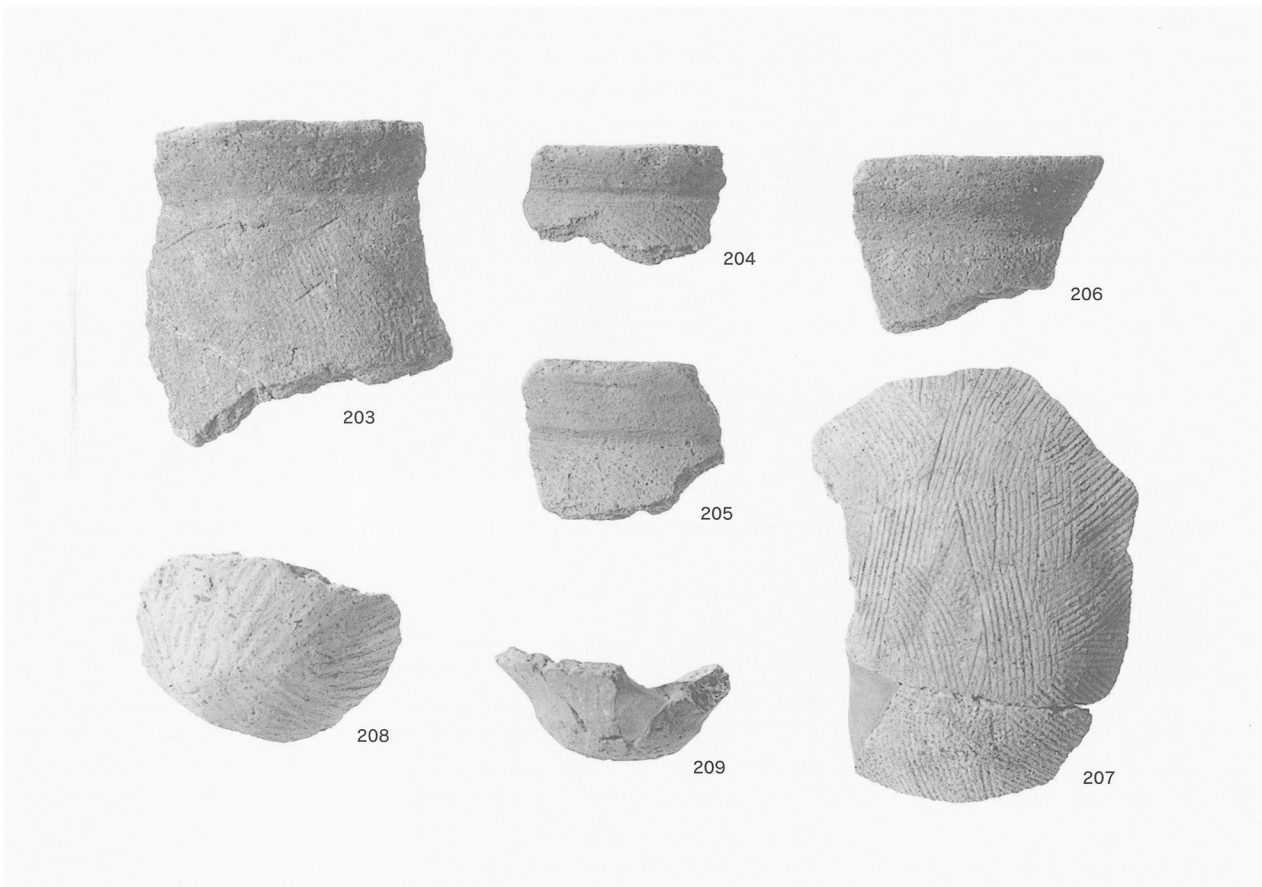
図版22 古墳時代 土師器 (4) 壺



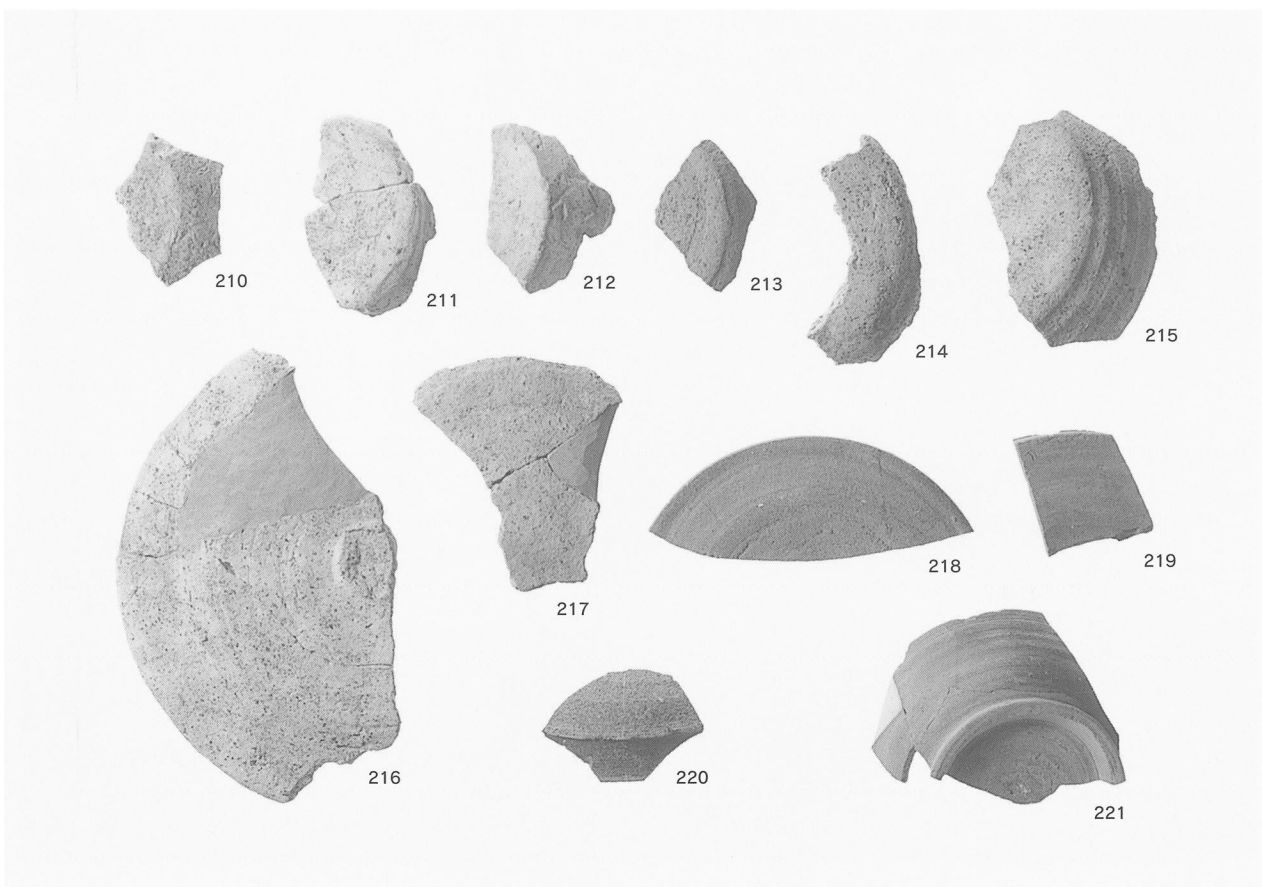
図版23 古墳時代 土師器ほか (5)



図版24 古代 竪穴住居跡出土遺物



图版25 古代 土師器 甕



图版26 古代 土師器、須惠器 坏·坏盖



図版27 赤木遺跡・野門遺跡発掘調査結果報告会 於 延岡植物園

報 告 書 抄 録

ふりがな	のかどいせき							
書名	野門遺跡							
副書名	一般国道10号延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第136集							
執筆編集担当者名	赤崎 広志							
編集機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地							
発行年月日	西暦2006年9月22日							
ふりがな	ふりがな	市町村	遺跡	北緯	経緯	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	コード	コード					
のかどいせき 野門遺跡	みやざき けん 宮崎県 のべおか し 延岡市 まつ やま まち 松山町 761-3他	45203		32° 35' 19"	131° 38' 18"	2004.9.27 ～ 2004.12.3	2,700m ²	一般国道10号 延岡道路建設
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
散布地 集落跡	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 古墳時代 古代	堅穴住居跡 遺物・焼土集中区 堅穴住居跡		旧石器 晩期土器・打製石器 弥生土器・磨製石鏃 土師器 土師器・須恵器		混在土層中の遺物群 複数の高坏と焼土の集中		

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第136集

野 門 遺 跡

一般国道10号延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2006年9月発行

宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地
TEL 0985(36)1171 FAX 0985(75)0660

印 刷 北一 株式会社

〒880-0903 宮崎市太田3丁目1-31
TEL 0985(51)5100 FAX 0985(53)5640
